

# 四街道市古屋城跡

—物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書 X X III —

平成28年9月

独立行政法人 都市再生機構  
公益財団法人 千葉県教育振興財団

よつ かい どう こ や じょう あと  
四街道市古屋城跡

— 物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書XXIII —



## 序 文

公益財団法人千葉県教育振興財団（文化財センター）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第761集として、独立行政法人都市再生機構の物井地区土地区画整理事業に伴って実施した四街道市古屋城跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、中世城郭の造構とともに古墳時代や奈良・平安時代の集落跡が発見されるなど、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々をはじめとする関係者の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成28年9月

公益財団法人 千葉県教育振興財団  
理 事 長 平 林 秀 介

## 凡　　例

- 1 本書は、独立行政法人都市再生機構による物井地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県四街道市物井字北ノ作 1119-1 ほかに位置する古屋城跡（遺跡コード 228 - 022）である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、独立行政法人都市再生機構の委託を受け、公益財團法人千葉県教育振興財団が実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の組織、担当者及び期間は第1章に記載した。
- 5 本書の執筆は、平成27年度に、主任上席文化財主事 糸川道行・木原高弘、上席文化財主事 田村 隆・香取正彦が担当した。
- 6 執筆分担は、糸川が第1章、木原が第2章、第3章第1節、第4章第1・2節、第5章第1節、第6章第1節、第7章、田村が第4章第3節・第5章第2節・第6章第2節の石器、香取が第3章第2節、第4章第3節、第5章第2・3節、第6章第2・3節である。
- 7 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、四街道市教育委員会、独立行政法人都市再生機構の御指導・御協力を得た。
- 8 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。

第1図 国土地理院発行 1／50,000 地形図 「成田」(NI-54-19-10-3)

「東金」(NI-54-19-11-4)・「佐倉」(NI-54-19-14)・「千葉」(NI-54-19-15)

第4～9図 富士総合コンサルタント株式会社委託作成 (平成8年度)

- 9 図版1の遺跡周辺航空写真は、京葉測量株式会社による昭和44年3月撮影のものである。
- 10 図版25は、古屋城址公園整備工事の状況を、独立行政法人都市再生機構の承諾を得て撮影し、掲載したものである。
- 11 本書で使用した座標は、日本測地系に基づく平面直角座標（国家標準直角座標第IX系）で、図面の方針はすべてその座標北を示す。
- 12 遺構内の土質や遺物の性質等の表現は、以下のとおりである。

### 遺構



カマド焼集材（山砂・粘土）



カマド内火床部



住居床土等硬化面

### 遺物



(表面) 土器・陶磁器



(表面) 陶器



(表面) 黒色処理



(表面) 木彩

# 本文目次

第1章 はじめに.....	1
第1節 調査の概要.....	1
1 調査の経緯と経過.....	1
2 調査・整理の概要.....	5
第2節 遺跡の位置と環境.....	7
1 遺跡の位置と概要.....	7
2 周辺の遺跡.....	14
第2章 平成 10 年度（1）調査区の成果.....	18
第1節 概要.....	18
第3章 平成 13 年度（2）調査区の成果.....	18
第1節 中・近世.....	18
第2節 古墳時代.....	21
第4章 平成 16 年度（3）調査区の成果.....	23
第1節 中・近世.....	23
第2節 粘土採掘坑.....	30
第3節 繩文時代.....	32
第5章 平成 19 年度（4）調査区の成果.....	34
第1節 中・近世.....	34
第2節 繩文時代.....	36
第3節 奈良・平安時代.....	41
第6章 平成 27 年度（5）調査区の成果.....	46
第1節 中・近世.....	46
第2節 繩文時代.....	52
第3節 古墳・奈良・平安時代.....	55
第7章 まとめ.....	64
報告書抄録.....	卷末

## 挿 図 目 次

第1図 古屋城跡の位置と周辺の遺跡	2	第25図 (4) SB002	36
第2図 物井地区遺跡分布図	4	第26図 (4) SD001	36
第3図 グリッド設定法	6	第27図 (4) 調査区縄文時代土坑	38
第4図 古屋城跡・北ノ作遺跡測量図と区割り方 眼図	8	第28図 (4) 調査区出土縄文土器	40
第5図 古屋城跡概念図	9	第29図 (4) 調査区出土縄文時代石器	40
第6図 古屋城跡・北ノ作遺跡鳥瞰図	10	第30図 (4) SI001	42
第7図 古屋城跡鳥瞰図	11	第31図 (4) SI002	43
第8図 年度別調査範囲及び確認調査区位置図	13	第32図 (4) SI003・004	45
第9図 古屋城跡調査全体図	14	第33図 (4) SB001	46
第10図 (2) 調査区全体図	19	第34図 (5) 調査区全体図	47
第11図 (2) 調査区土層断面図	20	第35図 (5) 調査区土層断面図	48
第12図 (2) 調査区出土中・近世遺物	22	第36図 (5) SD001 A・B、(5) 土壙 A～C、(5) 地山 整形 A	49
第13図 (2) SI001	22	第37図 (5) SD001A・B 出土遺物	51
第14図 (3) 調査区全体図	24	第38図 (5) SX001	53
第15図 (3) 地山整形 A、(3) SX001	25	第39図 (5) SK001	53
第16図 (3) 地山整形 B・C、(3) SX002・003 (1)	26	第40図 (5) 調査区遺構外出土中・近世遺物	53
		第41図 (5) 調査区出土縄文土器	54
第17図 (3) 地山整形 B・C、(3) SX002・003 (2)	27	第42図 (5) 調査区出土縄文時代石器	54
		第43図 (5) SI001 (1)	56
第18図 (3) SK001～003	29	第44図 (5) SI001 (2)	57
第19図 (3) 調査区出土中・近世遺物	30	第45図 (5) SI002	60
第20図 (3) SX004	31	第46図 (5) SI003	60
第21図 (3) SK004～007	33	第47図 (5) 調査区遺構外出土古墳、奈良・平安 時代土器	61
第22図 (3) SK008～013	33	第48図 古屋城跡内現況撮影方向	66
第23図 (3) 調査区出土縄文時代遺物	34		
第24図 (4) 調査区全体図	35		

## 表 目 次

第1表 周辺の遺跡一覧表	3	第4表 (5) 調査区出土古墳、奈良・平安時代土器 観察表	62
第2表 (2) 調査区出土古墳時代土器観察表	22		
第3表 (4) 調査区出土奈良・平安時代土器観察表	45		

## 図版目次

- 図版1 古屋城跡周辺航空写真  
図版2 古屋城跡航空写真  
図版3 (2) 調査前風景、(2) Aトレンチ、  
(2) Bトレンチ、(2) Cトレンチ、  
(2) Dトレンチ、(2) SI001  
図版4 (3) 南側調査前風景、(3) 西側調査前風景、  
(3) 北側調査前風景  
図版5 (3) トレンチ1腰曲輪(i)、  
(3) トレンチ2腰曲輪(j) 南側、  
(3) トレンチ3腰曲輪(j) 北側、  
(3) トレンチ7腰曲輪(g) 西側、  
(3) トレンチ8腰曲輪(g)・(k)  
図版6 腰曲輪(i)、(3) 地山整形A、(3) SX001、  
(3) 地山整形B・C、(3) SX002  
図版7 (3) SX003、(3) SX004、  
(3) SX004セクション  
図版8 (3) SX001、(3) SX002、(3) SX003、  
(3) SX003セクション、  
(3) SX001・SK001～SK003、  
(3) SK004～SK006、(3) SK001、  
(3) SK001セクション  
図版9 (3) SK002、(3) SK002セクション、  
(3) SK003、(3) SK003セクション、  
(3) SK004、(3) SK004セクション、  
(3) SK005、(3) SK005セクション  
図版10 (3) SK006、(3) SK007、(3) SK008、  
(3) SK009、(3) SK010、(3) SK011、  
(3) SK012、(3) SK013  
図版11 (4) 調査前風景、(4) 全景、  
(4) SK001～SK005・SK012  
図版12 (4) SK004、(4) SK006、(4) SK007、  
(4) SK008、(4) SK009、(4) SK010、  
(4) SK011、(4) SB001  
図版13 (4) SD001・SI001、(4) SI002、  
(4) SI002遺物出土状況、(4) SI002カマド、  
(4) SI003、(4) SI003カマド  
図版14 (5) 調査前風景  
図版15 (5) SD001・土塁・整地層セクション東側、  
(5) SD001・土塁・整地層セクション西側  
図版16 (5) SD001北側、(5) SD001、  
(5) SD001南側  
図版17 (5) SX001・SD001、(5) SD001南側、  
図版18 (5) SD001南側セクション、(5) SX001、  
(5) SK001  
図版19 (5) SI001、(5) SI001カマド、  
(5) SI001カマド遺物出土状況、  
(5) SI002、(5) SI003  
図版20 (2) 中・近世遺物、(2) SI001出土土器、  
(3) 中・近世遺物、(3) 繩文時代遺物、  
(4) 繩文土器  
図版21 (4) 繩文時代石器、(4) 奈良・平安時代土器、  
(5) SD001出土中・近世遺物  
図版22 (5) SD001出土茶臼、(5) 遺構外中・近世  
遺物、(5) 繩文土器、(5) 繩文時代石器  
図版23 (5) 古墳・奈良・平安時代遺物(1)  
図版24 (5) 古墳・奈良・平安時代遺物(2)、  
銭貨  
図版25 城跡内遺構現況  
①遠景 ②主郭内 ③主郭北西部  
④主郭北側空堀 ⑤北部曲輪  
⑥主郭北西部 ⑦西側腰曲輪等  
⑧東側腰曲輪等

# 第1章 はじめに

## 第1節 調査の概要

### 1 調査の経緯と経過

独立行政法人都市再生機構が実施する千葉県四街道市物井地区土地区画整理事業地内には、多くの埋蔵文化財が分布する。その取扱いについては、千葉県教育委員会の指導のもとに、一部の保存地域を除き記録保存の措置が講じられることとなり、公益財団法人千葉県教育振興財團（平成17年に千葉県文化財センターから改組）が昭和59年から調査を実施し、調査成果として平成27年度までに21冊の報告書を刊行している<sup>1)</sup>。

記録保存の対象とされたのは、清水遺跡、新久遺跡、出口遺跡、出口・鐘塚遺跡、御山遺跡、小屋ノ内遺跡、稲荷塚遺跡、<sup>おひねづか</sup>椿山・呼戸遺跡、高堀遺跡、館ノ山遺跡、古屋城跡、北ノ作遺跡、鳩越遺跡、郷遺跡、中久喜遺跡の15遺跡である。

今回報告する古屋城跡は、事業地の北東側に位置する。発掘調査は平成10年度から開始され、平成27年度まで5次にわたって行われた。調査対象範囲は区画整理事業地を外周する都市計画道路等にかかる部分で、古屋城の本体である台地中央部からみて、北西及び南東側の台地縁辺・斜面部の合計8,830m<sup>2</sup>である。台地上部の城郭主要部に位置する宅地・畠地等は存置され、その他は盛土して現状保存され、古屋城址公園整備が進行中である。

発掘調査期間、担当者などは以下のとおりである。

平成10年度 (1) 調査部長 沼澤 豊

  北部調査事務所 所長 折原 繁

  調査期間 平成10年12月1日～平成10年12月25日

  調査面積 (規模) 900m<sup>2</sup> (確認調査) 上層90/900m<sup>2</sup>、下層36/900m<sup>2</sup>

    (本調査) 上層0m<sup>2</sup>、下層0m<sup>2</sup>

  調査担当者 副所長 加藤修司

平成13年度 (2) 調査部長 佐久間 豊

  北部調査事務所 所長 石田廣美

  調査期間 平成14年1月7日～平成14年1月28日

  調査面積 (規模) 2,480m<sup>2</sup> (確認調査) 上層488/2,480m<sup>2</sup>、下層12/2,480m<sup>2</sup>

    (本調査) 上層0m<sup>2</sup>、下層0m<sup>2</sup>

  調査担当者 千代田調査室長 萩原恭一

平成16年度 (3) 調査部長 矢戸三男

  北部調査事務所 所長 古内 茂

  調査期間 平成16年11月4日～平成16年12月16日

  調査面積 (規模) 2,732m<sup>2</sup> (確認調査) 上層282/2,732m<sup>2</sup>、下層0/2,732m<sup>2</sup>

    (本調査) 上層960m<sup>2</sup>、下層0m<sup>2</sup>

  調査担当者 上席研究員 岸本雅人



第1図 古屋城跡の位置と周辺の遺跡

○ 遺跡群・古墳群

● 集落跡

■ 城跡

(番号は第1表と対応)

0 (1/50,000) 2500m

第1表 周辺の遺跡一覧表

No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名
1	古屋城跡	21	和良比駆込城跡	41	謙信一夜城跡	61	神門城 / 内城跡
2	北ノ作遺跡	22	殿台館跡	42	忍台城跡	62	馬渡大内城跡
3	館ノ山遺跡	23	東向井城跡	43	志津大口館跡	63	馬渡船跡
4	入ノ台第2遺跡	24	中野戸崎砦跡	44	上崎城跡	64	馬渡馬場館跡
5	千代田遺跡V区	25	中台城跡	45	生谷砦跡	65	坂戸馬場館跡
6	千代田遺跡I区	26	作遺跡	46	生谷砦跡	66	坂戸尾牛城跡
7	池花古墳群	27	妙見砦跡	47	白井屋敷跡	67	岩富城跡
8	千代田古墳群	28	元源城跡	48	吉見城跡	68	原屋敷跡
9	清水遺跡・新久遺跡・ 出口遺跡(井古墳群)	29	中山城跡	49	岩名豪山砦跡	69	堀之内城跡
10	御山遺跡(古墳群)	30	福星寺館跡	50	下山砦跡	70	本佐倉城跡
11	鶴口遺跡	31	木出城跡	51	佐倉(鹿島)城跡	71	大堀館跡
12	太田・大篠塚遺跡	32	大原砦跡	52	高岡砦跡		
13	佐倉第3工業団地内遺跡群	33	小竹城跡	53	時崎城跡		
14	郷野遺跡	34	沢崎砦跡	54	石川館跡		
15	六崎大崎台遺跡	35	仲台砦跡	55	高崎の場遺跡		
16	鹿渡遺跡	36	白井城跡	56	城跡		
17	大山砦跡	37	白井城御屋敷跡	57	金部田城跡		
18	池ノ尻砦跡	38	田久里砦跡	58	太田要害城跡		
19	鹿渡城跡	39	白井田宿内砦跡	59	大篠塚城跡		
20	東作砦跡	40	福荷台砦跡	60	小篠塚城跡		

平成19年度 (4) 検査研究部長 矢戸三男

北部検査事務所 所長 豊田佳伸

検査期間 平成19年9月3日～平成19年9月28日

検査面積 (規模) 1,250m<sup>2</sup> (確認検査) 上層 180/1,250m<sup>2</sup>、下層 8 / 1,250m<sup>2</sup>(本検査) 上層 1,250m<sup>2</sup>、下層 0m<sup>2</sup>

検査担当者 上席研究員 土屋潤一郎

平成27年度 (5) 文化財センター長 小久賀隆史

整理課長 岸本雅人

検査期間 平成27年5月13日～平成27年7月31日

検査面積 (規模) 1,468m<sup>2</sup> (確認検査) 上層 621/1,468m<sup>2</sup>、下層 32 / 1,468m<sup>2</sup>(本検査) 上層 1,030m<sup>2</sup>、下層 0m<sup>2</sup>

検査担当者 主任上席文化財主事 麻生正信、糸川道行

整理作業は平成27年度に行い、平成28年度に報告書を刊行した。

平成27年度 文化財センター長 小久賀隆史

整理課長 岸本雅人

整理期間 平成27年9月1日～平成28年3月31日

整理内容 水洗・注記～編集

整理担当者 主任上席研究員 木原高弘、上席研究員 田村 隆、香取正彦

平成28年度 文化財センター長 上守秀明

整理課長 山口典子

内 容 報告書印刷・刊行

担当者 主任上席文化財主事 井上哲朗



第2図 物井地区遺跡分布図（1／1,000）

## 2 調査・整理の概要（第3～9図）

発掘調査に先立って、平成8年度に北ノ作遺跡の発掘調査に伴い、東部の中世城館跡と関連するとみられたため、併せて地形測量調査を行なった。旧住宅・都市整備公団が作成した1/500地形図を基に、城跡部分には50cmの等高線を加えた地形測量図及び概念図（第4・5図）、鳥瞰図（第6・7図）を作成した。

平成10年度調査区（1）は、古屋城の南東側に隣接する谷頭部の900m<sup>2</sup>を対象に調査が実施された。上層の確認調査面積は対象面積の10%の90m<sup>2</sup>である。全体の様相を把握できる7か所の細長い発掘区（トレンチ）を設定して調査を実施したが、遺構は検出されず、中世の陶磁器片が少量出土したのみであった。下層の確認調査面積は対象面積の4%である36m<sup>2</sup>である。2m×2mの方形の発掘区を9か所、調査区全体に万遍なく配置して調査を実施したが、石器の出土はなかった。

平成13年度調査区（2）は、古屋城本体の台地と東方の北ノ作遺跡C区との間にある谷頭部分の2,480m<sup>2</sup>を対象に調査が実施された。上層の確認調査面積は488m<sup>2</sup>である。斜面に直交または平行する6か所の発掘区（トレンチ）を設定して確認調査を実施した。トレンチの土層断面観察から地山整形跡1か所を確認した。調査区北東側では古墳時代前期の堅穴住居跡が1軒検出された。立川ローム層が遺存する範囲は調査区南側の一部であったため、下層の確認調査面積は12m<sup>2</sup>、2m×2mの発掘区3か所に留まった。遺物の出土はなかった。

平成16年度調査区（3）は、台地北及び北西側の縁辺・斜面部での2,732m<sup>2</sup>を対象に調査が実施された。上層の確認調査面積は対象面積のはば10%の282m<sup>2</sup>である。調査区全体に8か所のトレンチを設定して調査を実施した。その結果、多くのトレンチで遺構が確認されたため、遺構の周囲を拡張して本調査を実施した。本調査面積は960m<sup>2</sup>である。遺構の種別・数量は、中・近世の腰曲輪を形成した地山整形跡3か所、陥穴3基、土坑10基、粘土探掘坑1か所である。下層については立川ロームの遺存がみられなかったため、調査は不要となった。

平成19年度調査区（4）は、平成16年度調査区の南側に隣接する斜面部1,250m<sup>2</sup>を対象に調査が実施された。上層の確認調査面積は180m<sup>2</sup>である。調査区全体に8か所のトレンチを設定して調査を実施した。その結果、全体的に遺構が確認されたため、調査区全域が本調査範囲となった。遺構の種別・数量は、縄文時代陥穴・土坑12基、奈良・平安時代堅穴住居跡3軒・掘立柱建物跡1棟・欄列1条、中・近世溝状遺構1条、腰曲輪を形成した地山整形跡2か所である。立川ローム層は中央の埋没谷に存在するが、遺存部分が少ないため、下層の確認調査面積は8m<sup>2</sup>、2m×2mのグリッド2か所に留まった。遺物は検出されなかった。

平成27年度調査区（5）は、平成19年度調査区の南側に続く台地南西端付近の1,468m<sup>2</sup>を対象に調査が実施された。上層の確認調査面積は621m<sup>2</sup>である。斜面部については5か所のトレンチ、平坦面については全面的に確認調査を実施した。その結果、北側の2か所のトレンチ及び平坦面で遺構が確認されたため、その範囲の本調査を実施した。遺構の種別・数量は、古墳時代前期堅穴住居跡2軒・奈良・平安時代の堅穴住居跡1軒、中世城郭土塁2条・空堀2条・腰曲輪を形成した地山整形2か所、陥穴1基などである。下層については、立川ローム層が存在する東側を中心に2m×2mのグリッドを8か所、合計32m<sup>2</sup>の確認調査を行ったが、遺物は検出されなかった。

物井地区では、全域を公共座標（旧座標・国家標準直角座標第IX系）に基づく方眼網で覆って調査を行っている。方眼は50m×50mの区画を大グリッドとし、北西隅を起点として、東へ1・2…、南へA・

B…と振っている。その内部は100分割した5m×5mを小グリッドとし、北西隅を00、南東隅を99としている（第3図）。00を起点に東へ01・02…、南へ10・20…と振っており、大グリッドと組み合わせて27E-19のように表記した。なお、物井地区の大グリッドについては、数字を先、アルファベットを後にして呼称している。

古屋城跡の代表的なグリッドである28D-00（平成16年度調査区内）

は、旧座標（日本測地系）でX = -34.400.0000、Y = 33.200.0000である。JGD2000系変換値ではX = -34.044.8055、Y = 32.906.2962、北緯35°41'33"、東経140°11'49"（世界測地系）である<sup>2)</sup>。

遺構番号は原則として下三桁が数字で、その前に遺構の種別を表す略号を付けた。遺構略号は、堅穴住居跡がSI、掘立柱建物跡がSB、土坑・陥穴などがSK、溝状遺構・道路状遺構がSD、その他の遺構がSXである。調査時にはSI001、SK001のように呼称したが、各年度で001から番号を付与したため、遺構番号が重複したものがかなりある。そのため本報告では調査次数・区を括弧付きの通し番号で表し、調査時の遺構番号に冠して表記することとした。具体的には調査次数・区+遺構略号+数字となる。平成10年度調査区が（1）になるが、遺構は確認されていない。続く平成13年度調査区は（2）、平成16年度調査区は（3）、平成19年度調査区は（4）、平成27年度調査区は（5）となる。したがって平成13年度調査のSI001は（2）SI001、平成19年度調査のSI001は（4）SI001となる。

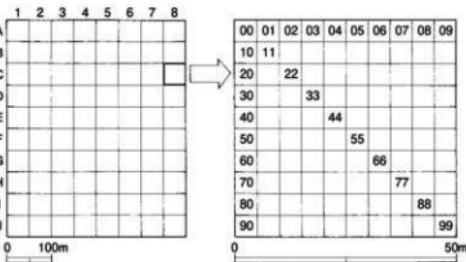
調査時に遺構略号及び番号が付されなかった城郭を構成する施設・空間及びそれを形成する要素・作為については、基本的に調査時の所見で用いられた名称で呼称することとした。種別ごとの通し番号は、調査次数・区ごとに大文字のアルファベットをAから順に付与することとした。具体的には（3）地山整形B、（5）土壘Aなどである。

次節で述べる現況測量図に基づいて想定した城郭全体の概念図（第5図）における施設・空間を構成する要素の通し番号については、上記と区別するために曲輪・腰曲輪は小文字のアルファベット、土壘は○で開んだ数字、堀は○で開んだ大文字のアルファベットで付与することとした。本文中には、上記の実際に調査された遺構番号と区別するため括弧付きで表記した。

遺物の注記は、遺跡コード・調査次数・遺構番号・遺物台帳に記載された遺物番号を順に書き込んだ。上層や下層の遺物包含層など、グリッド出土遺物については、上記の遺構番号がグリッド名に替わる。直書き込むことが好ましくない遺物については、袋または札に記入した。

整理作業のうち、遺物については水洗・注記の後、接合作業を行った。その後実測遺物を抽出し、実測を行った。遺構など発掘調査で作成した図面については、トレース原図を作成した。また遺物の接合作業が進捗した時点で、調査時に位置が記録されているものについては、出土位置・接合状況を平面図と断面図で作成した。遺構・遺物ともトレースを行い、挿図を作成した。

原稿執筆のうち、事実記載については、トレース原図作成や挿図・図版作成後、可能な時点で適宜実施



第3図 グリッド設定法

し、最後にまとめの執筆と編集を行い、平成28年度に報告書を刊行する運びとなった。

## 第2節 遺跡の位置と環境

### 1 遺跡の位置と概要（第1・2・4～7図、図版1・2）

物井地区は、四街道市の北東部に位置する。四街道市は千葉県北部に位置し、南は千葉市、北は佐倉市に接している。東方に鹿島川、西方に手縫川があり、両川はともに北流して印旛沼に注いでいる。物井地区遺跡群が所在する範囲の地形は、標高30m前後の台地上、鹿島川・手縫川から続く低地、そして台地と低地間の緩急の斜面から形成されている。

古屋城跡は物井地区の東部に位置し、鹿島川本流から約700m西方に立地する。鹿島川の低地から西に向かって延びる支谷は、古屋城跡が所在する台地の北端で南東・南西の二股に分岐する。その南西に向かう支谷は古屋城跡西方から南方に回り込んでいる。したがって、古屋城跡の所在する台地は南東側の一部を除いて独立的であり、城館が設置された有利な条件をうかがうことができる。この独立丘陵的な地形は南北方向に長い不整五角形状の平面形を呈する。その距離を低地と斜面の際から計測すると、城跡の規模は、南北は250m、東西約180m、面積は約35,000m<sup>2</sup>である。

現状保存される台地上は、標高25m～30mである。南側が低く26m前後、中央の主郭面は29m前後である。台地直下の谷地は最も低い北方の地点で標高10.5mであり、台地上高所との比高は19mほどである。2つの支谷に挟まれた南東側の台地は標高31m前後を測り、主郭面より高い。

概念図（第5図）及び鳥瞰図（第6・7図）をみると、主郭部は南北80m、北辺約40m、南辺約80mの台形状を呈し、北側に（①）、西側に（③）、南側に（②）の土塁が残存している。さらに、西側と東側の一部は空堀をへだてて二重土塁が造られており、折り重みが見られる。主郭面から堀底までは2m、土塁上部からは4mを測る。東側の土塁（⑤）の北側は切れて腰曲輪状になっているが、西側と同様に土塁・空堀が続いていることが推測される。

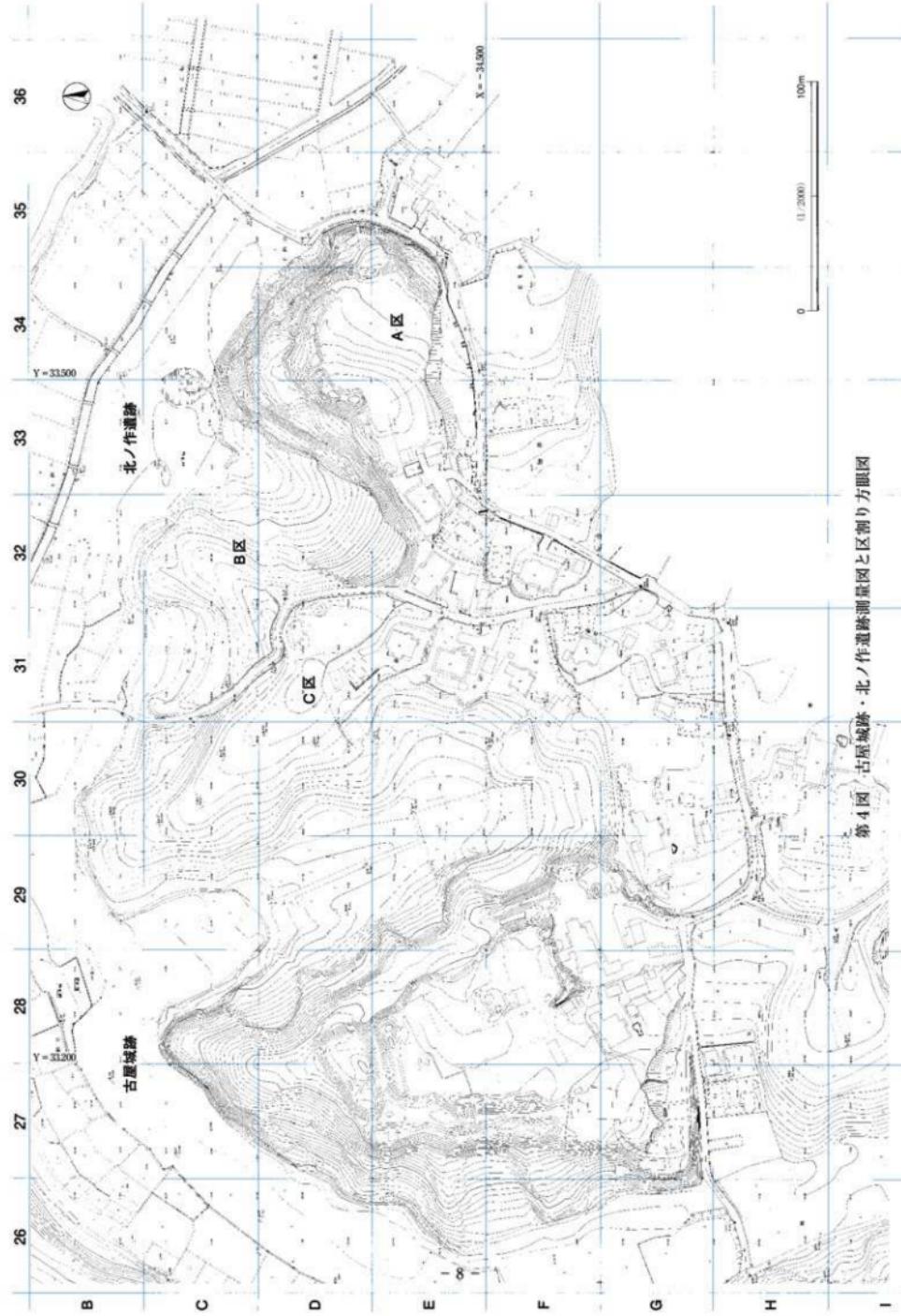
主郭の北側に堀切（Ⓐ）を隔てて存在する曲輪（a）は、南側を除いて土塁に囲まれており、東西約35m、南北約45mを測る。南側には櫓台とセットになった虎口が設けられている。同様に、南東端部にある（f）も土壇状に一段高く、櫓台の機能が考えられる。

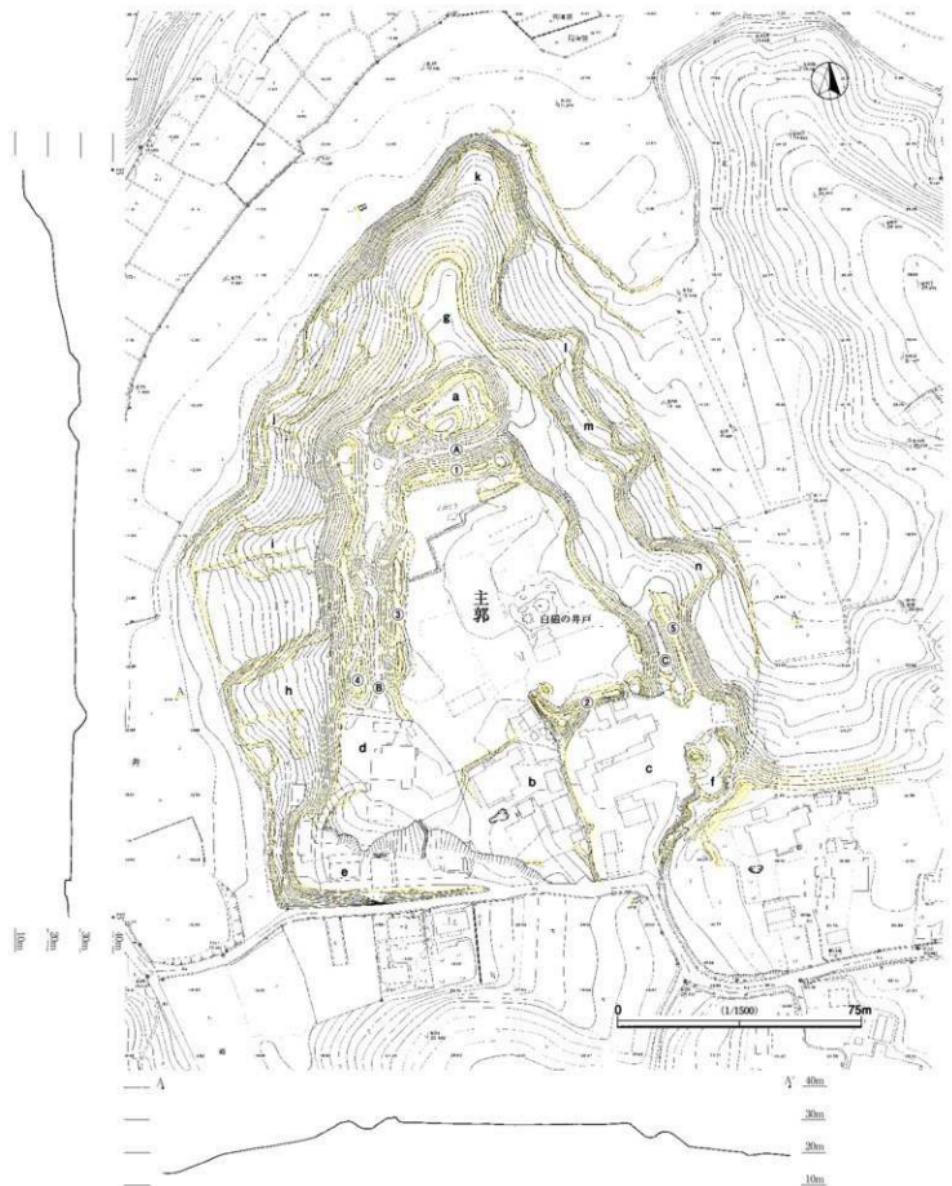
曲輪（b）は、主郭の南側西半部に位置し、民家が所在する。現況では、主郭と隣接する北側に土塁が遺存していないが、本来は所在したもので、土塁の南側直下には空堀が所在していたと推定される。曲輪（c）は、主郭の南側東半部に位置し、民家が所在する。曲輪（b）より下位にあり、主郭と隣接する北側には土塁（②）が構築されている。土塁南側直下には空堀が所在していたと推定される。曲輪（d）は、主郭の南西側に位置し、現住民家が所在する。現況では、主郭と隣接する西側の土塁（④）が遺存してはいないが、本来は曲輪の南西側端部まで土塁（④）を築き、空堀（Ⓑ）が続いていたものであろう。曲輪（e）は、曲輪（d）の下位面にあって、主郭の南西端部に位置し、民家が所在する。城の南西端部で、斜面を水田面まで削り落としている。比高は5m程度である。

斜面部においては多くの腰曲輪が存在する。尾根の両側をカットし崖線を折り曲げた構造で、斜面からの侵入を困難にし、上部の平場は前哨陣地とすることを企図したものであろう。北端は（g）・（k）が2段に設けられており、防禦に重点が置かれている。

以上の現況の曲輪の配置状況をみると、鹿島川支谷の谷津に面した北・東・西側の防御を強化していた

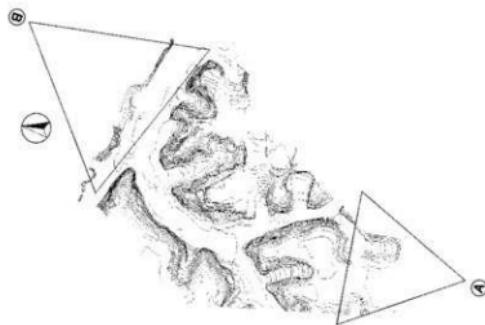
第4図 古原城跡・北ノ作遺跡測量図と区割り方眼図



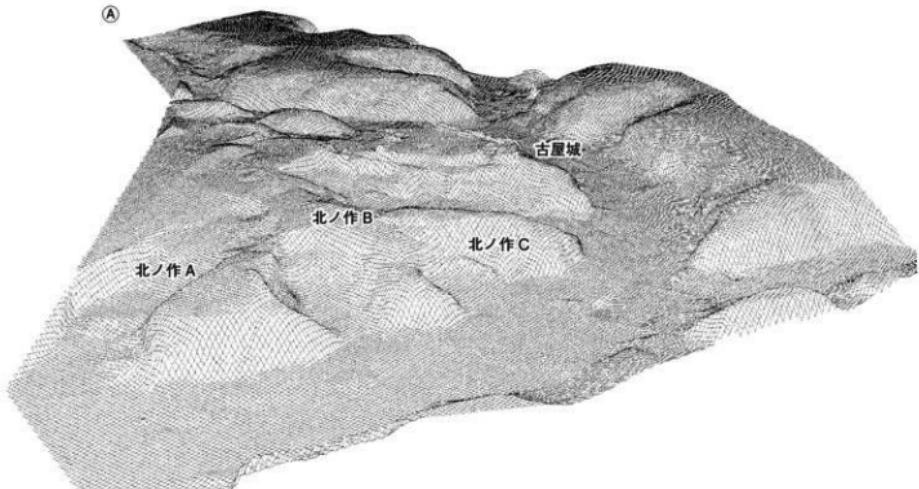


第5図 古屋城跡概念図

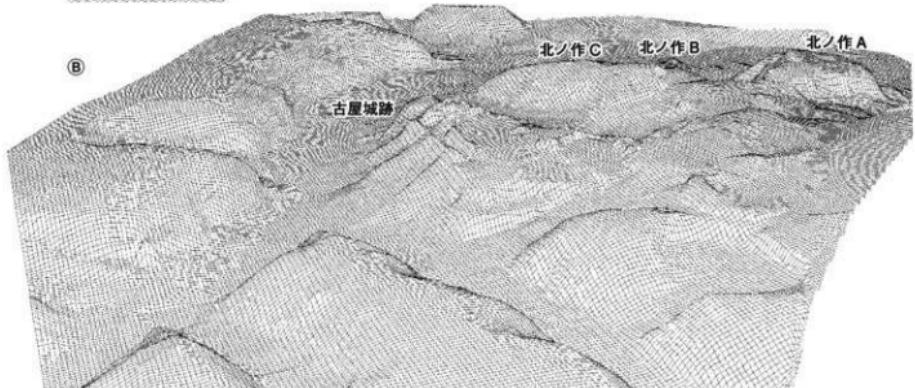
最高点の高さ 350m  
縮尺比 1 : 2



A

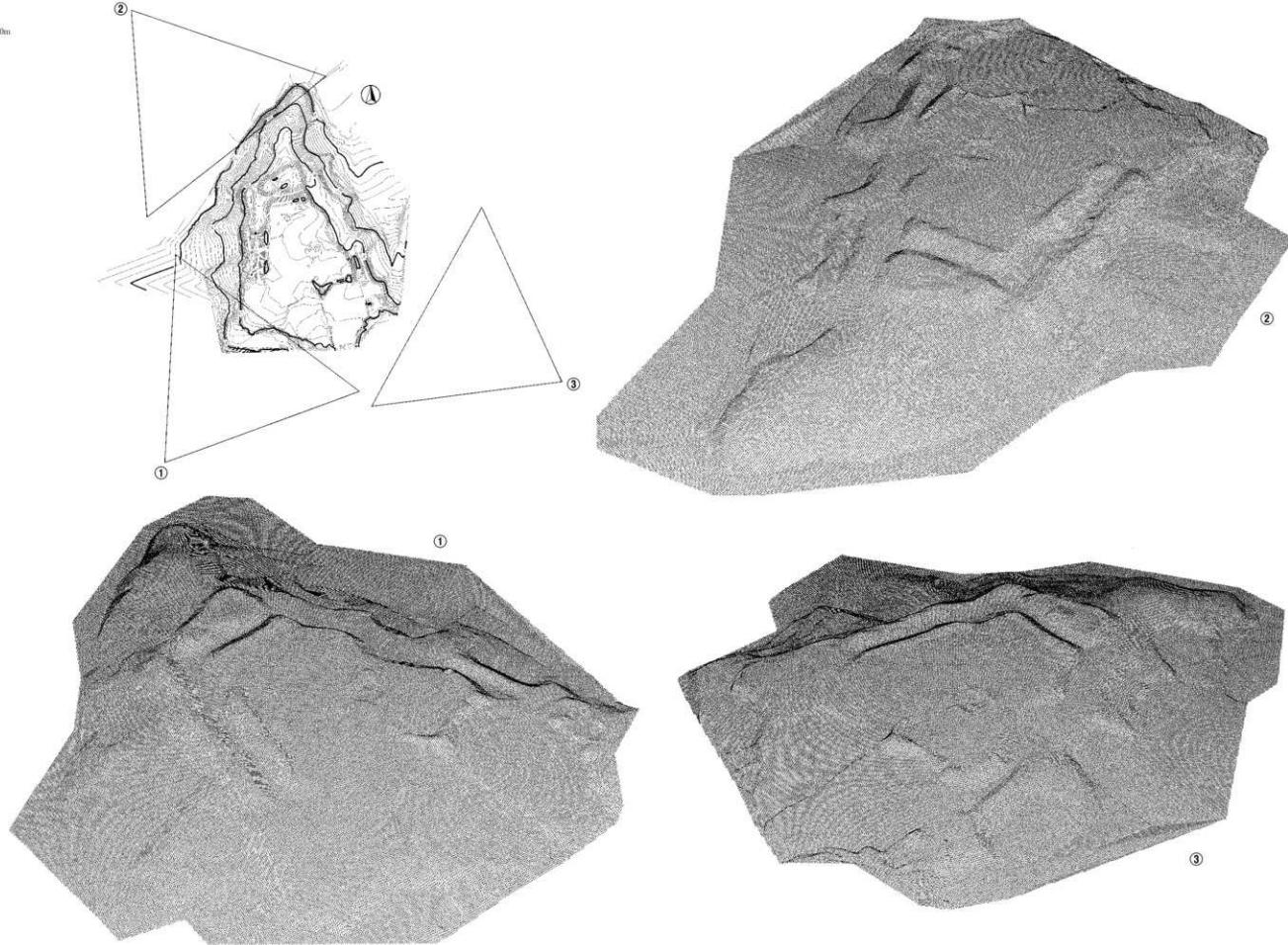


B

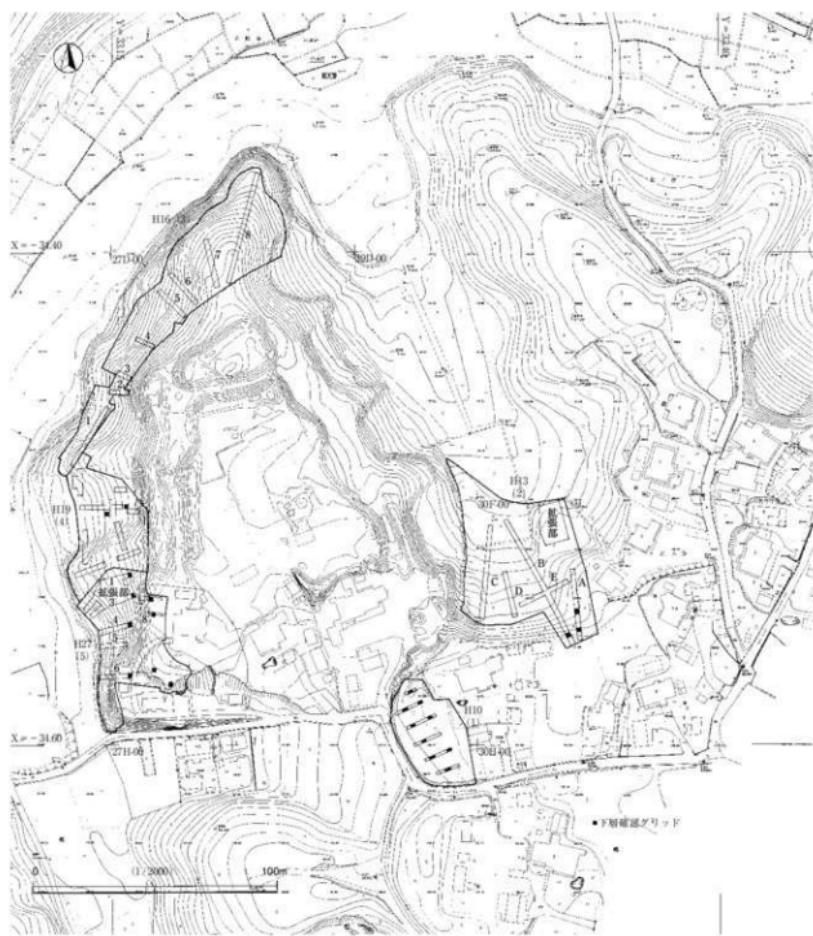


第6図 古屋城跡・北ノ作遺跡鳥瞰図

観点の高さ 250m  
縮尺比 1 : 1



第7図 古屋城跡鳥瞰図



第8図 年度別調査範囲及び確認調査区位置図

ように見える。二重土手を持つが、曲線的な折り畳み等から、15世紀後半から16世紀初頭の構造と考えられ、後世の耕作による改変を受けているが、方形郭の周間に腰曲輪を配置した副郭式の城跡である。

昭和 50 年には、主郭内の畠から五輪塔・カワラケ・茶臼・青銅製の鏡が出土している。また、昭和 52 年には井戸の発掘調査が行われており、舶載品の白磁碗底部片・朱塗木製椀・綠泥片岩製の板碑等が出土している。昭和 58 年 4 月 15 日附で四街道市指定文化財（工芸品「亀甲つなぎ散らし双鶴亀紐鏡」1 面、史跡「物井古屋城址の白磁の井戸」1 井、史跡「物井北ノ作の古屋城址」2,503m<sup>2</sup>）に指定されている<sup>3)</sup>。



第9図 古屋城跡調査全体図

## 2 周辺の遺跡（第1・2図、第1表）

本遺跡の造構または遺物が出土した主な時期は、縄文時代早期・古墳時代・奈良・平安時代・中世である。周辺の遺跡については物井地区の既刊の報告書に網羅的に記述されているため、ここでは上記の時期に絞って、物井地区内の遺跡を中心に記述する。

縄文時代早期

物井地区ではほ、とんどの遺跡から条痕文系などの早期の土器が出土している。なかでも、多量の遺物に加えて炉穴などの遺構が多く検出されたのは椎山・呼戸遺跡である<sup>4)</sup>。また小屋ノ内遺跡でも22基の

炉穴が検出されたが、調査面積が広いため分布密度はあまり高くない。稻荷塚遺跡でも本遺跡に近い東側の台地先端部で9基の炉穴がまとまって検出された。そのほか、中久喜遺跡と御山遺跡でも炉穴が検出されている。

物井地区からやや離れたところでは、四街道市の南東、小名木川北岸に立地する鹿渡遺跡で撫糸文期の竪穴住居跡が検出され、撫糸文土器と押型文土器が多数出土している<sup>5)</sup>。

#### 弥生時代後期～古墳時代前期

本遺跡の東方に隣接する北ノ作遺跡C区では、弥生時代末から古墳時代前期を主体とする集落が検出された。竪穴住居跡の軒数は36軒で、比較的幅の狭い舌状台地上に立地する。本遺跡の平成13年度調査区から検出された古墳時代前期の竪穴住居は古屋城本体の台地上よりも北ノ作遺跡C区により近い位置にあり、北ノ作遺跡から続く集落の一部と思われる。ただし、古屋城本体の台地上に当該時期の集落が存在することも考えられる。

本遺跡から谷部をはさんで北方に位置する中久喜遺跡（No.-1遺跡）では、当該期の竪穴住居跡が5軒検出された。台地先端部の狭い調査区内からまとめて検出されており、集落がより広がることは確実である。ただし、台地のやや内側に位置する中久喜No.-2遺跡の調査では該期の遺構が検出されていない<sup>6)</sup>。そのことと後述する周辺遺跡の様相から、集落は台地縁辺を主体とした分布が予想される。

中久喜遺跡・北ノ作遺跡間の支谷は南西方向に延びている。その支谷を望む台地上の遺跡としては、本遺跡を始め、稻荷塚遺跡・小屋ノ内遺跡・御山遺跡・新久遺跡がある。このうち小屋ノ内遺跡と新久遺跡については分布密度が高くないものの、比較的まとまった数量の竪穴住居跡が検出されており、集落の立地に関連性があるといえよう。御山遺跡でも新久遺跡に近い台地南西端から弥生時代後期の竪穴住居跡が3軒見つかった。また稻荷塚遺跡でも、二股の台地先端部に1軒ずつ竪穴住居跡が見つかっている。

その他に、物井地区内で該期の遺構が検出された遺跡としては、新久遺跡に隣接する出口遺跡、地区内南東部に位置する館ノ山遺跡・嶋越遺跡があるが、いずれも分布密度は低い。

該期の集落について物井地区近隣の遺跡をみると、千代田遺跡V区で竪穴住居跡が6軒検出されている<sup>7)</sup>。また、本遺跡の南方の馬場No.-1遺跡では、弥生時代中期後半の方形周溝墓が9基検出されている<sup>8)</sup>。これまで述べてきたものよりも古い宮ノ台期のものを含み、注目すべき資料である。

#### 奈良・平安時代

四街道市物井で検出された奈良・平安時代の集落は、下総国千葉郡物部郷に属する集落と考えられる。その中核遺跡は規格的な掘立柱建物配列をもつ小屋ノ内遺跡であり、竪穴住居跡の分布密度も高い。物部郷の主要な集落は小屋ノ内遺跡から東方に展開しており、稻荷塚遺跡・馬場No.-1遺跡・郷遺跡・北ノ作遺跡・館ノ山遺跡・嶋越遺跡・入ノ台遺跡<sup>9)</sup>などを列挙できる。そして小屋ノ内遺跡の北東に位置する本遺跡も同様な遺跡の一つである。また本遺跡に隣接する松葉作遺跡や、馬場No.-2遺跡でも該期の集落の存在が予想される。

一方、小屋ノ内遺跡西方の清水遺跡・新久遺跡・出口遺跡などでは該期の集落が見つかっていない。これらの遺跡群では古墳が築造されていることから、該期の集落立地にあたり前代の墓域を敬遠したものと考えられる。また鹿島川水系と手練川水系の分水界にあたる地形も集落がみられない理由の一つであろう。

しかし、清水遺跡から北西方に位置する千代田遺跡I区では該期の集落が検出された<sup>10)</sup>。千代田遺跡でも古墳が築造されているが、詳細な様相は不明瞭である。千代田遺跡I区は、手練川によって開析され

た支谷に近いことが、集落立地の理由と考えられる。

つまり、鹿島川と手縫川に挟まれた四街道市物井・千代田は物部郷の範囲内であろう。その北方は不明瞭であるが、北東の四街道市亀崎も物部郷に属する可能性が高いと思われる。

物井から南方に目を転じると、地名は四街道市長岡、山梨となるが、山梨は千葉郡山梨郷の遺称地と考えられる。物井と山梨の間には鹿島川の支流である小名木川が存在し、その支谷は比較的幅が広い。物部郷と山梨郷の郷境は小名木川と思われる。ただし、小名木川上流部では境が不明瞭である。入ノ台遺跡が位置する四街道市長岡は小名木川下流北方であり、物部郷の範囲内と考えられる。

#### 中・近世

古屋城跡が立地する鹿島川流域には、谷津を見下ろす台地先端部に中世城館跡が多く分布する地域である。第1図にその分布状態を示した。鹿島川両岸や小名木川等の支流域に多くみられ、鹿島川に合流する高崎川流域や鹿島川西方の手縫川流域でも目立っている。

中世には、四街道市周辺は白井庄といわれる地域に含まれており、千葉氏一族の白井氏一族である山無（山梨）・鹿渡・小名（小名木）など現在も残る地名を名字とした小領主が分布していたと考えられている。15世紀後半には物井には「物井殿」と呼ばれた千葉孝胤（1443～1505）の三男の右馬助がいたことが江戸時代の記録に伝えられており<sup>10)</sup>、白井氏系の諸城が千葉氏に取り込まれていったことが推測されている。16世紀前葉の1520年には、安房の里見氏が下総北部に進入した際に、中継基地として蕨（和良比）城を使用したことが推定されている。また、16世紀後半には、千葉氏は房総に進出してきた後北条氏の配下となっていたが、1561年には里見氏が上杉謙信の関東進出に連動して、千葉氏重臣原氏の白井・生実両城を落城させ、逆に1564年の第二次国府台合戦では後北条氏が里見氏を破り、1566年には今度は上杉謙信が白井城を開む等、戦乱が続いた。

鹿島川及びそれによって形成された谷津は、印旛沼と里見氏領有の上総国に近い現在の千葉市東部を、同時に白井城と生実城という原氏の両本城をつなぐものでもあり、生産基盤や交通の上でも重要な流域であったと推測される。以上の様に、このような歴史的様相が鹿島川流域や手縫川流域に城館が多く分布する理由と考えられている<sup>12)</sup>。

東方の至近に位置する北ノ作遺跡は、斜面に多くの腰曲輪を配する山城であり、主郭部から障子堀や大規模な井戸を検出した。出土陶磁器は15世紀後半～16世紀初頭を主体とする。本遺跡に最も近いC区では城館遺構が検出されず、城館遺構はより鹿島川の低地に近い東万台地に集中している。井上哲朗氏は、古屋城を物井地域の領主層の本城、北ノ作遺跡の城を出城・支城的性格のものと考察している<sup>13)</sup>。

南方では、谷を挟んだ台地に立地する郷遺跡の南東側斜面部から地下式坑、掘立柱建物跡、井戸等の土坑群、水場遺構などが検出された。北ノ作遺跡とは同時期の遺物が出土している。さらに南方の小屋ノ内遺跡では小谷津斜面に小規模な中世台地整形区画が検出され、館ノ山遺跡では、15世紀前半を主体として、台地整形区画内に掘立柱建物群で構成される館跡が検出されている。

その他、「古屋」・「小屋」・「馬場」・「館ノ山」等の地名は、中世における城館や集落の関連の可能性も考えられる。

注

- 1 物井地区の既刊の報告書は以下のとおりである。  
(財)千葉県文化財センター 1994「四街道市御山道路(1)-物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ-」  
(財)千葉県文化財センター 1999「四街道市出口・鍾塚遺跡-物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ-」  
(財)千葉県文化財センター 2005「四街道市小屋ノ内遺跡(1)旧石器時代編-物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ-」  
(財)千葉県教育振興財団 2006「四街道市小屋ノ内遺跡(2)-物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ-」  
(財)千葉県教育振興財団 2007「四街道市小屋ノ内遺跡(3)-物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ-」  
(財)千葉県教育振興財団 2008「四街道市郷遺跡・中久喜遺跡-物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ-」  
(財)千葉県教育振興財団 2009「四街道市稻荷塚遺跡-物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ-」  
(財)千葉県教育振興財団 2009「四街道市清水道路-物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ-」  
(財)千葉県教育振興財団 2011「四街道市館ノ山道路-物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ-」  
(財)千葉県教育振興財団 2011「四街道市新久道路-物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅹ-」  
(財)千葉県教育振興財団 2011「四街道市清水道路・新久道路 旧石器時代編-物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅺ-」  
(財)千葉県教育振興財団 2012「四街道市出口道路-物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅻ-」  
(公財)千葉県教育振興財団 2013「四街道市北ノ作道路-物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅢ-」  
(公財)千葉県教育振興財団 2013「四街道市出口道路 旧石器時代編-物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅣ-」  
(公財)千葉県教育振興財団 2013「四街道市館ノ山道路(2)-物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅤ-」  
(公財)千葉県教育振興財団 2013「四街道市御山道路(2)-物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅥ-」  
(公財)千葉県教育振興財団 2014「四街道市鶴越道路(1)-物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅦ-」  
(公財)千葉県教育振興財団 2015「四街道市出口・鍾塚(2)・(3)・(4)遺跡-物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅧ-」  
(公財)千葉県教育振興財団 2016「四街道市清水道路(3)-物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅨ-」  
(公財)千葉県教育振興財団 2016「四街道市鶴越道路(2)-物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅩ-」  
(公財)千葉県教育振興財団 2016「四街道市高駆道路-物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅪ-」
- 2 変換値はWeb版TKY2JD Ver.1.379 パラメータ Ver.2.1.1による。
- 3 四街道市教育委員会 1997「四街道の文化財」第23号
- 4 平成28年度報告書刊行予定。
- 5 (財)印旛都市文化財センター 2007「印旛の原始・古代-縄文時代編-」  
(財)印旛都市文化財センター 2004「鹿渡遺跡(第3次)」
- 6 (財)印旛都市文化財センター 1986「中久喜No.2遺跡」
- 7 四街道千代田遺跡調査会 1972「千代田遺跡」
- 8 (財)印旛都市文化財センター 2007「馬場No.1遺跡」
- 9 新井和之ほか 1990「千葉県四街道市入ノ台第2遺跡発掘調査報告書」四街道市教育委員会
- 10 注7前掲書
- 11 「千葉実録」「妙見実録千集記」等「改訂房總叢書 第二輯」(1959年)所収
- 12 (財)千葉県文化財センター 1998「遺跡調査概要報告(1)四街道市古屋城跡・北ノ作遺跡」「千葉県文化財センター年報No.22-平成8年度」／井上哲朗 1998「庵島川流域における戦国前期城館の一形態-四街道市北ノ作遺跡の調査から-」『研究連絡誌』第53号 (財)千葉県文化財センター
- 13 注12前掲書

## 第2章 平成10年度（1）調査区の成果

### 第1節 概要（第4・5・8・9図）

本調査区は、古屋城の南東側に隣接する標高約29.5m～31.5mの緩斜面に位置する。曲輪（c）と調査区の谷部との比高差4mを測る。この地点は、東側にある鹿島川から進入した谷頭と北側から西に向かう谷頭部を挟んで、東側が松葉作遺跡、西側は郷遺跡で、両遺跡の間を土橋状に現市道が通っている。現況地形測量図には、古屋城南東部端の物見（g）下から谷頭部へ向かう土橋状の細い土塁が計測されている。確認トレンチを谷頭部から東西方向の傾斜方向に設定したが、調査時の所見では遺構は検出されていない。遺物はわずかに中世陶磁器が出土したのみである。

## 第3章 平成13年度（2）調査区の成果

### 第1節 中・近世（第4・5・8・9図、図版3）

本調査区は、古屋城本体の台地と東方の北ノ作遺跡C区との間にある谷頭部分に位置する。現況は北に開口する谷で、見かけ上、谷頭直下に東西方向40m、南北方向に幅5mの平坦面が存在する。

トレンチを南北の斜面方向に設定し、古屋城跡に伴う整形を受けているかの確認調査を実施した。その結果、トレンチ土層断面観察から、谷頭部分の斜面を整形し、崖面を削り出していることを確認した。

調査区の北東部分からは、北ノ作遺跡C区に続く台地の西側で比高2m程の急崖面の削り落としが確認された。この崖面直上の平坦面は、見かけ上、北東から南西方向に17m、北西から南東方向に20mを測る。

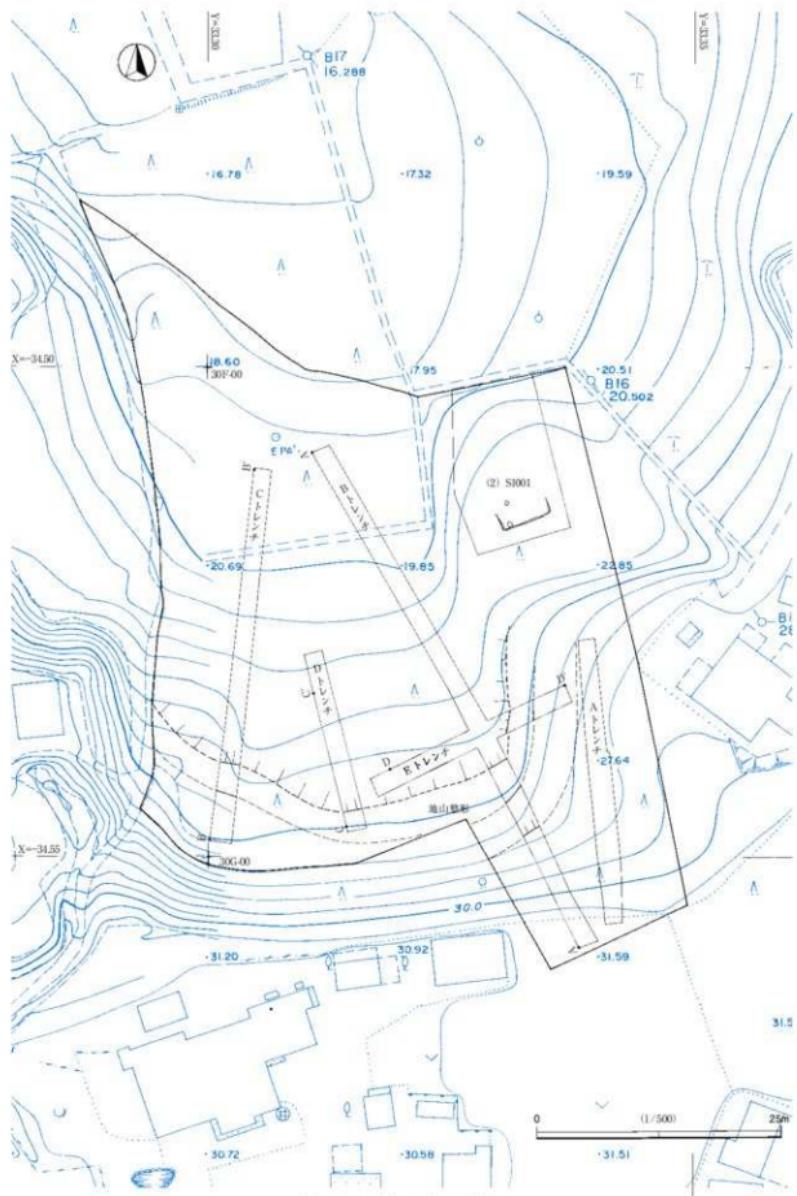
#### （2）地山整形（第10・11図、図版3）

トレンチ部分のみの検出にとどまったが、比高2mほどの谷頭部分の斜面を削り落とした幅2.5m～3.0mほどの谷を囲む帶曲輪状の平場を検出した。第5図の概念図で想定した切岸の下端部であると考えられる。平場付近の地山は、粘性の強い褐色土・黄褐色土層であった。覆土は、しまり、粘性を有する暗褐色土・黒褐色土の堆積がみられた。1回整形した後は再度の整形はなされず、自然埋没していくものであろう。Bトレンチの土層断面には、平場の南側に、人為堆積と思われる混入物を含まないしまりのある黒色土、その下にはハードローム塊を含む黒褐色土等の土塁状の堆積がみられた。

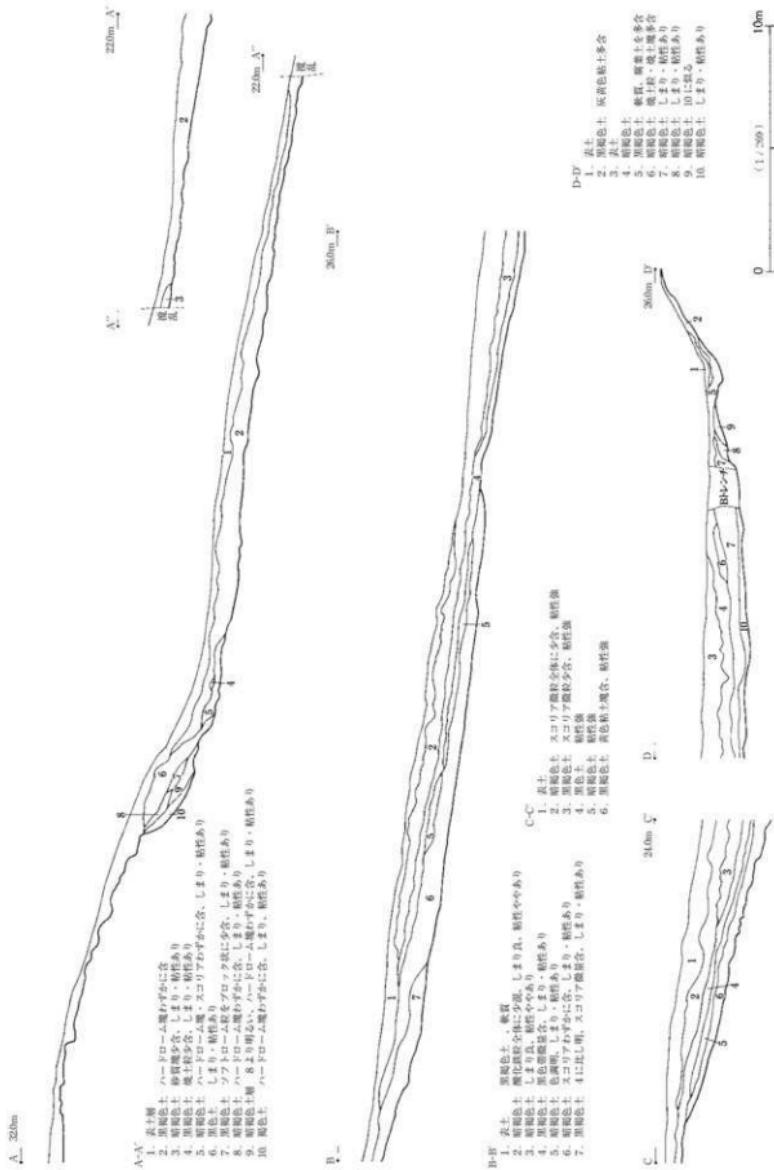
#### トレンチ出土遺物（第12図、図版20）

縄文時代の土器・石器、古墳時代の土器・土製品、中・近世の陶磁器、土器、瓦、石製品、鉄滓が出土した。Bトレンチから出土した近世の陶磁器が約20点と最も多く、18世紀後葉～19世紀前葉の瀬戸・美濃産陶器、肥前産磁器が出土している。ここでは中世から近世初頭の遺物を図示した。

陶磁器は、図示したものがすべてである。1は龍泉窯系青磁碗の体部片である。外面に片影りの鎬蓮弁文が施され、釉調は灰オリーブ色である。碗I-5a類とみられ、13世紀初頭～前半の所産である。Bトレンチ上部から出土した。2は常滑産陶器片口鉢の体部片である。内面は使用による磨滅がみられる。外面



第10図 (2) 調査区全体図



第11図 (2) 調査区土層断面図

は指頭痕が顕著である。色調は赤褐色を呈する。Dトレンチから出土した。3は常滑産陶器壺の胴部片である。内外面にナデ痕が認められる。外面の色調は灰赤褐色で、光沢を帯びる。内面は灰褐色を呈する。4は瀬戸・美濃産陶器碗の底部付近である。高台がヘラケズリによって成形される。底径6.8cmを測る。内面及び体部下端に灰釉が施され、釉調は浅黄色を呈する。17世紀代の所産である。Bトレンチから出土した。5は在地産の土器擂鉢の口縁部で、口縁部は丸くおさめられる。擂目は5本1単位である。胎土は瓦質で、灰褐色を呈する。Bトレンチ下部から出土した。6は凝灰岩製の砥石である。上・下端を欠損する。被熱によりやや赤みを帯びている。実測図の正面が研磨面で、左側面には縱方向の櫛歯状の整裏が残る。現存長5.0cm、幅5.1cm、厚さ3.8cm、重量122.46gである。Cトレンチから出土した。7は椀形津と思われる鉄津である。現存最大幅7.7cm、厚さ2.2cm、重量139.16gを測る。中央部分は1cmほど窪む。Bトレンチ上部から出土した。鉄津はほかにBトレンチ上部からもう1点出土している。

## 第2節 古墳時代

古墳時代前期の堅穴住居跡が1軒検出された。位置は遺跡の東端部であり、東隣の北ノ作遺跡西側部分のC区との境部である。北ノ作遺跡C区では、北西に延びる舌状台地上から古墳時代前期の集落跡が検出されている。舌状台地の基部は調査対象外であり、住宅が現存しているが、集落跡が広がっていたと考えられる。本住居跡は舌状台地基部の西側斜面中段の立地であり、北ノ作遺跡の集落跡から単独で所在しているが、遺物および住居跡の方位から、北ノ作遺跡の古墳時代前期集落に含まれると考えられる。

なお、北ノ作遺跡C区の斜面部単独の住居跡としては、古墳時代後期堅穴住居跡1軒が舌状台地基部西側斜面から検出され、本住居跡の北約40mに位置している。

出土遺物の計測値は第2表に記載している。

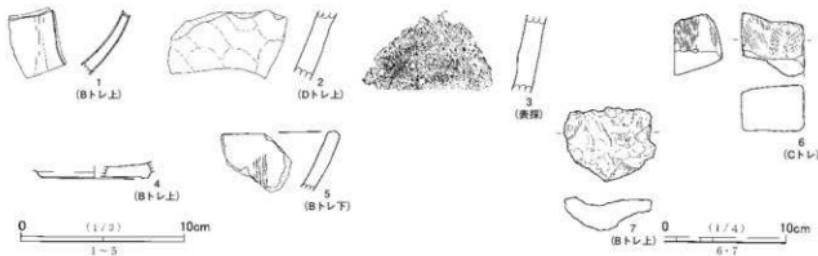
### (2) SI001 (第13図、第2表、図版3・20)

調査区の北東部に位置し、立地は北側斜面の台地中段平坦面で、標高は22m～23mである。台地上面の標高は約31.5mで、約9mの比高がある。住居跡が立地する平坦面は、古屋城造成時に拡張されたため、元は狭く、住居跡は単独で、集落から独立していたと考えられる。主なグリッドは30F-26・36である。

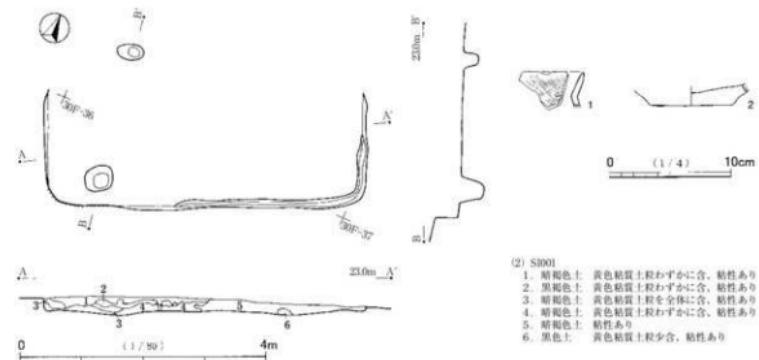
住居跡の北側1/2は緩斜面になり、壁および床面は検出されなかった。また、北東側ほぼ1/4が巨大な木根で攪乱を受けている。南西隅に貯蔵穴、床面中央やや西寄りにピットが検出されたが、柱穴および炉跡は検出されなかった。主軸は、隣接する北ノ作遺跡C区における古墳時代前期の住居主軸方位から推定して、N-23°-Wである。平面形は隅丸方形で、主軸長が推定で5.2m、幅は5.3mである。壁の残りは南西隅が最も良く、掘り込みの深さは確認面から最大で38cmである。床面に明瞭な硬化面はないが、全体にしまりがある。掘り込みの基盤面は黄褐色粘土層で、黄褐色粘土は覆土中にも観察される。貯蔵穴の平面形は丸みのある方形で、規模は47cm×45cm、床面の掘り込みは40cmである。ピットは、平面形が梢円形で、規模は42cm×28cm、床面の掘り込みは24cmである。周溝は全周せず、南東隅から南壁中央にかけて検出された。下端幅は3cm～10cmである。

遺物は少量で、破片が多く、図示できたものは2点である。1は土師器小型壺の口縁部～胴部上端部片である。口縁部は「く」字状で、わずかに内彎し、口唇部は薄く、尖り気味である。外面は斜め方向のハケが施され、内面はヨコナデおよび下部にヘラナデが施される。被熱で器面が荒れている。2は土師器壺の胴部下端部～底部である。平底で、胴部は球形と思われる。底面および外面胴部下端部にヘラケズリ、

内面にヘラナデが施されるが、被熱で器面が荒れているので、調整痕は不明瞭である。



第12図 (2) 調査区出土中・近世遺物



第13図 (2) SI001

第2表 (2) 調査区出土古墳時代土器観察表

( ) は推定値 [ ] は現存値 色調は上段内面・下段外側

遺構 番号	発掘番号	器種	器形	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	重宝度	色調	胎土	混入物	焼成	調整外側	調整内面	底部切 り削し	底外調整	備考
(2)SI001	第13図	1	土師器	小型壺	—	—	—	口縁部～胴 部上端部片	明褐色 明褐色	密	少	良好	ハケ・ ヨコナデ	ヨコナデ、ヘ ラナデ		
(2)SI001	第13図	2	土師器	壺	—	6.8	[16]	20% 剥離下 部～底部	明褐色 黑	密	少	良好	ハラケズリ	ヘラナデ		ハラケズリ

## 第4章 平成16年度（3）調査区の成果

### 第1節 中・近世（第14～17図、図版4～8）

本調査区は、北～北西側の標高14m～26mの台地縁及び斜面部である。鹿島川の支谷に面し、印旛沼方向を望む北に張り出した台地上にある古屋城の主郭から2段下の平坦面にある。1～8トレンチを設定して確認調査を行い、城郭の施設及びその他の遺構が検出された3地点の本調査を実施した。

南側の26Eグリッドでは、北西方向に開口する埋没谷（3）SX001が検出され、その南側斜面には、(3)・(4)調査区にまたがって、東西方向約30m、南北方向15mの舌状の腰曲輪（i）が地山を整形して構築されている。埋没谷の北側縁辺部では、(3) SK001～SK003の3基からなる土坑列が検出された。楕円形の掘り鉢状を呈する形状から、侵入を防ぐために掘られた陷穴と思われる。

中央付近の27Dグリッドでは、調査区南側の埋没谷（3）SX002と埋没谷（3）SX003の間の一段高い緩斜面から、緩斜面を切土した（3）地山整形B・Cを検出した。いずれも斜面を切土し急崖面を造り出している。（3）地山整形Cは幅の狭い平坦面を形成し、南西端は腰曲輪（j）の北側側面を形成している。北側の27C・27D・28Cグリッドは、台地北端に突き出す腰曲輪（k）、その一段上部に腰曲輪（g）が位置するが、トレンチ8の調査により、自然地形を利用して腰曲輪としていたことを確認した。腰曲輪（g）の周辺では時期不明の粘土探掘坑（3）SX004などが検出された。

#### （3）地山整形A（第15図、図版6・8）

(3)・(4)調査区の境に位置する舌状の張り出しの北西部で、腰曲輪（i）の北西端にあたる。崖面は埋没谷（3）SX001の南側縁辺部を地形に沿って斜面を垂直に削っている。段の比高は約60cmを測り、東西方向に約7mにわたりて検出した。西側は南西方向に屈折し、東側側面を形成している。上面の平場は、南北方向約10m、東西方向約7mにわたって検出した。東側で約5m、東側と西側の比高は約2mである。南側の崖面の上端部のラインはN-70°-E方向に向いている。覆土は、砂粒を含む黒褐色土（1層）が自然堆積していた。

埋没谷（3）SX001は、検出した東側での幅13m、深さ25mを測る。古屋城が営まれた時期に土層断面の2層以下が埋まりきっていたものと思われる。埋没谷部分の東西方向の比高差は約2.3mである。

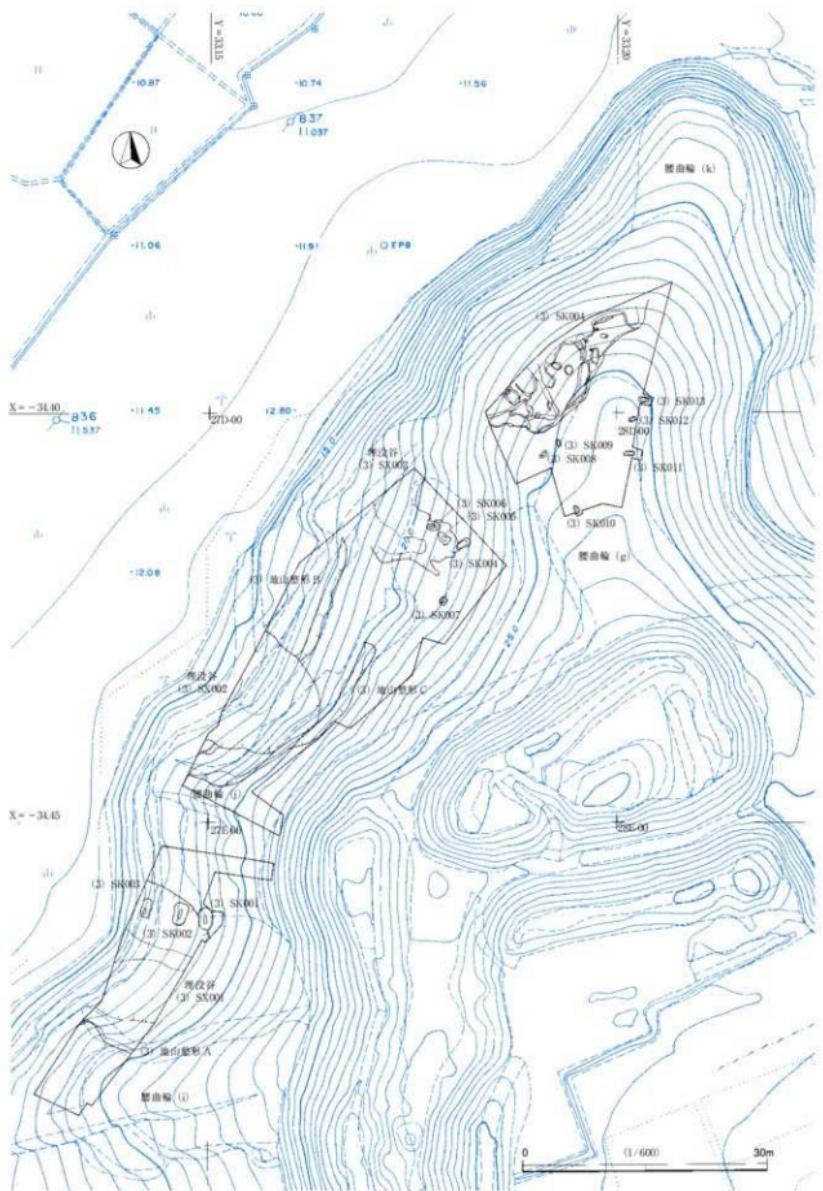
#### （3）地山整形B（第16・17図、図版6・8）

北西側の地山整形Bは、標高17mの等高線に沿うように幅1.0m～2.5m、深さ約0.5m～1m掘り込まれ、埋没谷（3）SX003部分では明確に検出できなかったが、31.5mほど検出した。平坦面の幅は0.8mほどである。覆土は砂粒を多く含む黒色土であった。

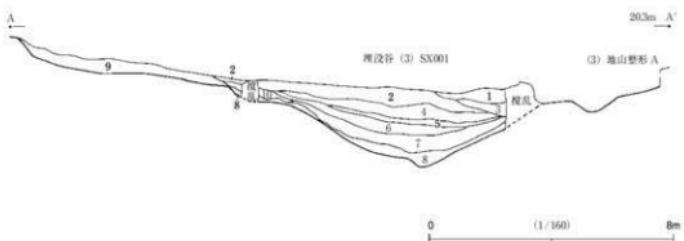
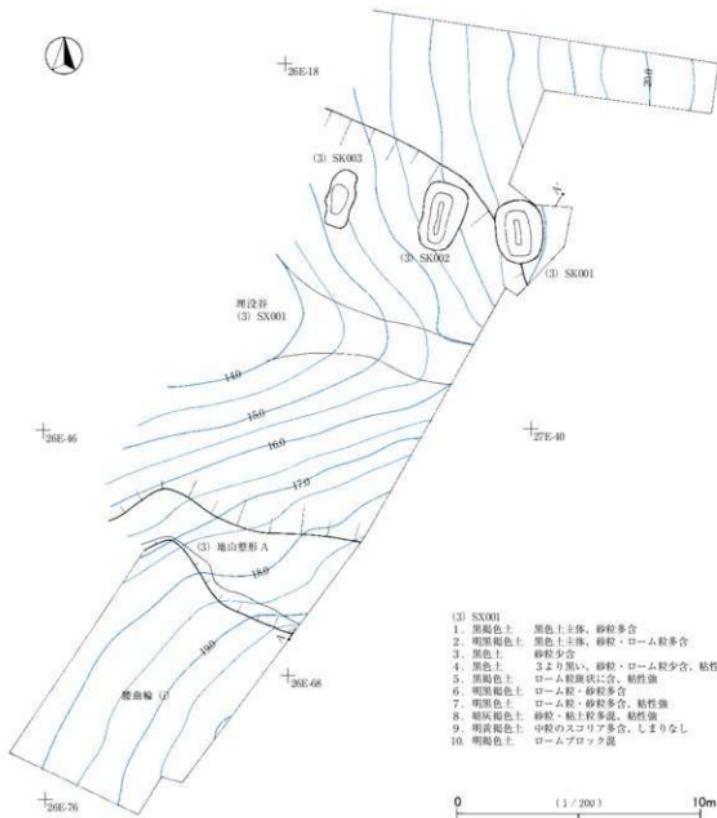
#### （3）地山整形C（第16・17図、図版6・8）

南東側の地山整形Cは、埋没谷（3）SX003の上方の標高19.5m～20.0mの等高線に沿うように幅1m～2m、深さ約0.5m、長さ約16mにわたって掘り込まれている。平坦面の幅は0.8m～1.5mほどである。南西端約6mは北西側に屈折しており、西側に張り出す小規模な腰曲輪（j）の北側崖面を形成する。上端のラインはN-60°-Wに向いている。腰曲輪（j）は、現況測量図によると、上端は南北方向約3m、東西方向約9mを測る。上面は西側に下がる緩斜面で、比高は約2mである。

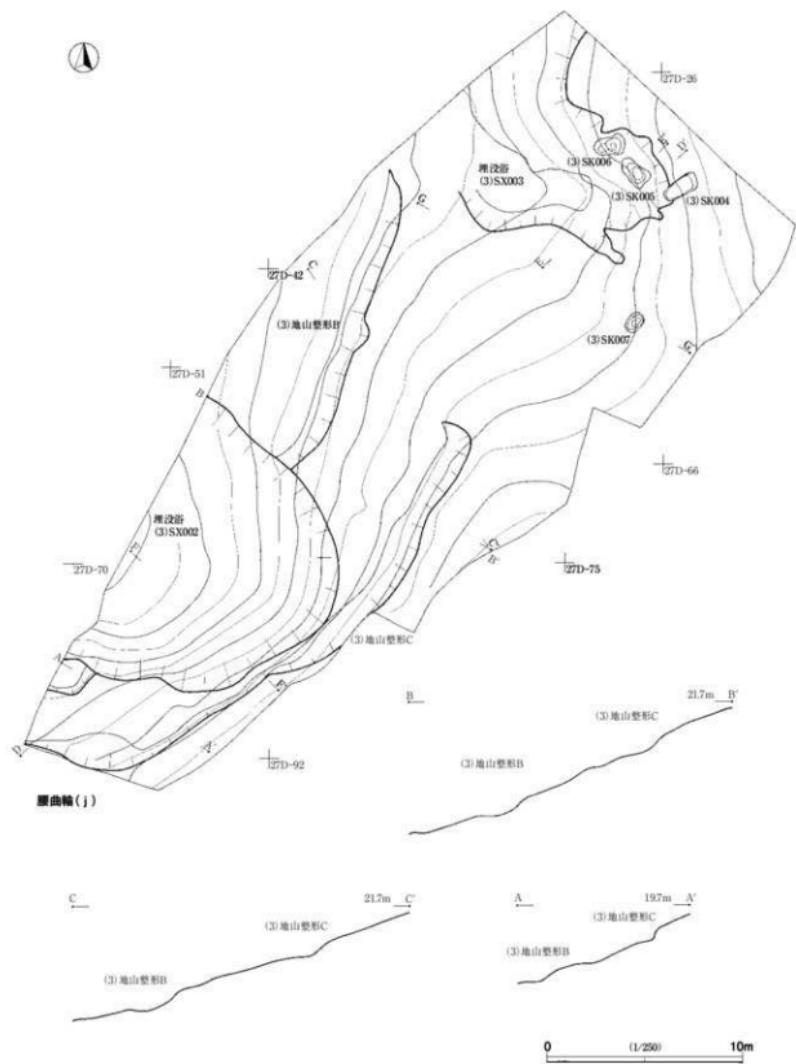
#### （3）SK001（第18図、図版8・20）



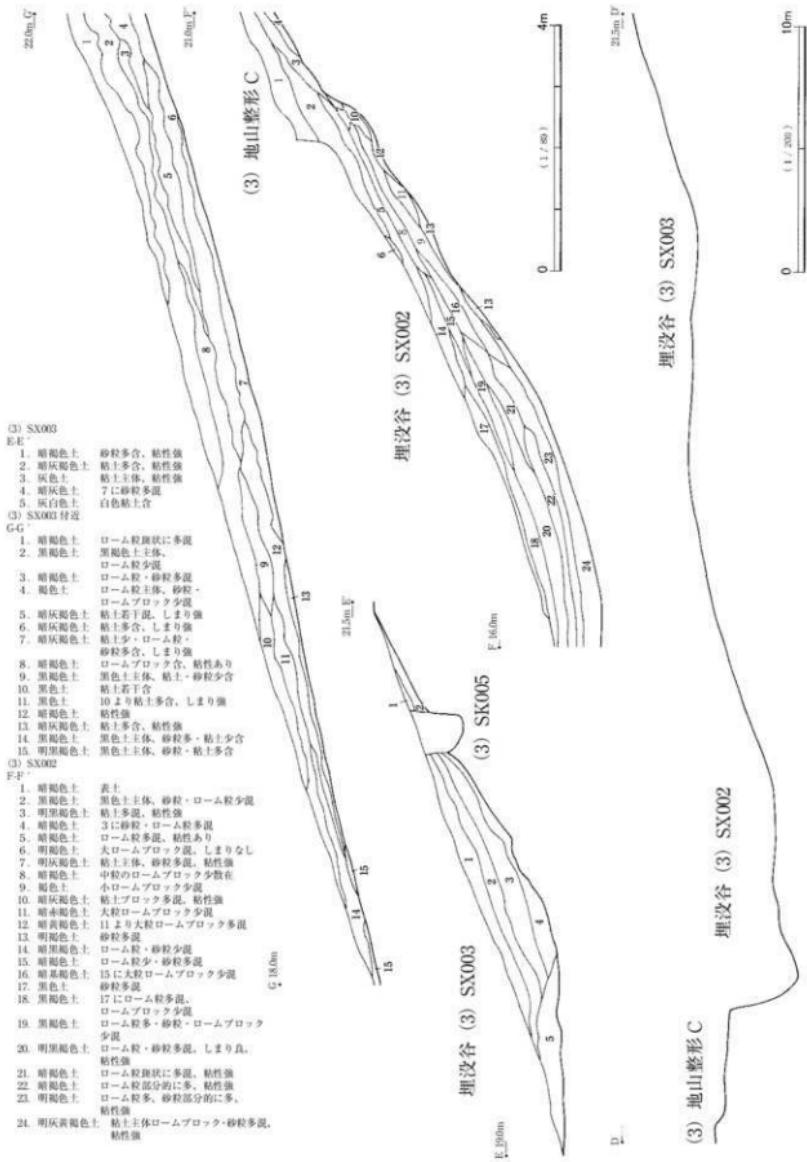
第14図 (3) 調査区全体図



第15図 (3) 地山整形 A 、(3) SX001



第16図 (3) 地山整形B・C、(3) SX002・003 (1)



第17図 (3) 地山整形B・C、(3) SX002・003 (2)

埋没谷（3）SX001 の北東側の縁辺、26E-29 グリッドに位置する。3基の直列する土坑群のうち、東側の斜面最上部で検出された。西側の（3）SK002との間隔は1.2 mを測る。開口部の平面形は南北方向に長い長楕円形、底面は長方形である。底面は開口部に比べて非常に小さく、短軸方向の断面形は漏斗状を呈することから、陥穴と考えられる。長軸方向はN-0°を向いている。規模は、開口部は長軸2.6 m、短軸1.9 m、底面は長軸1.1 m、短軸0.25 m、深さ2.7 mを測る。覆土下層はロームブロックを多く含み、上層はローム粒・ロームブロックを含む黒色土が主体である。埋没谷の堆積土の上層と類似しており、自然堆積と捉えられる。

遺物は、1の雲母片岩（筑波石）製の下総型板碑が底面から出土した。側縁は図の左上方のみ遺存しており、丸みをもって加工されている。文様・文字は確認できない。現存最大の長さ11.0cm、最大幅10.3cm、厚さ2.7cm、重量435.3gである。そのほかに縄文土器・土師器・須恵器片が数点出土した。

### （3）SK002（第18図、図版8・9・20）

26E-29 グリッド付近に位置する。土坑群の中央に位置する。（3）SK001とはほぼ同形状であり、陥穴と考えられる。平面形は隅丸長方形で、短軸方向の断面形は漏斗状を呈する。（3）SK001と同様に長軸方向はN-12°-Wを向いている。規模は、開口部の長軸2.74 m、短軸1.75 m、底面は長軸1.35 m、短軸0.18 m、深さ2.30 mを測る。覆土は、下層はロームブロックを多量に含み、しまりのない暗褐色土、上層はローム粒・ロームブロック・砂粒を含む黒褐土が主体であった。自然堆積である。

遺物は、2の安山岩製の礎を示した。破片のためもともとの大きさはわからないが、石塔類の破片の可能性がある。表面に残された剥離痕は、最終的に破碎されたときに生じたもので、意図的なものではない。長さ11.8cm、幅8.6cm、厚さ5.6cm、重量740 gである。もともとは5 kgを超える重量があったと思われる。そのほかに土師器片7点が出土した。

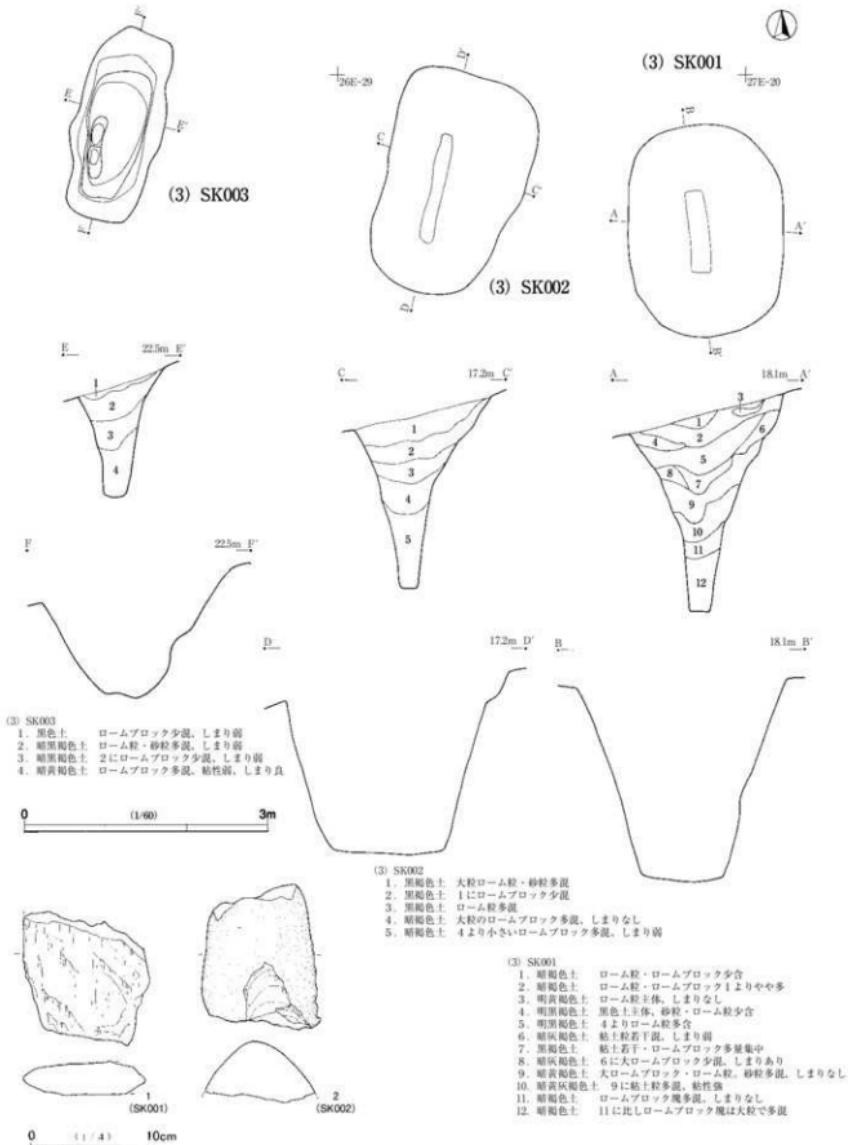
### （3）SK003（第18図、図版8・9）

26E-18・28 グリッド付近に位置する。3基の土坑群の西側、斜面下部において検出された。（3）SK002との間隔は2.6 mを測る。開口部の平面形は長方形、底面の平面形は不整な長楕円形、短軸方向の断面形は漏斗状であるが、側面・底面は凹凸がみられ、（3）SK001・（3）SK002のように整っていない。長軸方向はN-16°-Wを向いている。規模は、開口部の長軸2.35 m、短軸1.13 m、底面の長軸1.3 m、短軸1.13 m、深さ1.60 mを測る。覆土は、（3）SK001・（3）SK002と同様に下層はロームブロックを多く含み、上層はローム粒・ロームブロック・砂粒を含む黒褐土が主体であった。遺物は土師器・須恵器片が4点出土した。

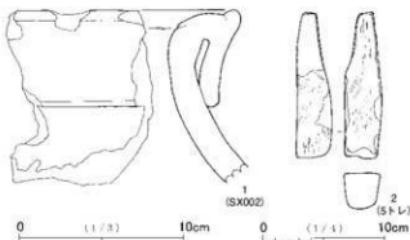
#### 遺構外出土遺物（第19図、図版20）

埋没谷・トレンチから出土した中・近世の遺物は、常滑産陶器壺の破片と砥石の2点のみであった。そのほかに縄文時代早期の土器・石器が少量、古墳・奈良・平安時代の土師器・須恵器片が40点ほど出土した。縄文時代の遺物については第3節において述べる。

1は常滑産陶器壺の口縁部付近の破片である。口縁の縁帯が垂下して下端が頸部に接着する特徴をもつ。胎土中に白色の長石粒を多量に含む。色調はぶい赤褐色である。常滑窯編年の9型式に当たり、15世紀前半の所産である。調査区中央付近の埋没谷（3）SX002から出土している。2は埋没谷（2）SX003にかかる5トレンチから出土した凝灰岩製の砥石である。研磨面は実測図の正面のみである。断面は台形状で、片手で持て使ったものと思われる。上半分は細くなっている。上・下端を除いた非研磨面に縦方向の櫛歯状の鱗跡が残る。現存長11.9cm、最大幅3.0cm、厚さ2.9cm、重量134.15gである。



第18図 (3) SK001 ~ 003



第19図 (3) 調査区出土中・近世遺物

## 第2節 粘土採掘坑

北側の27Cグリッドで粘土採掘坑(3) SX004が検出された。27Dグリッド北側の埋没谷(3) SX003の東側から検出された(3) SK004~006、南東側の曲輪(f)の平場付近に検出された(3) SK008~013は、平面形が楕円形から長楕円形が基調で、底面は長軸方向の斜面下方側が深く掘り込まれているものが多く、(3) SX004内の掘り込みと状況が類似していることから単独の土坑状の粘土採掘坑と捉えた。いずれも出土遺物がないため時期不明であるが、古屋城構築以前のものと思われる。

### (3) SX004 (第20図、図版7)

北側の2段目の腰曲輪(f)から西側の調査地点、27Cグリッド付近に位置する。台地斜面の標高約24.5mより下方を、検出面から0.6m~2.3mほどの深さで不均一に掘り込んでいる。プランは、長さ24m、幅6m程の不整形を呈する。底面には楕円形、溝状の溝みがみられ、白色粘土層に掘り込んでいる。斜面下方の覆土は白色粘土・砂粒を含む暗褐色土を主体とし、自然堆積状を示す。調査時の所見では中世以前の粘土採掘坑とされた。土器製作用の材料として粘土を採掘したのか、あるいはカマド構築用の粘土を採掘したものであろうか。

### (3) SK004 (第21図、図版8・9)

南西方向に下る緩斜面の上方の27D-36グリッドに位置する。平面形は不整な長方形を呈する。長軸方向はN-55°-Eに向いている。規模は、開口部の長軸1.95m、短軸1.05m、底面は斜面の傾斜と同じ南西方向に下がり、深さ約0.8m、比高は0.35mを測る。覆土は粘土ブロックを多く含む。遺物は出土しなかった。

### (3) SK005 (第21図、図版8・9)

埋没谷(3) SX003の東側の縁辺、(3) SK004の約2m西側の27D-25・35グリッドに位置する。開口部の平面形は不整な台形、底面は楕円形を呈する。断面形は擂鉢状で、中央付近は平坦である。長軸方向はN-45°-Wに向いている。規模は長軸1.6m、短軸1.1m、深さ0.9mを測る。覆土は砂粒・粘土・ロームブロックを含む暗褐色土が主体である。遺物は出土しなかった。

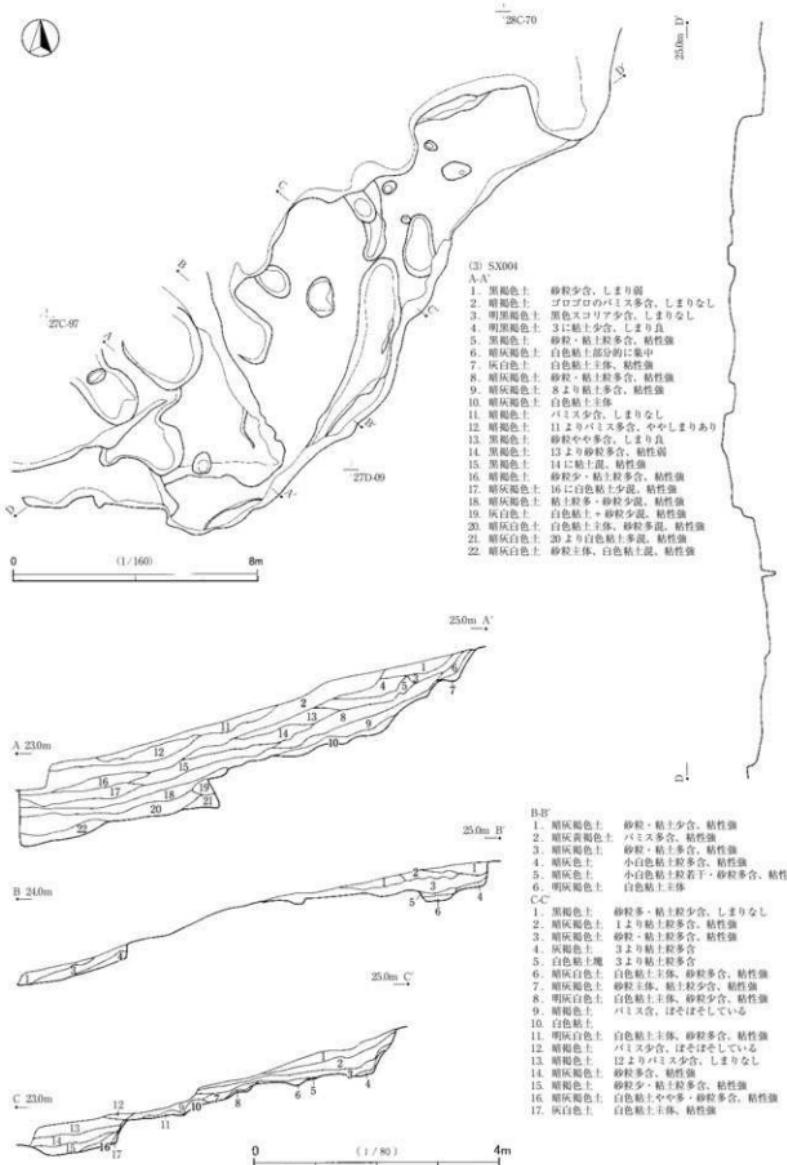
### (3) SK006 (第21図、図版8・10)

埋没谷(3) SX003の東側の縁辺、(3) SK005の30cm北西側の27D-25グリッドに位置する。平面形は不整な楕円形を呈する。底面は南東側でピット状に深くなる。長軸方向はN-84°-Eに向いている。規模は長軸1.6m、短軸1.0m、深さ最大1.1mを測る。覆土は記録を欠くため不明である。遺物は出土しなかった。

### (3) SK007 (第21図、図版10)

埋没谷(3) SX003の南側の緩斜面上方、27D-45グリッドに位置する。平面形は楕円形で、底面は南西側が深くなる。規模は長軸1.1m、短軸0.8m、深さ0.45mを測る。覆土は、砂粒・ローム粒を含む暗褐色土である。遺物は出土しなかった。

### (3) SK008 (第22図、図版10)



第20図 (3) SX004

(3) SX004 の南東側上方の平坦面付近、27D-08・18 グリッドに位置する。梢円形を呈し、底面は南西端がピット状に深く掘り込まれている。規模は長軸 1.1 m、短軸 0.6 m、深さ 0.26 m を測る。覆土には白色粘土ブロックを混入する。遺物は出土しなかった。

(3) SK009 (第 22 図、図版 10)

(3) SK008 の北東側、27D-08 グリッドに位置する。梢円形を呈する。規模は長軸 1.2 m、短軸 0.7 m、深さ 0.3 m を測る。覆土は白色粘土ブロックを混入する。遺物は出土しなかった。

(3) SK010 (第 22 図、図版 10)

27D-29 グリッド付近、6 基の土坑のうち最も標高の高い平坦面に位置する。不整な長方形を呈し、南側がやや深く掘り込まれている。規模は長軸 1.4 m、短軸 0.6 m、深さ 0.3 m を測る。覆土は記録を欠くため不明である。遺物は出土しなかった。

(3) SK011 (第 22 図、図版 10)

28D-00・10 グリッド、平坦面に位置する。不整な梢円形を呈し、東側が深く掘り込まれている。規模は長軸 1.5 m、短軸 0.64 m、深さ 0.4 m を測る。覆土は記録を欠くため不明である。遺物は出土しなかった。

(3) SK012 (第 22 図、図版 10)

28D-00 グリッドに位置する。不整な梢円形を呈し、西側がやや深く掘り込まれる。規模は長軸 1.4 m、短軸 0.65 m、深さ 0.44 m を測る。覆土は白色粘土ブロックを含む。

(3) SK013 (第 22 図、図版 10)

北側に下がる緩斜面 28C-90 グリッドに位置する。北西側が突出する不整な長方形を呈する。底面は凹凸に富み、中央付近が深く掘り込まれる。規模は長軸 1.1 m、短軸 0.8 m、深さ 0.3 m を測る。覆土は記録を欠くため不明である。

### 第 3 節 繩文時代

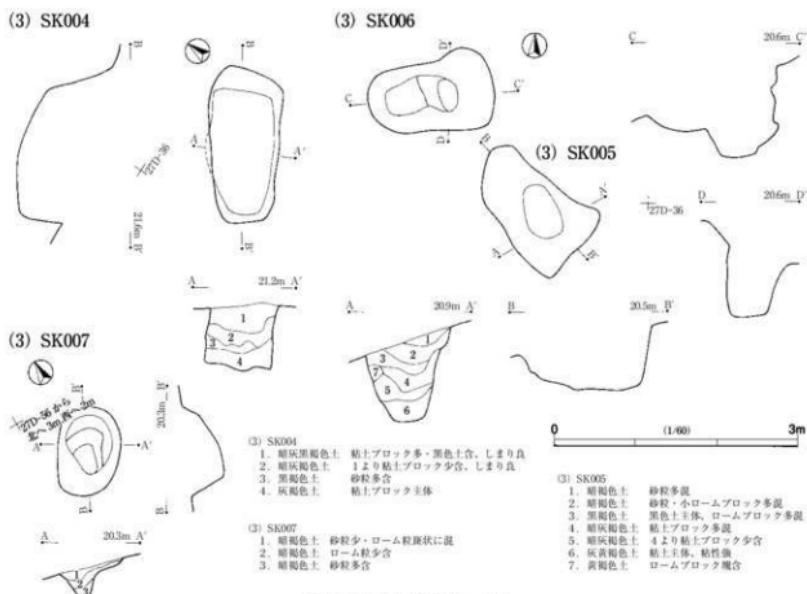
調査区内から縄文時代の土器・石器が少量出土している。

土器 (第 23 図、図版 20)

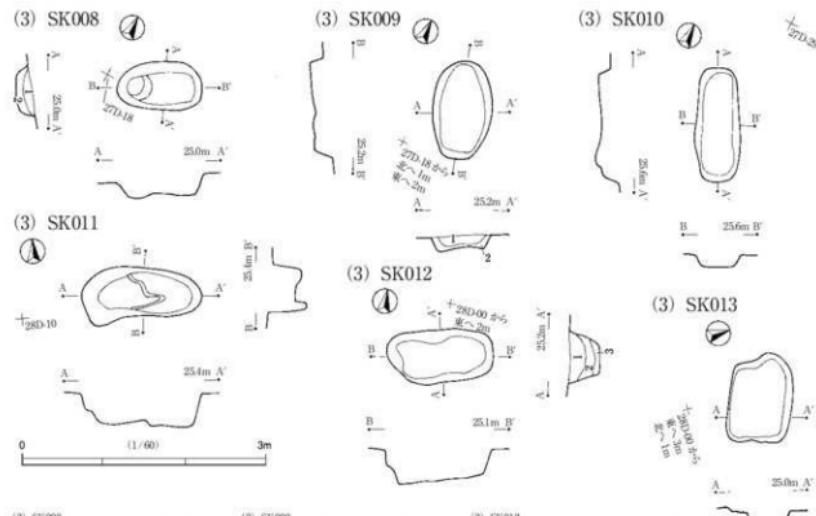
3 点を図示した。いずれも埋没谷 (3) SX003 から出土した。1 は早期撚糸文土器である。胴部片で、間隔が開いた撚糸文 (R) が施される。色調は橙色、胎土は細砂粒を多く含み、焼成は良好である。2 は早期条痕文土器である。胴部片で、表裏に条痕文が施される。色調は外面が赤褐色、内面は灰褐色である。胎土は細砂粒、スコリア、纖維を含む。被熱で器面が荒れ、剥離している。3 は小型の土器と考えられる。縄文 (R L) の施文後に沈線を入れ、磨きを施している。内面はヘラナデが施される。色調は外面が明赤褐色、内面は赤褐色である。胎土は細砂粒を少量含み、焼成は良好である。加曾利 B 式の精製土器と思われる。

石器 (第 23 図、図版 20)

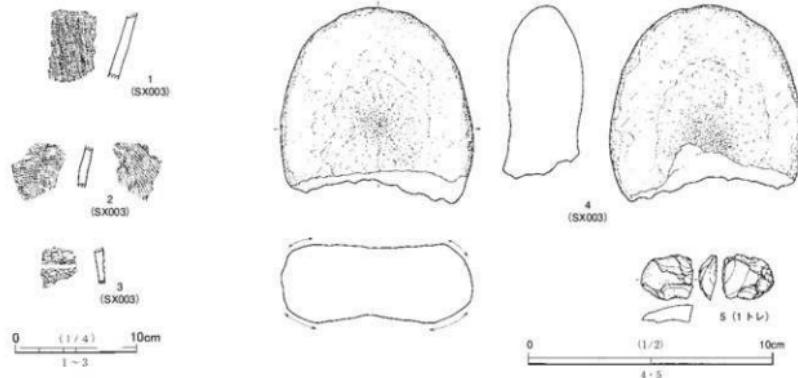
2 点を図示した。4 は安山岩製の円礫製加工工具である。一端を欠損する。小判型の扁平な礫の中央部分に加撃痕が集中し、円く凹んでいる。凹みは両面にある。礫の周縁部にも帶状加撃痕が巡っている。加撃は執拗に反復されているが、あまり強い加撃は加えられていない。また礫面には研磨痕が残る。研磨作業と加撃・被加撃作業との先後関係は不明である。最も一般的な縄文時代の円礫製加工工具である。長さ 75.0mm、幅 78.6mm、厚さ 32.7mm、重量は 327.7g である。埋没谷 (3) SX003 から出土した。5 は 1 ト



第21図 (3) SK004 ~ 007



第22図 (3) SK008 ~ 013



第23図 (3) 調査区出土縄文時代遺物

レンチから出土した白色玉髓製の楔形石器である。背面に蝶面を留める剥片を素材とする。半分に割れているが、これは加撃に伴うアクシデントによるものと見られる。上下両端及び、背面左側縁に加撃痕が残されている。腹面の加撃は浅く、また内部にまで入り込んでいない。このことから両極石核というよりも、小型の加工具として機能していた可能性がある。背面の風化が腹面よりも顕著であるところから、一定期間背面が地表に露呈していたらしい。長さ17.5mm、幅20.5mm、厚さ0.7mm、重量は3.6gである。

## 第5章 平成19年度 (4) 調査区の成果

### 第1節 中・近世 (第24図、図版11)

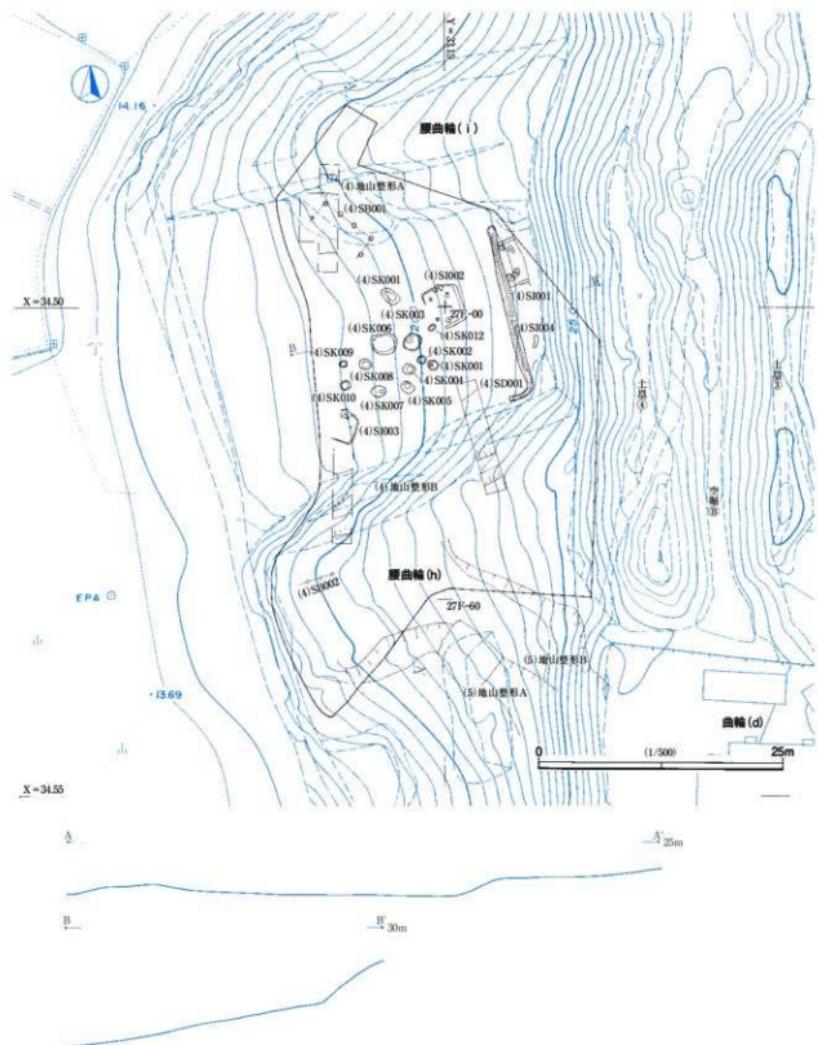
(4) 調査区は、古屋城跡の南西側の(3)調査区の南側に隣接する緩斜面部である。調査区中央付近の埋没谷のテラス状地形を挟むように北側と南側に曲輪を造成した(4)地山整形A・Bを検出した。(4)地山整形Aの上面では横列(4)SB002を検出した。埋没谷の谷頭では溝状遺構(4)SD001を検出した。

#### (4) 地山整形A (第24図、図版11)

26E・27Eグリッドにおいて検出した(4)地山整形Aは、(3)・(4)調査区境にまたがって位置する舌状の腰曲輪(i)の南側部分で、尾根を切土して成形したものである。崖面の上端部のラインはN-70°Eに向いている。削り出した崖面の比高は60cm~70cmである。平場の規模は、東西方向約25m、南北方向約13mである。東側と西端の比高は4.5mほどである。南側の舌状部の中央付近に、東西方向に走る南側が約50cm下がる段差、さらに南北方向にも西側に下がる段差があり、テラス状の平場が形成されている。

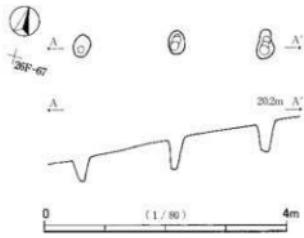
#### (4) 地山整形B (第24図、図版11)

26F・27Fグリッドでは、(4)・(5)調査区境にまたがって位置する尾根状の張り出した腰曲輪(h)の北側部分で、地山を切土して上面の平場を曲輪としたものである。北側の埋没谷とは比高は約2mを測る。



第24図 (4) 調査区全体図

崖面の上端部は約35mを測り、N-95°-W方向に向いている。現況地形測量図で確認できる崖面の2か所のテラス状の面を検出できたが、記録を欠くため詳細は不明である。上面の平場は東西方向約30m~33mを測り、東側の台地下と西端の比高差は約7mである。南側の整形した崖面については(5)調査区に



第25図 (4) SB002

おいて述べる。

#### (4) SB002 (第25図)

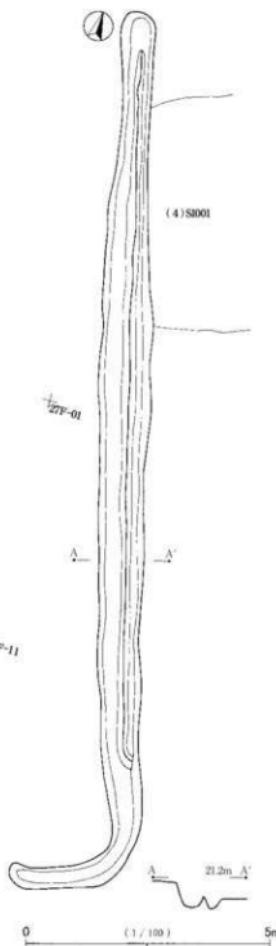
調査区南側の26F-57 グリッドにおいて検出した柱穴3基が東西方向に直列するもので、舌状に張り出す曲輪平場の北側の崖面上端から約3m内側に位置する。列の方向はN-71°-Eで、崖面上端のラインとほぼ平行する。全長は3.0m、柱間は約1.5mである。柱穴は、径26cm~38cm、深さ40cm~50cmを測る。各柱穴の底面の比高は傾斜に沿っており、柵列或いは塀であつたと考えられ、平場を囲んでいた一部である可能性が高い。遺物は出土しなかった。

#### (4) SD001 (第26図、図版13)

埋没谷の谷頭27E~27F グリッドにかけて、おおむね標高21mの等高線に沿うように延びる壠状の溝状構造である。断面形はやや開いたU字状を呈する。長さ18m、幅1m、深さ0.5mを測る。中央付近の斜面上方の東側は、14.7mにわたって二重に掘り込まれている。南端部は「L」字状に曲がり、長さ2m、深さ約10cm~17cmを測る。南北方向はN-13°-Wに向き、北側・南側の舌状の地山整形部の崖面下端のライン方向と概ね直交している。台地の下端部に防御設備として掘られたものであろう。遺物は出土しなかった。

## 第2節 繩文時代

縩文時代の遺構は土坑12基である。調査区中央部に集中して検出され、土坑群と考えられる。調査区は、台地西側斜面中段のテラス状地形である。西側を除く3方向を古屋城跡の土塁で囲まれている。古屋城造成時は、土塁付近の急斜面化の整形が主で、中央部の整形は比較的軽微であったと考えられる。標高は18m~21mである。中央部は緩斜面のため、山側と谷側



第26図 (4) SD001

で遺構の地山への掘り込みに差があり、山側が深く、谷側が浅くなる。

土坑からの土器の出土はごくわずかで、土器が出土しない土坑もあった。しかし、土坑が所在するグリッドから、器面はかなり荒れているが、縄文時代早期条痕文土器が出土しているので、古屋城造成時の整形による搅乱を考慮して、土坑群は縄文時代早期と考えられる。

底面の形状から土坑は2種類に区分できる。底面が斜面と同様に傾斜している土坑と、底面が水平の土坑である。用途の違いと考えられるが、底面が水平の土坑の4基の内3基は埋め戻しが行われている。

#### (4) SK001 (第27図、図版11)

土坑群の東端に位置する。主なグリッドは26F-19である。北西側に(4)SK002が隣接する。平面形は楕円形で、規模は110cm×97cm、確認面からの深さは山側で15cm、谷側で10cmである。長軸方位はN-60.5°-Wである。底面は斜面方向に傾斜し、底面西端にピットが検出された。平面形は楕円形で、規模は58cm×54cm、底面からの深さ6cmである。覆土は自然堆積で、斜面上部からの堆積が観察される。

#### (4) SK002 (第27図、図版11)

土坑群の東端に位置する。主なグリッドは26F-19である。南東側に(4)SK001、北西側に(4)SK003、南西側に(4)SK004が隣接する。平面形はほぼ円形で、規模は径74cm、確認面からの深さは山側で20cm、谷側で12cmである。底面はほぼ水平である。覆土は単一層で、自然堆積と考えられる。

#### (4) SK003 (第27・28図、図版11)

土坑群の東端に位置する。主なグリッドは26F-09である。南東側に(4)SK002、西側に(4)SK006、北東側に(4)SK012が隣接する。平面形は丸みのある方形で、規模は178cm×176cm、確認面からの深さは、山側10cm、谷側で10cmである。長軸方位はN-16°-Eである。底面は斜面方向に傾斜し、底面西壁際にピットが検出された。平面形は楕円形で、規模は74cm×66cm、底面からの深さは12cmである。覆土は自然堆積で、斜面上部からの堆積が観察される。覆土中から土器片が1点出土しており、第28図に図示した。

#### (4) SK004 (第27図、図版11・12)

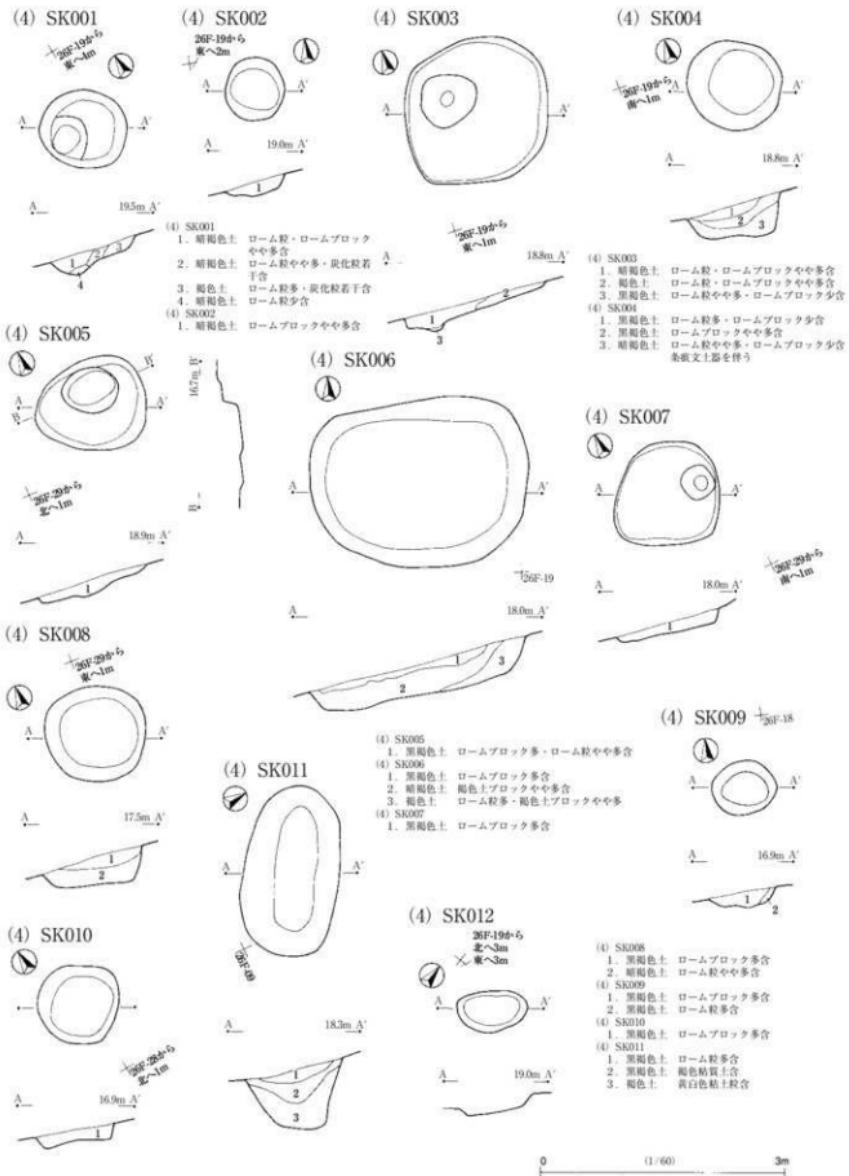
土坑群の東端に位置する。主なグリッドは26F-19である。北東側に(4)SK002、南側に(4)SK005が隣接する。平面形は円形で、規模は径116cm、確認面からの深さは山側で53cm、谷側で24cmである。底面は水平である。覆土は土層の状況から、最下層は埋め戻し土と思われるが、上部2層は自然堆積土で、斜面上部からの堆積が観察される。

#### (4) SK005 (第27図、図版11)

土坑群の南東端に位置する。主なグリッドは26F-19である。北側に(4)SK004、西側に(4)SK007が隣接する。平面形は楕円形で、規模は140cm×115cm、確認面からの深さは山側で10cm、谷側で8cmである。長軸方位はN-84°-Wである。底面は斜面方向に傾斜し、底面北端にピットが検出された。平面形は楕円形で、規模は72cm×54cm、底面からの深さは、最大で28cmである。覆土は単一層で、自然堆積と考えられる。

#### (4) SK006 (第27・28図、図版12)

土坑群の中央に位置する。主なグリッドは26F-08である。東側に(4)SK003、南西側に(4)SK008が隣接する。平面形は丸みのある長方形で、規模は270cm×209cm、確認面からの深さは山側で38cm、谷側で24cmである。長軸方位はN-90°-Eである。底面は斜面方向に傾斜している。覆土は自然堆積で、斜面上部からの堆積が観察される。覆土中から土器片が少量出土しており、第28図に図示した。



第27図 (4) 調査区縄文時代土坑

#### (4) SK007 (第 27 図、図版 12)

土坑群の南端に位置する。主なグリッドは 26F-18 である。東側に (4) SK005 が隣接する。平面形は丸みのある長方形で、規模は 128cm × 126cm、確認面からの深さは山側で 17cm、谷側で 8cm である。長軸方位は N-66° -W である。底面は斜面方向に傾斜し、底面東端にピットが検出された。平面形は丸みのある正方形、一辺 40cm、底面からの深さは最大 40cm である。覆土は單一層で、自然堆積と考えられる。

#### (4) SK008 (第 27 図、図版 12)

土坑群の中央に位置する。主なグリッドは 26F-18 である。北東側に (4) SK006、西側に (4) SK009 が隣接する。平面形は楕円形で、規模は 124cm × 120cm、確認面からの深さは山側で 44cm、谷側で 16cm である。長軸方位は N-65° -W である。底面はほぼ水平である。覆土は土層から、最下層は埋め戻し土と思われるが、上部土層は自然堆積土で、斜面上部からの堆積が観察される。

#### (4) SK009 (第 27 図、図版 12)

土坑群の西端に位置する。主なグリッドは 26F-17 である。東側に (4) SK008、南側に (4) SK010 が隣接する。平面形は楕円形で、規模は 82cm × 66cm、確認面からの深さは山側 17cm、谷側 14cm である。長軸方位は N-85° -W である。底面はほぼ水平である。覆土は自然堆積土で、斜面上部からの堆積が観察される。

#### (4) SK010 (第 27 図、図版 12)

土坑群の南西端に位置する。主なグリッドは 26F-17・18 である。北側に (4) SK009 が隣接する。平面形は楕円形で、規模は 105cm × 102cm、確認面からの深さは山側で 20cm、谷側で 14cm である。長軸方位は N-82° -E である。底面は斜面方向に傾斜している。覆土は單一層で、自然堆積と考えられる。

#### (4) SK011 (第 27 図、図版 12)

土坑群の北端に位置する。主なグリッドは 26E-98・99 である。他の土坑からはやや離れている。平面形は楕円形で、規模は 210cm × 119cm、確認面からの深さは山側で 104cm、谷側で 66cm である。長軸方位は N-56° -W である。底面はほぼ水平である。覆土は土層から、最下層は埋め戻し土と思われるが、上部 2 層は自然堆積土と考えられ、斜面上部からの堆積が観察される。土坑の形状および規模から、陥穴の可能性がある。

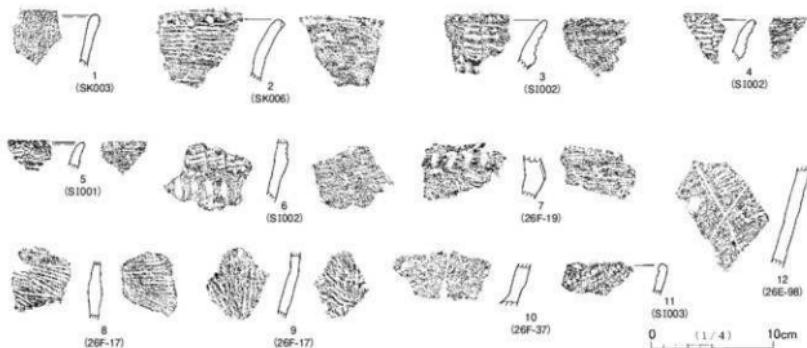
#### (4) SK012 (第 27 図、図版 11)

土坑群の北東端に位置する。主なグリッドは 26F-09 である。他の土坑からはやや離れている。平面形は楕円形で、規模は 88cm × 51cm、確認面からの深さは山側で 16cm、谷側で 8cm である。長軸方位は N-48° -E である。底面は斜面方向に傾斜している。

#### 土器 (第 28 図、図版 20)

1 は (4) SK003 から出土した。深鉢形土器の口縁部片で、口唇部は丸く、やや肥厚する。口唇部に施文ではなく、縱方向に撲糸文 (L) が施される。色調は内外面ともににぶい橙色である。胎土は砂粒を含み、焼成は良好である。早期夏島式と考えられる。2 は (4) SK006 からの出土である。深鉢形土器の口縁部片で、口唇に刻み目、表裏に横方向の条痕文が施される。色調は内外面ともににぶい褐色である。胎土は細砂粒・纖維を含む。焼成は良好である。早期茅山下層から上層式であろう。

3～12 は縄文時代土坑以外からの出土である。3～10 は早期条痕文系土器である。3～5 は深鉢形土器の口縁部片で、同型式と考えられる。口唇下に施文具による 2 条一組の押し引き文が施され、3・4 は「く」字状の段を持ち、段に刻み目が施される。表裏全体にナデが施される。色調は、3・5 が内外面ともに橙色、



第28図 (4) 調査区出土縄文土器

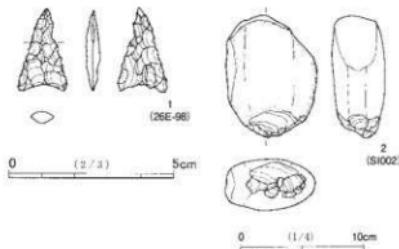
4は内外面ともに灰褐色である。胎土は、細砂粒・纖維を含み、焼成は良好である。6は3~5と同型式土器の胴部片である。口縁部に近く、施文具による2条一組の押し引き文が施され、「く」字状の段を持つ。段下には施文具による縱方向のナデが施される。色調は内外面ともに灰褐色である。胎土は細砂粒・纖維を含み、焼成は良好である。

7は深鉢形土器の胴部で、「く」字状の段部分である。刻み目が施される。色調は内外面ともに明赤褐色である。胎土は砂粒・纖維を含み、焼成は良好である。8・9は深鉢形土器の胴部片である。表裏に貝殻条痕文が施され、8は横位、9は縦位である。色調は8が内外面ともにぶい赤褐色、9は内外面ともにぶい褐色である。胎土は細砂粒・纖維を含む。焼成は良好であるが、被熱で器面が荒れている。10は胴部下端部片である。器面が荒れているため文様は不明であるが、3~9と胎土が類似し、纖維が含まれることから、茅山下層から上層式であろう。底部の形は不明であるが、丸底と思われる。色調は外面が暗赤褐色、内面が明赤褐色で、胎土は砂粒を多く含み、纖維を含む。焼成は良好である。

11・12は後期の深鉢形土器である。被熱で器面が荒れている。11は口縁部片で、表面に縄文(LR)が施され、内面の口唇部直下に横方向の沈線が施される。色調は外面がぶい赤褐色、内面が明赤褐色で、胎土は細砂粒を多く含み、スコリアを含む。焼成は良好である。12は胴部片である。表面は地文に縄文(LR)が施され、沈線が格子状に施される。色調は内外面ともに明赤褐色で、胎土は細砂粒・スコリアを含む。焼成は良好である。加曾利B式の粗製土器である。

#### 石器 (第29図、図版21)

1は石鏡である。半透明緑入りの黒曜石製である。凹基三角鏡に分類されるが、側縁部は直線的で、先端部で曲線状に収斂する。完形で、両面は押圧剥離痕によって覆われている。側縁部に沿って、押圧剥離



第29図 (4) 調査区出土縄文時代石器

痕を切る微細な剥離痕が多数確認される（微細なので実測図には書き込まれていない）。この剥離痕の末端はステップとなり、アブレイジョン（縁辺摩擦）による側縁調整過程が想定される。アブレイジョンは押圧剥離には必ず随伴するが、整形最終段階における仕上げ調整としても使われていることを示すものである。一側縁にわずかに不整な部位が認められるが、これは嵌入した小バッチによるハジケ部である。基部は非常に薄く仕上げられているが、やや小鋸歯状になる。この部位にはアブレイジョンは及んでいない。機能的な着柄部に最終的な仕上げは不要であることが理由と考えられる。長さ 25.2mm、幅 15.5mm、厚さ 4.5mm、重量 1.09g である。2 は閃綠岩製の円碟製加工工具である。奈良・平安時代の竪穴住居跡（4）SI002 から出土した。楕円形の扁平な碟を利用する。上下両端に加撃痕が集中する。加撃は強く、碟面は潰れたような状況になっている。また、加撃部から大小の剥離痕が放射状に発達している。一端に見られる大きめの割れは、加撃に伴う破碎痕である。側縁にも帯状の加撃痕があるが、加撃はやや軽度で、器体の損壊はほとんどない。また、片面は滑らかな研磨部によって覆われている。研磨部には弱い光沢が残される。他の面は局部的に研磨痕が残るが、風化のため明瞭さを欠いている。中央部に弱い被打痕らしい部分も認められるが、明確ではない。本来は両面研磨（片面被加撃）+ 側縁敲打という構成であったが、最終的に端部の強い加撃が機能的に加わったものと見られる。長さ 170.7mm、幅 74.3mm、厚 414.1mm、重量 460.2g である。

### 第3節 奈良・平安時代

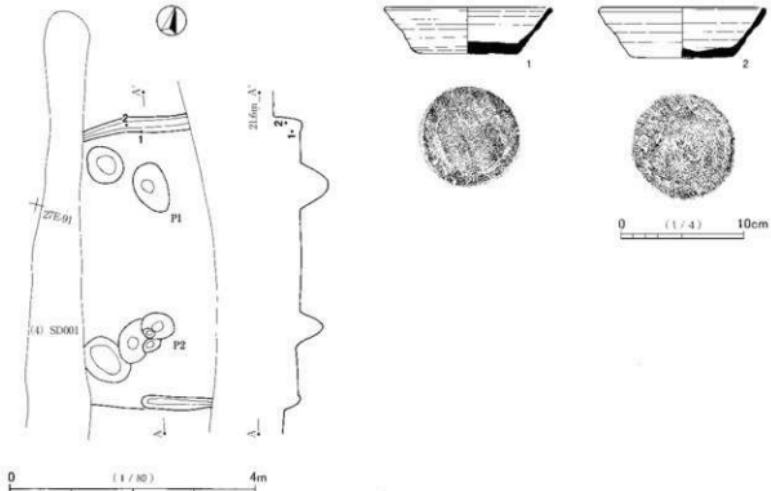
奈良・平安時代の遺構は、竪穴住居跡 4 軒・掘立柱建物跡 1 棟である。縄文時代の遺構と同様に、調査区中央の台地西側中段のテラス状地形中央部である。検出面の標高は 17 m ~ 21 m である。古屋城造成時に整形されているが、南北および東側の土塁付近の急斜面化の整形が主であり、中央部の整形は比較的軽微だったので、遺構が残ったと考えられる。

なお、出土遺物の計測値は第3表に記載している。

#### (4) SI001 (第30図、第3表、図版13・21)

テラス状地形中央部北東端、東側の土塁（4）直下に位置する。主なグリッドは 27E-81・91 である。東側半分は調査区外、西側壁は（4）SD001 との重複および緩斜面のため検出されなかった。検出された部分は、北壁および南壁の西半分とその間の床面、柱穴およびピットである。カマドは北壁に位置すると思われる所以、主軸方位は N-17°-W である。平面形は方形と思われ、規模は主軸長 4.88 m、推定幅 5.40 m、確認面からの深さは最大 83cm である。床面の明瞭な硬化面は検出されなかった。柱穴は 2 基検出された。P1 は楕円形で 85cm × 58cm、深さ 57cm、P2 は楕円形で規模は 56cm × 45cm、深さは 39cm である。P2 は建て替えの可能性があり、ピットが 3 基重複している。その内で、大きなものは柱穴と考えられる。楕円形で、規模は 77cm × 50cm、深さは 44cm である。ほかの 2 基は小さく、1 つは径が 22cm、深さが 31cm、ほかは径が 17cm、深さが 25cm である。北西および南西の床面隅にそれぞれピットが 1 基検出された。北西隅は楕円形で規模は 69cm × 57cm、深さは 15cm、南西隅は楕円形で規模は 85cm × 64cm、深さは 17cm である。周溝は北壁および南壁下で検出されたが、南壁下西半部では検出されなかった。下端幅は 6 cm ~ 13 cm、深さは最大 10cm である。

出土遺物は少量であるが、北壁下で須恵器坏の良好な破片が 2 点出土している。1・2 は須恵器坏である。1 は平底で、体部が外傾して立ち上がり、直線的に口縁部に至る。口縁部はわずかに外反する。口唇



第30図 (4) SI001

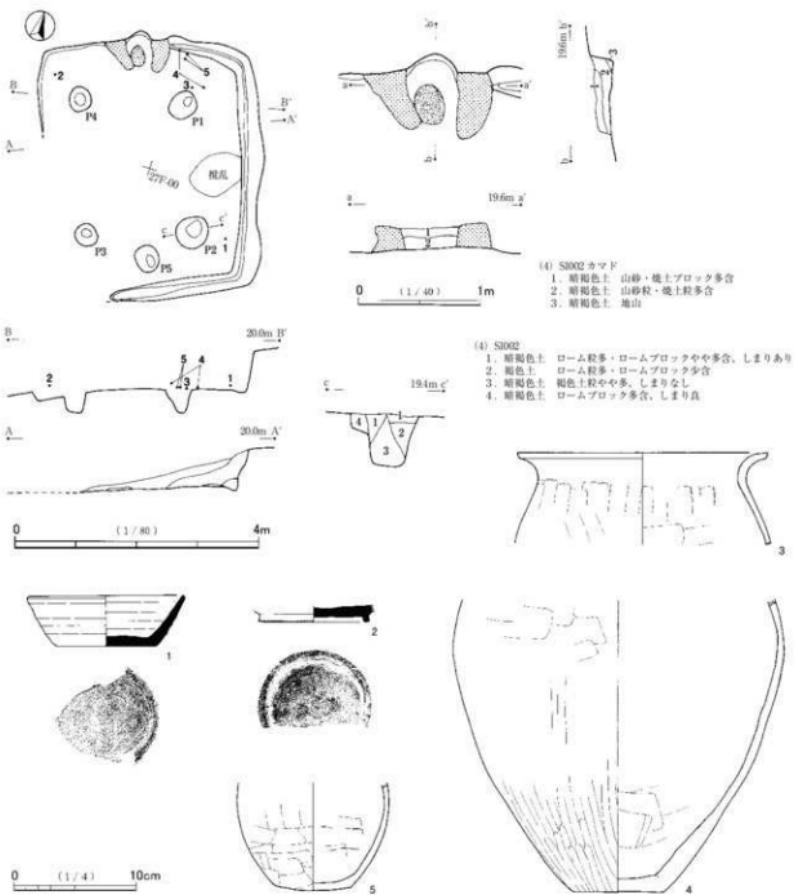
部が肥厚し、口唇は丸い。ロクロ目が顕著である。底部に手持ちヘラケズリが施され、底部切り離し痕は不明である。口縁部から体部にかけて波状に割れ口が観察されるので、意図的に打ち欠かれたと考えられる。胎土は砂粒を少量含み、スコリアを含む。2は平底で、体部が外傾して立ち上がり、直線的に口縁部に至る。口縁部はゆるやかに内擣し、口唇部がわずかに受け口状になる。ロクロ目が顕著である。底部に手持ちヘラケズリが施され、底部切り離し痕は不明である。胎土は砂粒、スコリアを多く含み、白雲母片を含む。被熱のため器面が荒れている。時期は奈良時代中頃と考えられる。胎土から新治窯産と思われる。

#### (4) SI002 (第31図、第3表、図版13・21)

テラス状地形中央部中央やや東よりに位置する。主なグリッドは26E-99である。北側壁中央にカマドが位置している。主方位はN18°Wである。平面形は隅丸方形、規模は主軸長4.30m、幅3.74m、確認面からの深さは最大69cmである。床面の明瞭な硬化面は検出されなかった。柱穴は4基検出された。P1は楕円形で、50cm×42cm、深さ37cm、P2は楕円形で、58cm×53cm、深さ41cm、P3は楕円形で、38cm×34cm、深さ39cm、P4は楕円形で、42cm×38cm、深さ34cmである。カマド対面の壁際にピットが検出された。出入り口施設と考えられる。楕円形で、45cm×40cm、深さ32cmである。周溝は住居跡東半部の壁下で検出されたが、西半部では検出されなかった。下端幅は5cm～14cm、深さは最大8cmである。

カマドは斜面のため残りは悪い。長さ69cm、幅104cm、奥壁の高さ19cmである。奥壁の掘り込みは幅42cm、奥行14cmである。向かって左側袖長は42cm、幅21cm、右側袖長は53cm、幅27cmである。火床部は楕円形で、33cm×25cm、掘り込みはほとんどなかった。焚き口の幅は29cmである。

出土遺物は少量であるが、床面直上から図示した土器片が5点出土している。1は須恵器片である。平底で、体部が外傾して立ち上がり、ごくわずかに内擣して直線的に口縁部に至る。口縁部は直線的に開き、



第31図 (4) SI002

口唇部に向かい器厚が薄くなる。ロクロ目が顕著である。底部に回転ヘラケズリが施され、底部切り離し痕は不明である。胎土は砂粒を少量含み、スコリア、長石粒、白雲母片を含む。2は須恵器高台付坏の底部である。高台は短く、「ハ」字状に開き、断面は四角である。底部外面は回転ヘラケズリが施され、径7mmの円形圧痕が2か所に施される。目印または重ね焼きの工具痕かは不明である。

3～5は土師器甕である。3・4は同型と考えられる。3は口縁部～胴部上半部で、丸みのあるやや縱長の胴部から口縁部が短く外反する。口縁部は面取り状にヨコナデが施され、口唇部がごくわずかであるが、受け口状になる。調整は、口縁部内外面にヨコナデ、胴部は外面に縱方向のヘラケズリの後ナデ、内面は横方向にヘラケズリ・ナデが施される。4は胴部～底部である。底部は平底で、木葉痕が施される。

胴部はやや長胴で、丸みがあり、上位で最大径を測る。調整は、外面が上位で横方向のヘラケズリ、中位から下位が縦方向のヘラナデもしくはヘラミガキが施される。内面は、主に横方向のナデが施される。胎土は粗い砂粒、白雲母片を多く含む。常縫型窓と考えられる。5は小型で、胴部～底部である。底部はやや丸底で、胴部はやや縦長の球形である。調整は、底部外面にヘラケズリ、胴部は外面が、上部で縦方向のヘラケズリ、下部が横方向のヘラケズリが施される。内面は主に横方向のナデが施される。胎土は砂粒を含む。

#### (4) SI003 (第32図、第3表、図版13・21)

テラス状地形中央部の南西端部に位置する。主なグリッドは26F-27・28である。北側壁中央にカマドが位置している。主軸方位はN-18°-Wである。西半部の壁は、緩斜面のため検出されなかった。平面形は隅丸方形、規模は主軸長3.10m、推定幅3.50m、確認面からの深さは最大48cmである。床面の明瞭な硬面は検出されなかった。柱穴、周溝は検出されなかった。東壁下中央付近にピットが1基検出された。楕円形で、28cm×22cm、深さ14cmである。緩斜面を考慮すると、山側からの入り口施設とも考えられる。

カマドは斜面のため遺存状況が不良である。規模は、長さ74cm、幅98cm、奥壁の高さ38cmである。奥壁の掘り込みは幅74cm、奥行19cmである。向かって左側袖長は39cm、幅25cm、右側袖長は66cm、幅37cmである。火床部は楕円形で、径33cm×24cm。掘り込みはほとんどなかった。焚き口の幅は42cmである。

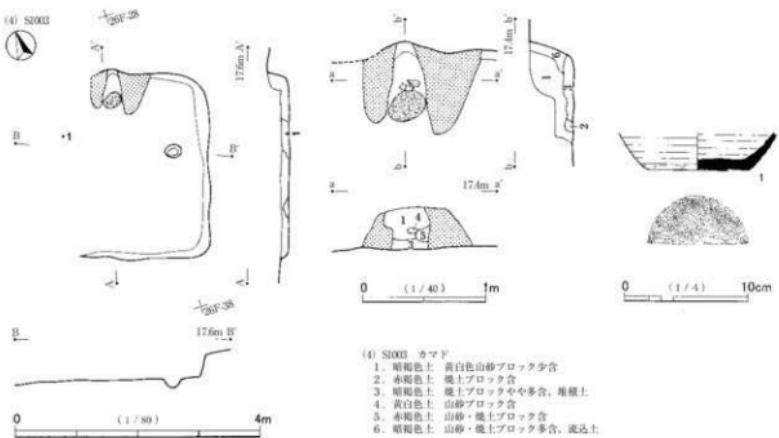
出土遺物は少量であるが、カマド左側の床面直上から良好な須恵器坏片が出土している。カマド内からは土師器壺片が出土しているが、接合の結果、図示には至らなかった。1は須恵器坏である。口縁部が欠損する。平底で、体部が外傾して立ち上がり、わずかに内彎して開く。底部および体部下端外面に手持ちヘラケズリが施される。

#### (4) SI004 (第32図)

テラス状地形東端、土堀(4)直下に位置する。主なグリッドは27F-01である。古屋城造成など後世の擾乱のため、カマドの痕跡と思われる山砂および焼土が検出されたのみである。遺物は出土しなかった。

#### (4) SB001 (第33図、図版12)

テラス状地形北西側、26E-77・87・88グリッドに位置する。(4)地山整形Aから埋没谷に移行する斜面において検出された。南西の斜面下方の柱穴列は検出できなかったが、桁行3間×梁行2間の側柱建物と思われる。桁行5.9m、梁行は現況の2柱間は約2mを測る。梁行の方向はN-37°-Eに向き、傾斜方向とほぼ同じである。柱穴は径30cm～86cm、深さ最大73cmを測る。柱穴の覆土は、褐色土ブロックを含む暗褐色土が主体である。遺物は出土しなかった。

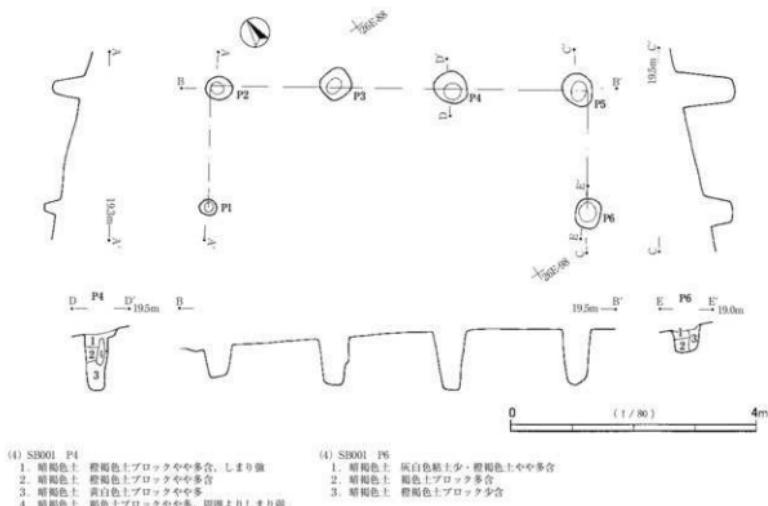


第32図 (4) SI003・004

第3表 (4) 調査区出土奈良・平安時代土器観察表

( ) は推定値 [ ] は現存値 色調は上段内面・下段外面

道橋番号	排団番号	器種	器形	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	遺存度	色調	粘土	混入物	焼成	調整外面	調整内面	底部切り離し	底外調整	備考	
(4)SI001	第30団	1	須恵器	环	13.6	8.0	4.8	75%	灰 灰	密 少	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	不明	全面手持ち ハラケズリ	打ち欠き 新治窯産	
(4)SI001	第30団	2	須恵器	环	(13.4)	8.6	4.1	60%	にぶい燈 籠 にぶい燈 籠	粗 粗	白 白雲 母片	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	不明	全面手持ち ハラケズリ	新治窯産
(4)SI002	第31団	1	須恵器	环	(12.8)	8.2	4.1	40%	灰 灰	密 少	白色粒 白雲 母片	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	不明	全面回転ヘ ラケズリ	新治窯産
(4)SI002	第31団	2	須恵器	高台付环	—	9.0	—	20%	灰 灰	密 少	白雲 母片 褐色	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	不明	全面回転ヘ ラケズリ 円型压痕2 小所	新治窯産
(4)SI002	第31団	3	土師器	甕	20.6	—	—	20%	口縁部 ～胴部上半部 にぶい黒	粗 粗	多 多	良好 良好	口縁部ヨコナ デ胸部ヘラケ ズリの後ナデ	口縁部ヨコナ デ胸部ヘラケ ズリ・ナデ			
(4)SI002	第31団	4	土師器	甕	—	7.6	—	50%	胴部 ～底部 にぶい黒	粗 粗	多 多	白雲 母片	良好	ハラケズリ ナデ	ハラケズリ ナデ	本集灰	
(4)SI002	第31団	5	土師器	小型甕	—	6.2	—	50%	胴部 ～底部 にぶい黒	灰 灰	少 多	良好	ハラケズリ	ナデ	ハラケズリ		
(4)SI003	第32団	1	須恵器	环	—	8.2	—	25%	体部 ～底部 褐灰	粗 粗	長石 白雲 母片	良好	ヨコナデ・下 手持ヘラ ケズリ	ヨコナデ	不明	全面手持ち ハラケズリ	新治窯産



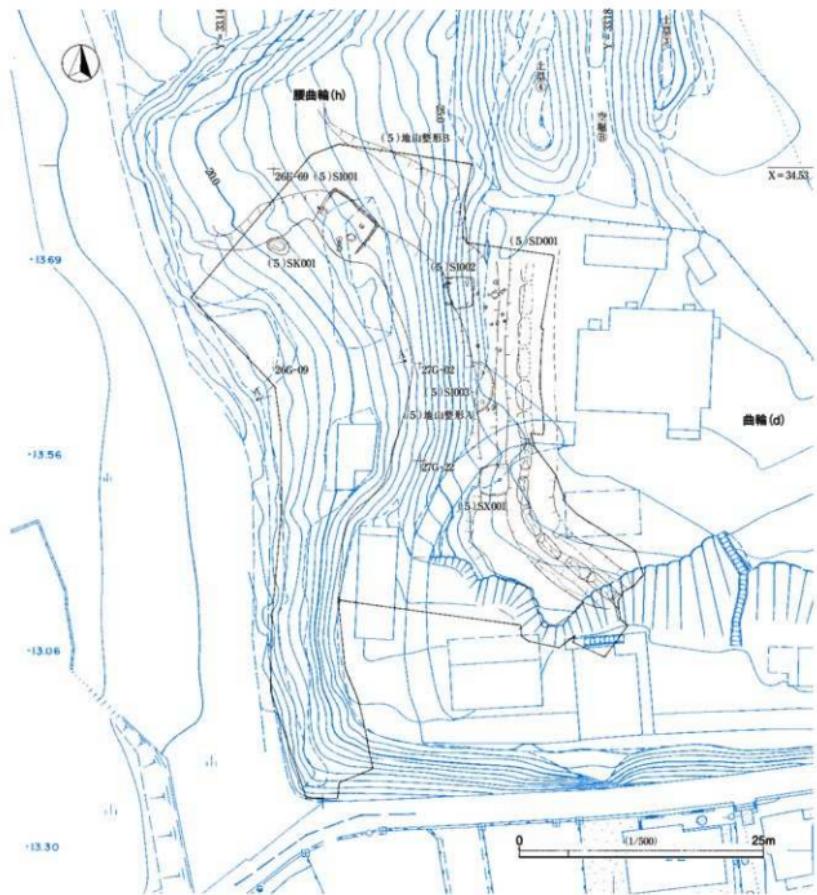
第33図 (4) SB001

## 第6章 平成27年度(5)調査区の成果

### 第1節 中・近世(第34図、図版14)

(5) 調査区は、26F・27F・26G・27G グリッドで古屋城跡の南西地区にあたる。26F・27F グリッドでは、(4)・(5) 調査区境にまたがって位置する舌状に張り出した曲輪の南側にあたる(5)地山整形 A・B を検出した。(5) 地山整形 A の南側は、曲輪(d)より一段下の東から西へ下がる緩斜面端を急崖面になるよう削り落としている。斜面上には西側に開口する埋没谷があり、現況地形測量図によれば小規模なテラス状の腰曲輪の存在が想定されていた。

調査区北側の平坦面の縁辺は民家の庭であり、土壘の痕跡が1条確認できた。主郭西端側の土壘(④)が南側に続いていると考えられる。土壘の盛土下には、腰曲輪(d)に続く整地層が検出された。27F-72 ~ 27G-46 グリッドにかけて、整地下面下約1.5mに地山を掘り込んだ空堀(5) SD001A 及び外側に(5)土壘 A が検出された。空堀は「障子堀」といわれる堀の中での移動を阻止するための畠状の障壁を持つものである。この空堀は一旦埋め戻され、0.5m ~ 1m 上に断面V字状の空堀(5) SD001B、外側も盛土による土壘 B が形成されたことが土層断面により確認された。(5) 土壘 A 上部の平坦面には方形の竪穴状遺構(5) SX001 が構築されていた。この平坦面からは古墳時代前期の竪穴住居跡(5) SI002・003 が検出されたことから、この地点の古屋城造成以前の崖面の旧地形は、東から西への緩斜面であったことが窺える。調査区北側の(5)地山整形 A の下方からは、(3) 調査区において検出された(3) SK001 ~ 003

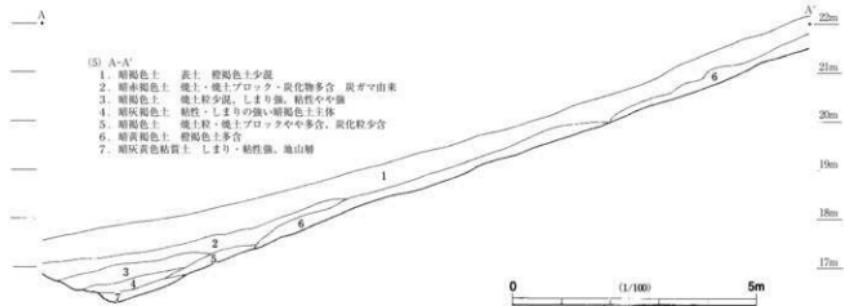


第34図 (5) 調査区全体図

に類似した土坑 (5) SK001 を検出した。

#### (5) 地山整形 A (第34・35・36図、図版15・16)

(4)・(5) 調査区の境付近に位置する舌状の張り出し南側から斜面部を切土し、崖面を造成したものである。(4) 調査区から続く舌状の曲輪(h)の平場は、東西方向 30 m ~ 33 m、西側の先端付近の南北方向の長さは約 11 m を測る。東側の台地下と西端の比高は約 7 m である。崖面の比高は西側の 27F-79 グリッド付近で約 1.3 m を測り、西側に行くに従い高さを減していく。南側は(5) 土壠 A の外側の帶曲輪を削り残し、谷を取り囲むように比高 1 m ほどの急崖面を造成している。下段は東西方向 30 m、南北方向



第35図 (5) 調査区土層断面図

に15mほどの緩斜面であり、さらに西側の調査区外は緩斜面端から比高4mほどの急崖面になって谷底面に続いている。(5) SD001B・(5) 土塁B構築時には粘性を有する暗褐色土によって埋め戻され、緩斜面が形成されている(第36図 SD001A-A'の36~38層)。

#### (5) 地山整形B(第34図、図版15・16)

(5) 地山整形Aの上方、竪穴住居跡(5) SI001の東側を北西から南東方向に台地斜面にかけて切土し設けられた腰曲輪(h)の南東側にあるテラス状の平場である。東側で比高1m程の急崖面を造成している。平場は南西方向に向き、東西方向に幅10m、南北方向に10m程を測る。比高1mほどの緩斜面である。

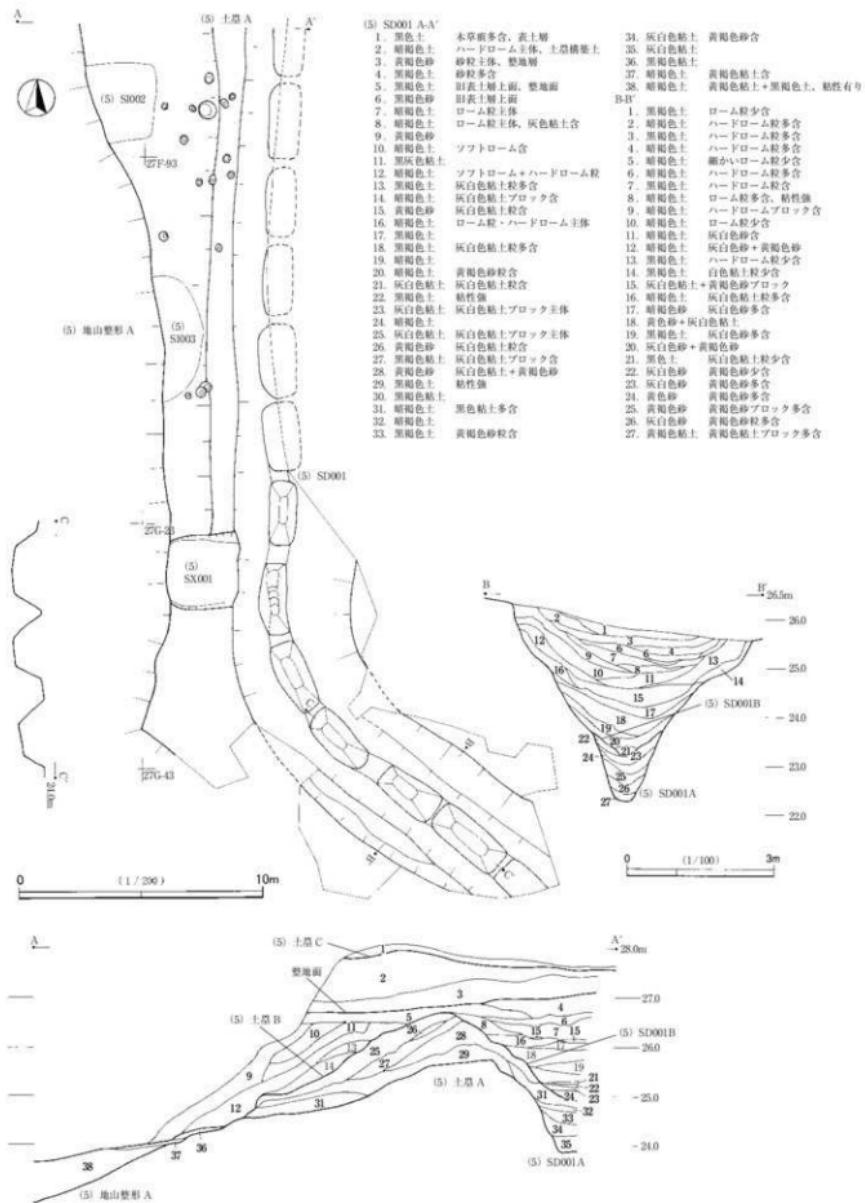
#### (5) SD001A・(5) 土塁A(第36図、図版15~18)

いずれも地山を掘り込んで構築されている。(5) SD001A(障子堀)は、北側がほぼ南北方向に向いている。北東側の内壁は調査区域外に及んでいた。南側は、元の地形に沿って27G-34グリッド付近で約50°東側に屈曲するが、27F-44グリッド付近以東は民家建設により大きく削平されている。堀幅最大5.3m、深さ4.1m、長さ40mを測る。内壁の勾配は約60°である。外壁の断面形は内側に弧状に膨らむ。堀底の標高は、北端は24.0m、南側は22.5mである。堀の中には開口部の長軸2.6m~3.0m、短軸1.2m~1.4m、底部の長軸1.4m、短軸0.4mの長方形の竪穴を連続して構築している。調査範囲内から13か所の穴を検出し、6か所を完掘した。障壁の高さは約1m、厚さ0.5m~0.8mを測る。堀は、上位はローム層、中位は灰白色粘土層、障壁が築かれたレベルから下位は黄褐色砂層・黄灰色粘土層を掘り込んで構築されていた。

堀の外側には、幅0.5m程の犬走り状の平坦面をもつ土塁A、その外側は幅0.8m~2.6mほどの緩く傾斜した帶曲輪を造成している。地山は灰白色粘土である。(5) SD001Aの外壁から土塁Aの勾配は約55°である。土塁Aと緩斜面上端の比高は約90cmを測る。北側の土塁Aの平坦部と帶曲輪には、径19cm~80cm、深さ4.5cm~37.4cmを測るピットが16基検出された。さらに外側の地山整形Aは斜面を削り落としている。堀の内側には盛土は確認できなかったが、内壁の中場の稜線から上部は地山を削り出した土塁の側面となる可能性がある。

#### (5) SD001B・(5) 土塁B(第36図、図版15~18)

障子堀(5) SD001Aを埋め、土塁A上に盛土して土塁Bを築き、さらに外側の帶曲輪から地山整形にかけても埋め戻され緩斜面が形成される。土層断面A-A'の25~35層、B-B'の22~27層が該当する。



第36図 (5) SD001 A・B、(5) 土壌A～C、(5) 地山整形 A

(5) SD001B は、障子堀 (5) SD001A の障壁上端が隠れる高さまで埋め戻し、堀底に灰白色砂・粘土、黒褐色土粘土などを貼った断面形がV字状を呈する「薬研堀」を構築していた。深さは、北側は(5)土塁Bの最上部から1.2m～1.3m、南側は堀の上端から1.6mを測る。堀幅は障子堀 (5) SD001A と同等であったと思われる。暗褐色土を主体とする土層断面 A-A' の19～24層、B-B' の17～21層は自然堆積と思われる。

(5) 土塁Bは、堀底からの高さ約1.8m、幅約3.0mを測る。(5) 土塁A上の下層に、堀底と同様の粘性の強い黒褐色土、その上に灰白色粘土を含む黄褐色砂を積み上げ、さらに外側のみに黒褐色粘土、灰白色粘土を貼っていた。

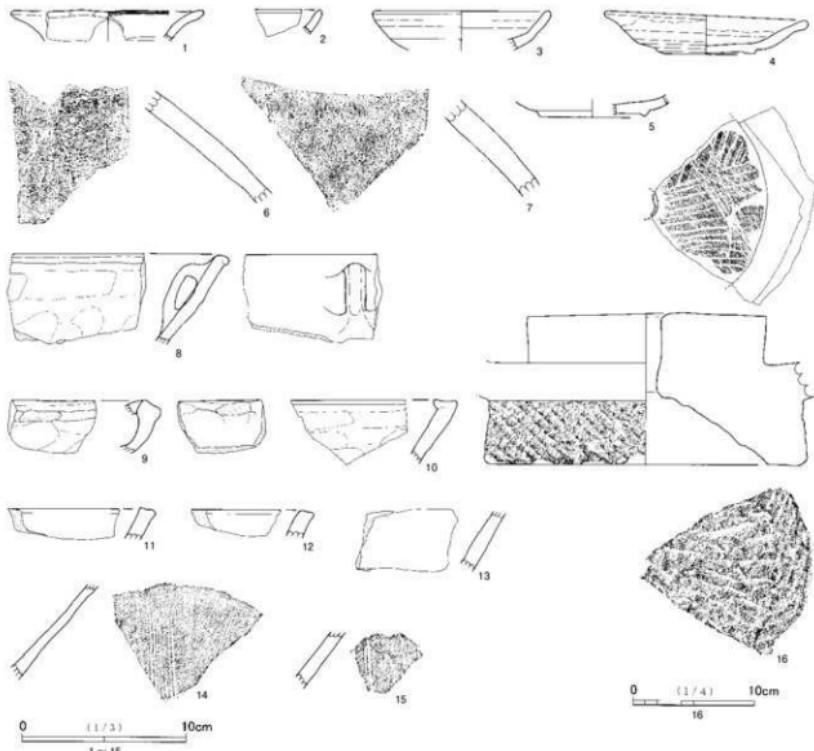
#### (5) SD001A・B 出土遺物（第37図、図版21・22）

貿易陶磁、瀬戸・美濃産陶器、常滑産陶器、土器、石臼が出土した。中世～近世前期の遺物は図示したものがすべてである。近世中・後期は、肥前産染付磁器の破片が1点出土したのみである。そのほかに繩文土器3点、土師器・須恵器が約60点出土した。すべて一括で取り上げられているため、出土位置・層位などは不明である。

1は龍泉窯系青磁稜花皿の口縁部付近の破片である。釉調は灰オリーブ色、胎土は灰白色である。内面に2条の片彫りの筋が入る。2は龍泉窯系青磁小皿の口縁部付近の破片である。釉調はオリーブ灰色、胎土は灰白色である。1・2は15世紀後半の所産である。3は古瀬戸縁釉小皿である。口径11cmを測る。口縁部内外面に灰釉が施釉される。釉調・胎土とも灰白色を呈する、4は古瀬戸腰折皿である。口径12.5cm、底径5.6cm、器高2.5cmを測る。口縁部はゆるやかに外反する。体部下方から底部にかけて回転ヘラケズリが施され、高台はケズリ出しにより成形される。口縁部外面から内面中位にかけて灰釉が施釉される。釉調はオリーブ黄、胎土は灰白色である。3・4は古瀬戸後IV期新（15世紀後半）のものである。5は志野丸皿である。高台はケズリ出しによる。底径6.4cmを測る。底部外面以外に長石釉が施される。釉調は灰白色、胎土は浅黄色を呈する。大窯第5段階（17世紀前半）のものである。6・7は常滑産陶器窯の胴部片である。外面赤褐色、胎土は黄褐色を呈する。6の外面は縱方向のナデが施される。

8～15は在地系の内耳土器（鍋）・土器擂鉢である。8・9は内耳付近の破片である。8は内耳が口縁部より下がった部分に貼り付けられる。口唇部は外側に張り出す。体部外面は指頭による押圧及びナデが施される。深い形態のものと思われる。9は口唇部が内側に張り出す。口縁部から体部は丸みをもつ。胎土中に白色粒子を含む。やや深めの形態であろう。10～12は口縁部である。10は口唇部が内側に大きく張り出るもので、口縁部はヨコナデ、外面体部は指頭による押圧及びナデが施される。胎土中に多量の雲母を含む。11・12は口唇部に沈線が巡り、擂鉢になると思われる。13は鍋の体部である。内外面ともヨコナデが施される。14・15は擂鉢の体部である。14は内面に8本1単位の擂目が施される。外面は指頭による押圧後部分的にナデが施される。胎土中に砂を多く含む。

16は砂岩製の茶臼の下臼部である。約1/4ほど破片で、高さ12.5cm、現存復元径27.4cm、摺合せ面の径は19.5cmを測る。断面をみると外側に2mmほど下がっている。溝（歛）は8分割に彫られていると思われる。1本の幅は1.0mm～1.5mm、深さは最大1mm程度であり、外側へ行くほど浅くなる。1本1本があまり直線的ではなく、間隔は3.5mm～8.5mmを測る。芯近くは欠損しており、3.5mmほど下がっている。芯木を挿した穴は上方から約3.4cmは径2.4cm、さらに1.5cm下方から下は径1.8cmと細くなる。内面は盤で彫った際の縱方向の筋がみられる。受け皿は上方が欠損する。台座は外面、底部とも盤による彫り（割り）面



第37図 (5) SD001A・B 出土遺物

が残されており、いずれも凹凸の筋がみられる。外面は約45度の角度で施されている。全体的に火熱を受けているせいか砂っぽく脆くなっている。摺合せ面の内側のふくみ部分は褐色、外周の摺合せ部分から受け皿はにぶい橙色、台座から底部は暗赤黄色を帯びている。

##### (5) 整地層 (第36図、図版15)

土層断面A-A'の4~24層、B-B'の1~15層が該当する。(5) SD001Bから(5)土壌Bの外側の緩斜面にかけて0.3m~1.7mほど盛土され、郭を南西方向へ広く拡張している。埋土はおおむね黒褐色土と灰白色粘土を交互に重ねている。最上部は黒褐色土を20cm~30cmほど貼り、水平層を造成している。この面は現況の曲輪(d)と標高がほぼ同じである。現状の西側崖面の傾斜は比較的急峻である。

##### (5) 土壌C (第36図、図版15)

北東側の台地縁辺27F-73・83・93、27G-03付近において、長さ約15m、幅2m、高さ0.5mほどの土壌の痕跡を一条確認した。また、調査区北東際の土層断面A-A'では、表土(1層)下、(5)整地層の上標高約27m~28mにハードローム粒を多量に含む暗褐色土(2層)を主体とする土壌構築層がみられた。

調査区域外の現況は、この断面から北側約5mで土塁は途切れるが、本来は幅10m、高さ3m、長さ48mの土塁（④）に続いているものと考える。

（5）SX001（第38図、図版17・18）

27G-23グリッド付近、（5）土塁Aの平坦面上に構築されていた。現況は、長軸2m、短軸1.5m、深さ50cm、底面1.5m四方の竪穴状遺構で、用途は不明であるが、障子堀沿いに敵兵が容易に移動できないように隔壁として構築されたものか、堅堀の最上部である可能性が考えられる。遺物は出土しなかった。

（5）SK001（第39図、図版18）

地山整形Aの北端付近、26F-79・89グリッドに位置する。開口部の平面形は東西方向に楕円形、底面は不整な長方形、断面形は擂鉢状を呈する。長軸方向はN-66°-Eを向いている。規模は、開口部で長軸2.4m、短軸1.54m、底面は長軸1.50m、短軸0.56m、深さ1.22mを測る。覆土は下層は地山層を起源とする灰褐色土、上層は黒褐色土が主体で、自然堆積と捉えられる。形状は（3）SK001～003に類似しており、防御のために掘られた陥穴と考えられる。遺物は出土しなかった。

遺構出土遺物（第40図、図版22）

（5）調査区内から出土した中世の遺物を図示した。北東端の7トレンチから3点出土した以外は、一括または表探で取り上げられたものである。近世は中・後期の瀬戸・美濃産陶器が1点、肥前産染付磁器が2点出土したのみである。

1は常滑産陶器片口鉢の口縁部から体部の破片である。体部外面はナデが施される。口唇部は内面、外面とも張り出す。色調は、表面は暗赤褐色で、口唇部から外面は光沢を帯びる。胎土は灰色である。10型式（15世紀後半）に比定されるものである。2・3は渥美産陶器甕である。2は頸部直下の肩部付近の破片で、上方に縱方向の刻文が4本みられる。外面は灰白色の自然釉がかかる。内面は横方向のナデが施され、灰色を呈する。胎土は黄橙色を呈し、3mm大のスコリアを含む。7トレンチから出土した。3は胴部の破片である。内面は縱方向のナデが施される。外表面は黄灰色、胎土は黄橙色を呈し、白色粒子、3mm大のスコリアを含む。4は瀬戸・美濃産陶器擂鉢である。上方に延びる口縁帯をもつ。全面に暗赤灰色の錆釉が施される。胎土は灰白色を呈する。大窯第1～2段階（16世紀前葉）に比定されるものである。5～7は在地系の土器内耳（鍋）・土器擂鉢である。5は口唇部が内側に張り出し、口縁部と体部の境が屈折する。深い形態のものである。7トレンチから出土した。6は直線的に開き、口唇部に細く浅い沈線を有する。7は口唇部に幅広の沈線が施される。8は凝灰岩製の砥石である。研面は中央部が山状に高く残っている。ほかの3面は被熱により灰色を帯びている。現存の長さ8.6cm、幅3.3cm、厚さ2.4cmを測る。7トレンチから出土した。

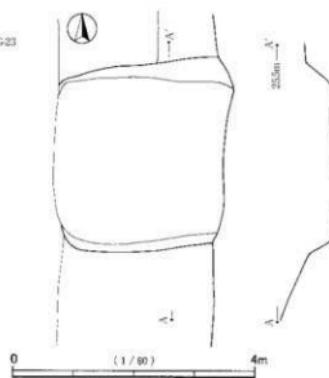
## 第2節 繩文時代

調査区内から土器・石器が少量出土した。

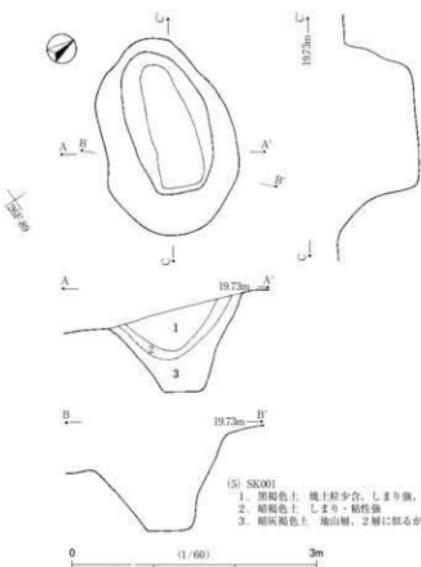
土器（第41図、図版22）

1～5は深鉢形土器の破片である。1は口縁部片である。口唇部から縱方向の撲糸文（R）が施される。色調は外表面にぶい橙色、内面は灰褐色で、胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良好である。不明瞭であるが、口唇部にも撲糸文が施されるので、井草II式と考えられる。2は口縁部片である。口唇部に刻み目が施される。表面は口唇部直下に沈線状のヨコナデが施され、全体に縱方向の条痕文が施される。内面は

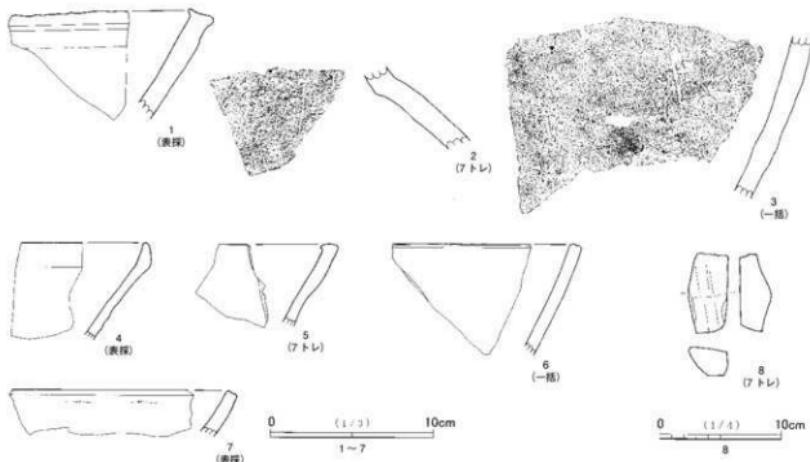
27G-23



第38図 (5) SX001



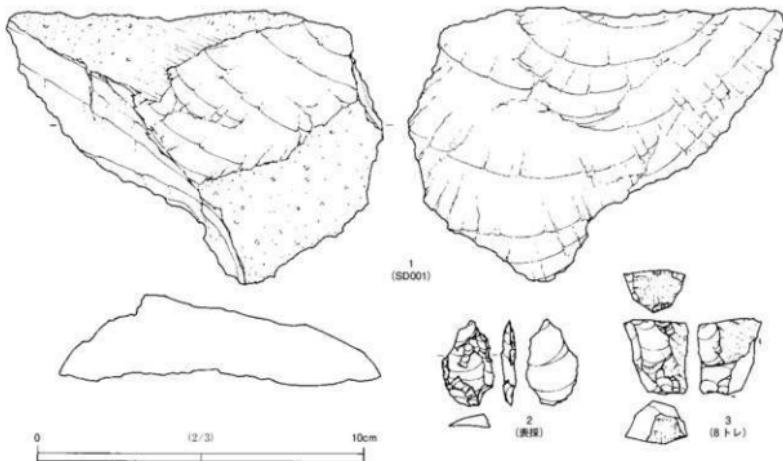
第39図 (5) SK001



第40図 (5) 調査区遺構外出土中・近世遺物



第41図 (5) 調査区出土縄文土器



第42図 (5) 調査区出土縄文時代石器

横方向の条痕文が施される。色調は外面が明赤褐色、内面はにぶい橙色で、胎土は砂粒を多く含み、繊維を含む。焼成は良好である。茅山式に属する。3は胴部片で、縱方向の撚糸文(R)が施される。色調は外面が暗褐色、内面は黒褐色で、胎土は細砂粒を多く含む。焼成は良好である。1と同型と思われる。4は口縁部片で、口唇部に面取り状のヨコナデが施される。外面は斜格子状に沈線が施され、内面に横方向のヘラナデが施される。色調は外面がにぶい橙色、内面は灰褐色で、胎土は細砂粒を少量含む。焼成は良好である。後期加曾利B式に属する。5は口縁部で、内唇する。口唇部は丸みがあり、紐線文が施される。外面に弧状の条線文が施される。色調は内外面ともに橙色で、胎土は細砂粒、スコリアを多く含む。焼成は良好である。後期安行2式の粗製時土器と考えられる。

#### 石器（第42図、図版22）

図示した石器には、円礫製加工工具、加工痕のある剥片、石核の3点がある。ほかに砂岩の円礫片が1点あるが、加工痕や使用痕は確認できなかった。

1は安山岩製の円礫製加工工具である。(5)SD001から出土した。相当大型の石器で、破片になっている。原礫面の一部にわずかに磨痕が残されているが、旧態を窺うことはできない。破片のためもともとの大きさはわからないが、最大長84.5mm、最大幅99.5mm、最大厚24.6mm、重量165.39gである。中世の石塔類の破片の可能性もある。2は白色玉髓製の加工痕のある剥片である。素材は、背面右側縁の細部加工によって打面部が斜めに切り取られている。細部加工は折り取りと急斜削離による。尾部側も連続的な剥離によ

って大きく変形される。最大長 25.5mm、最大幅 15.2mm、最大厚 4.2mm、重量 1.7g である。3 は青灰色チャート製の石核である。打面と底面はチャート岩体の褐色ジョイント面で、表裏に小型剥片を剥離した面が認められる。側面にもジョイント面が残され、剥片剥離はあまり進展していない。裏面右側の剥離面は調査時に付いたものとみられる。最大長 22.3mm、最大幅 18.7mm、最大厚 12.7mm、重量は 6.8g である。

### 第3節 古墳、奈良・平安時代

古墳、奈良・平安時代の遺構としては、古墳時代前期竪穴住居跡 2 軒および奈良・平安時代竪穴住居跡 1 軒が検出された。古屋城跡造成で整形された斜面の上段から 2 軒((5)SI002・(5)SI003)、中段に 1 軒((5)SI001) である。なお、出土遺物の計測値は第 4 表に記載している。

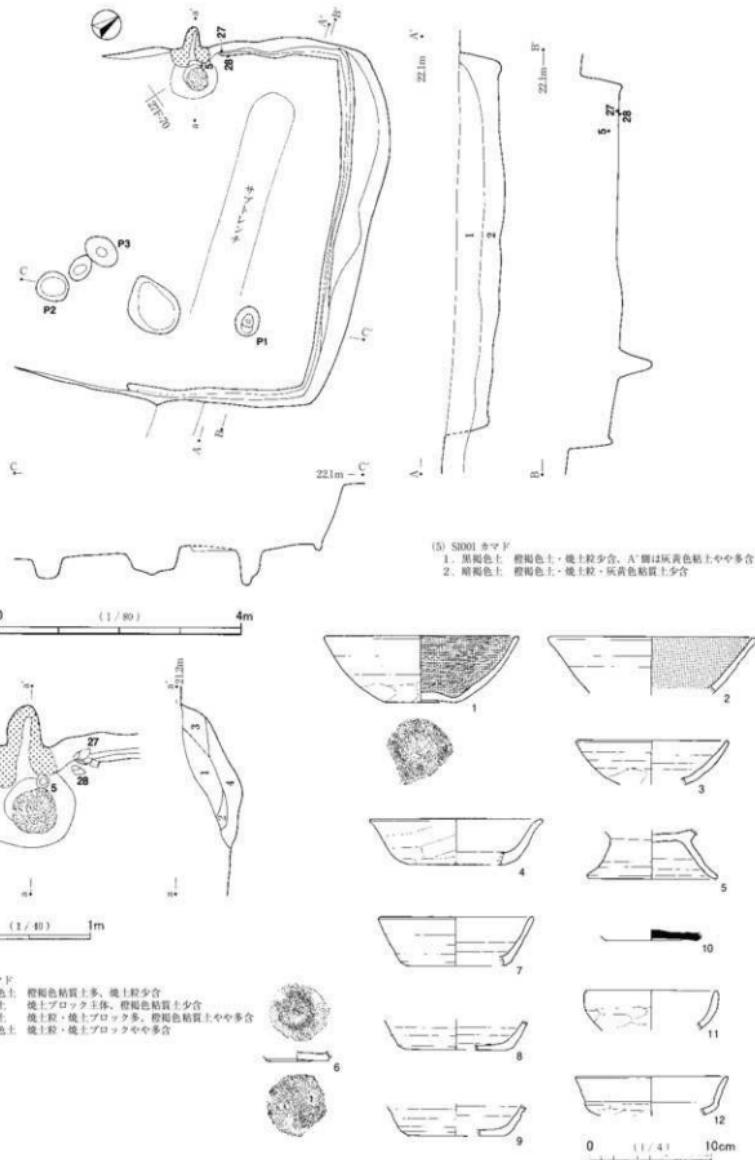
#### (5) SI001 (第 43・44 図、第 4 表、図版 19・23・24)

調査区の北部、3 段に整形された斜面の中段、北側の土壘の直下に位置する。主なグリッドは 26F-69・79、27F-60・70 である。南西側半分は段整形および緩斜面で検出されなかった。カマドは北西壁中央に位置し、主軸方位は N-51°-W である。平面形は方形で、規模は主軸長 6.10 m、推定幅 6.57 m、確認面からの深さは最大 1.08 m である。床面の明瞭な硬化面は検出されなかった。柱穴はカマド対面壁側に検出された。東隅の P1 は楕円形で 48cm × 41cm、深さ 57cm である。南隅は 3 基検出され、建て替えと考えられる。P2 は楕円形で 54cm × 50cm、深さ 36cm である。P3 は楕円形で、径は 60cm × 46cm、深さは 64cm である。他の 1 基は楕円形で、43cm × 32cm である。カマド対面壁側床面中央に、出入り口施設考えられるやや大きなビットが検出された。楕円形で 106cm × 82cm、深さ 41cm である。周溝は住居北東半部の壁下で検出されたが、南西半部では検出されなかった。下端幅は 2 cm ~ 10cm、深さは最大 10cm である。

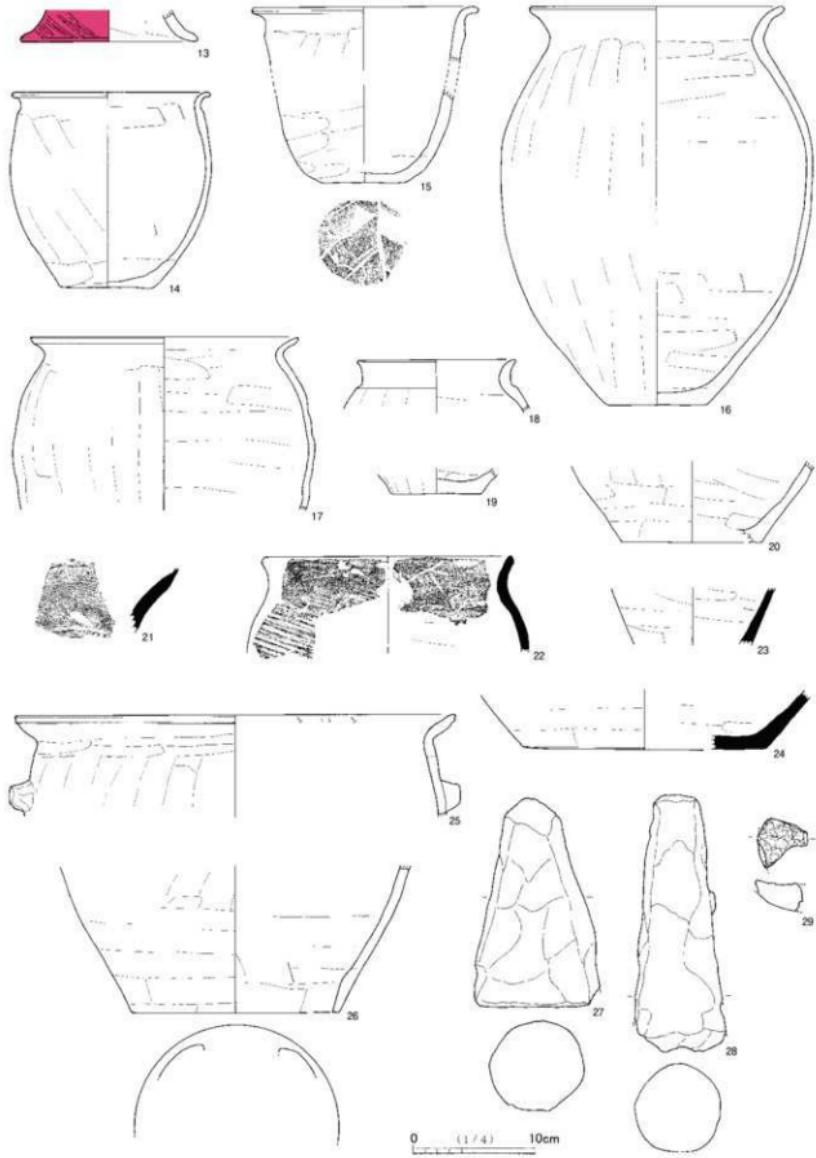
カマドは段整形のため残りは悪い。長さ 67cm、幅 76cm、奥壁の高さ 45cm である。奥壁の掘り込みは幅 30cm、奥行 33cm である。カマド袖は、焚き口部分は消失し、壁付近が残っていた。向かって左側袖長は 32cm、幅 29cm、右側袖長は 23cm、幅 36cm である。カマド下の掘り込みは楕円形で、81cm × 63cm、深さ 19cm、火床部は円形で、径 39cm、掘り込みはほとんどなかった。

出土遺物は比較的多く、カマド周辺から土製支脚が 2 点出土している。時期は、奈良・平安時代である。1 ~ 3 はロクロ成形の土師器碗である。1 はやや上げ底の底部から体部が外傾して立ち上がり、ゆるやかに内彎して口縁部に至る。口縁部はわずかに外反する。口唇部は丸い。底部は回転糸切り痕があり、周縁部に手持ちヘラケズリが施される。体部は外面下端部に手持ちヘラケズリが施される。内面は横方向のヘラミガキで、黒色処理が施される。被熱で器面が荒れている。胎土は砂粒を多く含み、スコリアを含む。2 は口縁部～体部である。体部は直線的に開き、口縁部がわずかに外反する。口唇部は丸い。内面に黒色処理が施される。被熱で器面が荒れ調整は不明瞭であるが、ミガキが施されたと思われる。胎土は細砂粒、スコリアを含む。3 は口縁部～体部である。体部はゆるやかに内彎して開き、口縁部がわずかに内彎する。口唇部は丸い。体部は、外面下端部に手持ちヘラケズリが施される。砂粒、スコリアを含む。

4 ~ 7 ~ 9 はロクロ成形の土師器杯である。4 は底部中央が欠損する。平底で、体部が外傾して立ち上がり、ゆるやかに内彎して口縁部に至る。口縁部は外反する。口唇部は丸い。被熱で器面が荒れ、調整は不明瞭であるが、底部および体部外面に手持ちヘラケズリが施され、内面にヨコナデが加えられる。胎土は砂粒およびスコリアを含む。7 ~ 9 は同型である。底部は平底で、体部が外傾して立ち上がり、直線的に口縁部に至る。口唇部は丸い。ロクロ目が顕著である。底部および体部下端部外面に回転ヘラケズリが



第43図 (5) SI001 (1)



第44図 (5) SI001 (2)

施される。胎土は細砂粒、スコリアを含む。6は土師器皿の底部片である。回転糸切り痕があり、内面にヘラ描きで「×」が施される。被熱で器面が荒れている。胎土は細砂粒、スコリアを含む。

5は土師器高台付坏の底部である。足高高台で、高台は「八」字状に大きく広がり、裾部は外反する。高台内外面にヨコナデが施される。胎土は砂粒、スコリアを多く含む。被熱で器面が荒れている。10は須恵器坏の底部である。回転ヘラケズリが施される。胎土は細砂粒、スコリアを含み、長石粒が顯著である。新治窯産と考えられる。11・12は非クロクロ成形の土師器坏である。11は口縁部～体部である。椀状で丸みがあり、口縁部はほぼ直立する。口唇部は丸い。外面は口縁部にヨコナデ、体部にヘラケズリが施される。被熱で器面が荒れ、内面の調整は不明瞭である。胎土は細砂粒を多く含み、スコリアを含む。12は口縁部～体部である。丸底と考えられ、器受け部から口縁部が外傾して立ち上がり、口唇部が外反する。調整は外面は体部がヘラケズリ、口縁部はヨコナデが施される。胎土は細砂粒を少量含み、スコリアを含む。古墳時代後期の須恵器模倣坏である。13は土師器高坏の脚部である。裾部が外反し、端部は丸い。外面にヘラミガキと赤彩が施され、内面にヘラナデが施される。胎土は細砂粒が少量、スコリアが微量含まれる。古墳時代後期である。

14～20は土師器甕である。口縁部および胴部の調整から2時期に区分されると考えられる。17とその他である。14・15・18は胴部と口縁部との境に稜を持つ。20は14・15と同様の調整が施される。16は胴部と口縁部との境に明瞭な稜はないが、強いヨコナデが施されている。19は16と同型と思われる。14はやや小型である。平底で、胴部はやや縱長の球形である。胴部と口縁部との境に稜を持ち、口縁部が短く外反し、口唇部はほぼ水平で丸い。被熱で器面が荒れ、剥離がみられる。調整は、外面底部がヘラケズリ、胴部は縱方向のヘラケズリで、下端部に横方向のヘラケズリが施される。口縁部はヨコナデが施される。内面は口縁部がヨコナデ、胴部はヘラナデが施される。胎土は砂粒、スコリアを含む。15はやや小型で、胴部の丸みはなく、深鉢状である。底部は平底で、本葉痕が残る。胴部は外傾してゆるやかに立ち上がり、直線的に口縁部に至る。胴部と口縁部との境に稜を持ち、口縁部が短く外反し、口唇部はほぼ水平で丸い。被熱により全体にもろくなっている。調整は、胴部外面の上半部が縱方向のヘラケズリで、下半部は横方向のヘラケズリが施される。口縁部はヨコナデが施される。内面は全体にヘラナデが施される。胎土は砂粒を微量含み、スコリアを多く含む。18は口縁部～胴部上部である。胴部と口縁部との境に稜を持ち、口縁部が垂直に立ち上がる。口唇部が外反して、やや尖り気味である。調整は、胴部外面が縱方向のヘラケズリ、口縁部はヨコナデが施される。内面は全体にヘラナデが施される。胎土は細砂粒を多く含み、スコリアを含む。20は胴部下半部～底部である。底部中央部を欠損する。平底で、胴部はやや縱長の球形と思われる。調整は、底部外面がヘラケズリ、胴部は横方向のヘラケズリが施される。内面はヨコナデが施される。胎土は細砂粒・スコリアを含む。16は平底で、胴部が外傾して立ち上がる。胴部は縱長で丸みがあり、中位で最大径を測る。口縁部は外反し、口唇部は丸い。被熱で器面が荒れている。調整は、底部がヘラケズリ、胴部外面が縱方向のヘラケズリが全体に、内面は横方向のヘラナデが施される。口縁部は内外面にヨコナデが施される。胎土は砂粒を多く含み、スコリアを含む。19は胴部下端～底部である。平底で、ヘラケズリが施される。内面はヘラナデが施され、中央部が盛り上がったように厚くなる。胴部外面に縱方向のヘラケズリ、内面は横方向のヘラナデが施される。胎土は砂粒、スコリアを含む。17は口縁部～胴部で、やや縱長の球形を呈し、口縁部が短く外反する。口唇部はつまみ出されたようなヨコナデで、わずかに受け口状である。被熱で器面が荒れている。調整は、胴部外面が縱方向のヘラケズリ、内

面は横方向のヘラナデが施される。口縁部は、内外面にヨコナデが施される。胎土は砂粒、スコリアを含む。時期は、14～16・18～20は古墳時代後期、17は奈良時代以降である。

21～24は須恵器甕である。被熱で器面が荒れている。21は口縁部片である。外反する口縁部から口唇部がつまみ上げられ、薄く、受け口状である。胎土は砂粒、スコリアを含み、長石粒が顕著である。22は丸みがある胴部から口縁部が外反し、口唇部は面取り状のヨコナデで、断面が三角形状である。調整は、胴部外面に横位のタタキ、内面に横方向のヘラナデが施される。口縁部は内外面にヨコナデが施される。口縁部内側にヘラ書きで、「太」が施される。胎土は細砂粒、スコリアを含む。23は胴部下部である。外傾して直線的に開く。調整は、外面に横方向のヘラケズリ、内面に横方向のヘラナデが施される。胎土は細砂粒、スコリアを含む。24は胴部下部～底部である。底部中央部を欠損する。底部は平底で、胴部は外傾して直線的に立ち上がる。調整は、外面に横方向のヘラケズリ、内面に横方向のヘラナデが施される。胎土は細砂粒、スコリアを含む。

25・26は土師器瓶である。被熱で器面が荒れている。25は口縁部～胴部上部である。胴部はやや丸みがあり、ややくびれて口縁部が外反する。口唇部は面取り状にヨコナデが施され、口唇部がごくわずかであるが、外反する。把手が貼り付けられ、面取り状のナデが施される。調整は、口縁部外面にヨコナデ、内面に横方向のヘラナデが施される。胴部は外面に縱方向のヘラケズリ、内面に横方向のヘラナデが施される。胎土は砂粒、スコリアを多く含む。26は胴部下部～底部である。胴部は外傾して直線的に開き、ゆるやかに内彎する。底部は平底で、焼成前に穿孔される。孔はその形状から、端部に梢円形が4か所、中央に円形が1か所の合計5か所穿たれたものと考えられる。調整は、底部にヘラケズリ、胴部外面は、上部に縱方向、下部に横方向のヘラケズリが施される。内面は穿孔部に横方向のヘラケズリ、ほかは横方向のヘラナデが施される。胎土は砂粒、スコリアを多く含む。接合はしないが、25・26は同一個体と考えられる。時期は奈良時代以降と考えられる。

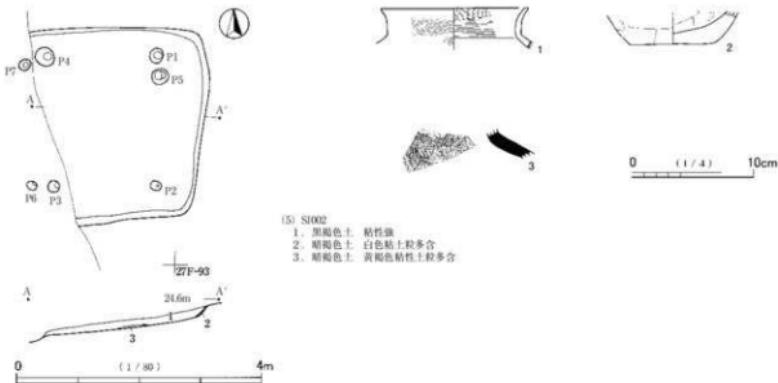
27・28は土製支脚である。被熱でもろくなっている。27は円錐形で先端は丸い。胎土は砂質で、細砂粒が多い。28は円筒形に近い先端が平坦な円錐形である。両者はカマド外のほぼ同じ位置から出土している。カマド内に常設されていないので、使用する土器で使い分けられていた可能性を考えられる。

29は楕形鉄滓片である。現存最大厚2.3cm、推定される直径約8cmである。

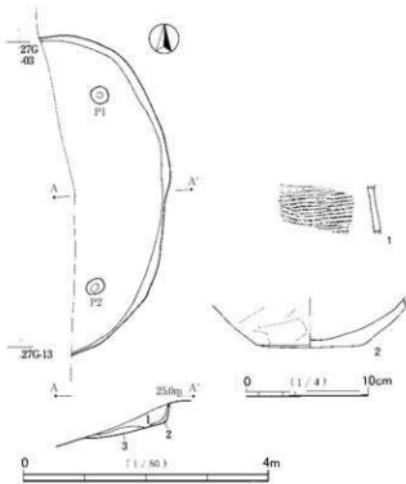
堅穴住居跡の時期については、出土土器が古墳時代後期と奈良・平安時代と幅があるが、時期を決める根据として、カマドから出土している土器5の時期を最有力とする。5が該当する時期は9世紀前半であり、同時期の土器1・2・17・25・26が出土しているので、出土遺物の中で最も新しい時期の9世紀前半（平安時代）を堅穴住居跡の時期としたい。

##### (5) SI002 (第45図、第4表、図版19・24)

調査区の北東部、3段に整形された斜面の上段に位置する。主なグリッドは、27F-82・83である。西側1/3は段整形および緩斜面で検出されなかった。炉跡および周溝は検出されなかった。主軸方位はN-2°-Eである。平面形は隅丸方形で、規模は主軸長3.24m、推定幅3.52m、確認面からの深さは最大0.2mである。床面の明瞭な硬化面は検出されなかった。柱穴は4基検出された。P1は梢円形で径26cm×23cm、深さ46cm、P2は梢円形で、径19cm×16cm、深さ27cm、P3は円形で径20cm、深さ31cm、P4は円形で径32cm、深さ27cmである。柱穴P2以外は、建て替えと考えられる柱穴が付随している。P5はP1の南に隣接し、梢円形で29cm×26cm、深さ36cm、P6はP3の西に隣接し、円形で径16cm、深さ24cm、P7はP4



第45図 (5) SI002



第46図 (5) SI003

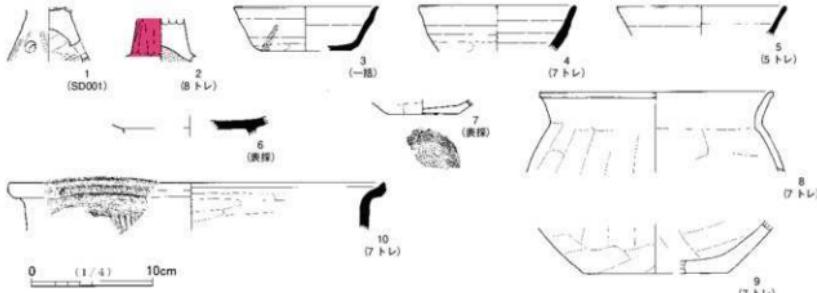
### (5) SI003 (第46図、第4表、図版19・24)

調査区の東部、3段に整形された斜面の上段に位置する。主なグリッドは、27G-03である。西側2/3は段整形および緩斜面で検出されなかった。カマドおよび周溝は検出されなかった。主軸方位はN 2° E

の西に隣接し、円形で径20cm、深さ17cmである。  
ほかにピット等は検出されなかった。

出土遺物は少量である。時期は古墳時代前期と  
考えられる。

1は土師器壺の口縁部～胴部上端部である。胴部は球形と思われる。口縁部はほぼ直立し、口唇部が外反して、口唇は尖り気味である。調整は、胴部外面にハケ、口縁部にハケの後ヨコナデが施される。内面は、口縁部に横位のハケ、胴部にナデが施される。胎土は細砂粒、スコリアを含む。2は土師器壺の胴部下部～底部である。平底で、胴部が外傾して立ち上がり、ゆるやかに内傾する。調整は底部外面にヘラケズリ、胴部は縱方向のヘラケズリが施される。内面はヘラナデが施される。胎土は砂粒、スコリアを含む。3は須恵器壺の胴部上端部である。混入と考えられる。内面に口縁部との接合痕が観察される。外面に縦位のタタキが施される。内面はナデが施され、当て具痕は不明である。胎土は砂粒が少なく緻密で、黒色粒を含む。



第47図 (5) 調査区遺構出土古墳、奈良・平安時代土器

である。平面形は楕円形と考えられ、規模は主軸長5.20m、推定幅4.32m、確認面からの深さは最大0.4mである。床面の明瞭な硬化面は検出されなかった。柱穴は2基検出された。P1は北東隅に位置し、楕円形で、径30cm×26cm、深さ18cm、P2は南東隅に位置し、楕円形で径30cm×23cm、深さ14cmである。

出土遺物は少量である。時期は古墳時代前期と考えられる。1は土師器壺の胴部片である。外面に粗いハケ、内面にヘラナデが施される。胎土は砂粒を含む。2は土師器壺の胴部下部～底部である。被熱で器面が荒れている。平底で、胴部はほぼ球形と思われる。外面底部にヘラケズリ、胴部に横方向のヘラケズリが施される。内面はナデが施されるが、器面が荒れているため不明瞭である。胎土は細砂粒、スコリアを含む。

#### 遺構出土土器（第47図、第4表、図版23）

1・2は古墳時代の土師器高杯の脚部である。1は円錐形状で、円形の透かしが3か所施される。外面にはハケ後にヘラミガキが施し、内面はハケの後ナデが施される。胎土は砂粒、スコリアを含む。古墳時代前期である。2はやや円筒形に近く、裾部が外反する。外面に縱方向のヘラケズリの後ヘラナデ、内面にはヘラナデが施される。外面全体に赤彩が施される。内面は黒色処理の可能性がある。胎土は細砂粒、スコリアを含む。古墳時代後期である。

3～5は須恵器壺である。3は底部中央部を欠損する。平底で、体部が外傾して立ち上がり、直線的に口縁部に至る。口縁部はわずかに外反し、口唇部は丸い。調整は、底部外面および体部下端部に手持ちヘラケズリ、内面にヨコナデが施される。胎土は砂粒およびスコリアを含む。体部内外面に火ダスキが観察される。胎土は細砂粒、スコリアを含む。4は口縁部～体部である。ゆるやかに内彎する体部から口縁部がわずかに外反する。口唇部はやや尖り気味である。外面体部下部に手持ちヘラケズリが施される。胎土は細砂粒、スコリアを含む。5は口縁部～体部である。直線的な体部から口縁部がわずかに外反する。口唇部は丸い。6は須恵器高台付壺である。体部下端部～底部で、底部中央部および高台端部を欠損する。高台は「ハ」字状で、断面は四角と思われる。底部外面に回転ヘラケズリ、高台および体部下端部に回転ヨコナデが施される。胎土は細砂粒を多く含み、スコリアを含む。長石粒が顯著である。常陸産と思われる。7は土師器壺の体部下端部～底部である。底部はわずかに上げ底で、体部が外傾して立ち上がる。外面は、底部回転糸切りの後、周辺部および体部下端部に手持ちヘラケズリが施される。内面はヨコナデが施される。胎土は細砂粒を含む。

8は土師器壺の口縁部～胴部上端部である。胴部はやや縱長の球形と思われる。口縁部が外傾して立ち上がり、口唇部は外反して、面取り状のヨコナデが施され、つまみ出されるようにわずかに突起する。調整は、外面胴部に縱方向のヘラケズリ、口縁部にヨコナデが施される。内面は、口縁部にヨコナデ、胴部に横方向のヘラナデが施される。胎土は細砂粒、スコリアを含む。9は土師器壺の胴部下部～底部である。底部中央部を欠損する。被熱で器面が荒れている。平底で、胴部はほぼ球形と思われる。調整は、外面底部にヘラケズリ、胴部に横方向のヘラケズリが施される。内面はヘラナデが施される。

10は須恵器壺である。筒状で直線的な胴部から口縁部が短く外反する。口唇部は折り返されて、面取りのヨコナデが施され、受け口状である。胴部外面に縱位のタタキ、内面はヘラナデが施される。口縁部はヨコナデが施される。胎土は細砂粒、スコリアを含む。底部がないので不明確であるが、口縁部の形状から瓶の可能性がある。

3～10の時期は奈良時代である。

第4表 (5) 調査区出土古墳・奈良・平安時代土器観察表 ( ) は推定値 [ ] は現存値 色調は上段内面・下段外面

遺構 番号	辨図番号	器種	器形	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	遺存度	色調	胎土	混入物	焼成	調整外面	調整内面	底端切 り端差し	底外調整	備考
(5)SH001	第43回	1	土師器	椀	(16.0)	(6.0)	5.4	35%	黒 黒褐	審	少 良好	ヨコナデ・体 部下端手持 ちヘラケズリ	ミガキ、黒色 処理			
(5)SH001	第43回	2	土師器	椀	(17.0)	—	[47]	20% 口縁 部～体部 にぶい黒	黒 黒	審	少 良好	ヨコナデ・体 部下端手持 ちヘラケズリ	ミガキ、黒色 処理			
(5)SH001	第43回	3	土師器	椀	(12.6)	—	[36]	30% 口縁 部～体部 にぶい黒	黒 黒	審	少 良好	ヨコナデ・体 部下端手持 ちヘラケズリ	ヨコナデ			
(5)SH001	第43回	4	土師器	环	(14.0)	(8.0)	[38]	15% にぶい黒	黒 黒	少	良好	ヨコナデ・手持 ちヘラケズリ	ヨコナデ	不明	手持ちヘラ ケズリ	
(5)SH001	第43回	5	土師器	高台 台环	—	10.7	[41]	35% 底部 にぶい黒	黒 黒	少	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	不明	手持ちヘラ ケズリ	足高台
(5)SH001	第43回	6	土師器	皿	—	(5.2)	[0.8]	15% 底部 にぶい黒	黒 黒	少	良好			回転系 切り		内面ヘラ ケズリ[x]
(5)SH001	第43回	7	土師器	环	(12.6)	(8.1)	[40]	15% 黑 黑	黒 黒	少	良好	ヨコナデ・体 部下端回転ヘ ラケズリ	ヨコナデ			
(5)SH001	第43回	8	土師器	环	—	(8.0)	[25]	15% 体部 ～底部 にぶい黒	黒 黒	少	良好	ヨコナデ・下 端回転ヘラケ ズリ	ヨコナデ	不明	回転ヘラケ ズリ	
(5)SH001	第43回	9	土師器	环	—	(8.0)	[27]	15% 体部 ～底部 にぶい黒	黒 黒	少	良好	ヨコナデ・下 端回転ヘラケ ズリ	ヨコナデ	不明	回転ヘラケ ズリ	
(5)SH001	第43回	10	須恵器	环	—	7.6	[0.8]	30% 底部 にぶい黒	灰 灰	少	良好	回転ヘラケズ リ	ヨコナデ	回転ヘ ラケズリ	回転ヘラケ ズリ	
(5)SH001	第43回	11	土師器	环	(11.0)	—	[33]	15% 口縁 部～体部 にぶい黒	橙 橙	多	良好	口縁部ヨコナ デ、体部ヘラ ケズリ	口縁部ヨコナ デ、体部ヘラ ケズリ			
(5)SH001	第43回	12	土師器	环	(12.6)	—	[32]	10% 口縁 部～体部 にぶい黒	黒 黒	少	良好	ヨコナデ・体 部ヘラケズリ	ヨコナデ			
(5)SH001	第44回	13	土師器	高环	—	[146]	[26]	10% 脚部 にぶい黒	黒 黒	少	良好	ヨコナデ・手持 ちヘラケズリ	ヨコナデ			
(5)SH001	第44回	14	土師器	甕	(16.0)	7.6	16.0	65% 明 黒褐	黒 黒褐	少	良好	ヘラケズリ・ミ ガキ、赤彩	ヘラナデ・ヨ コナデ			ヘラケズリ
(5)SH001	第44回	15	土師器	甕	(18.0)	7.0	(14.4)	40% 黑褐 黒褐	黒 黒褐	少	良好	ヨコナデコナ デ、脚部ヘラ ケズリ	ヨコナデコナ デ、脚部ヘラ ケズリ			本茎甕
(5)SH001	第44回	16	土師器	甕	21.0	(8.0)	32.7	65% にぶい 黒	黒 黒	少	良好	ヨコナデコナ デ、脚部ヘラ ケズリ	ヨコナデ		ヘラケズリ	
(5)SH001	第44回	17	土師器	甕	(22.0)	—	[141]	22% 口縁 部～胴部上 半部 にぶい黒	黒 黒	少	良好	ヨコナデコナ デ、脚部ヘラ ケズリ	ヨコナデコナ デ、脚部ヘラ ケズリ			

遺構 番号	探査番号	器種	器形	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	重宝度	色調	胎土	混入物	焼成	調整外側	調整内面	底面切 り差し	底外調整	備考
(5)SI001	第44回	18 土師器	甕	(13.0)	—	[44]	10% 口縁部～胴部上端部	にぶい黄褐色	密	少	良好	口縁部コナデ、胴部ヘラケズリ・ハラナデ	口縁部コナデ、胴部ヘラケズリ・ハラナデ			
(5)SI001	第44回	19 土師器	甕	—	7.4	[22]	10% 胴部下端部～底部	にぶい黄褐色	密	少	良好	ヘラケズリ	ヘラナデ	ヘラケズリ・ ヘラナデ		
(5)SI001	第44回	20 土師器	甕	—	[11.5]	[66]	10% 胴部下端部～底部	にぶい黄褐色	密	少	良好	ヘラケズリ	ヘラナデ	ヘラケズリ		
(5)SI001	第44回	21 領惠器	甕	—	—	—	口縁部片	灰黃	密	少	良好	ヨコナデ・横滑状紋	ヨコナデ			
(5)SI001	第44回	22 領惠器	甕	(20.3)	—	[7.9]	10% 口縁部～胴部上半部	明赤褐色	密	少	良好	口縁部コナデ、胴部タキ	口縁部コナデ、胴部ヘラナデ			内面口縁部へ凹凸「太」
(5)SI001	第44回	23 領惠器	甕	—	—	[47]	10% 胴部下部	にぶい黄褐色	密	少	良好	ヘラケズリ	ヘラナデ			
(5)SI001	第44回	24 領惠器	甕	—	[20.0]	[47]	15% 胴部下端部～底部	にぶい黄褐色	密	少	良好	ヘラケズリ	ヘラナデ	ヘラケズリ		
(5)SI001	第44回	25 土師器	瓶	(36.0)	—	[8.4]	10% 口縁部～胴部上端部	にぶい黒褐色	密	少	良好	口縁部コナデ、胴部上端部ヘラケズリ・ラヂ	口縁部コナデ、胴部ヘラナデ			貼付把手、26と同一個体
(5)SI001	第44回	26 土師器	瓶	—	[17.0]	[120]	15% 胴部下端部～底部	にぶい黒褐色	密	少	良好	ヘラケズリ	ヘラナデ	ヘラケズリ		5孔、25と同一個体
(5)SI001	第44回	27 土製	支脚	最大長 幅17.0 厚さ7.3	—	—	90% 口縁部～胴部上端部	にぶい赤褐色	粗	砂質	良好	ナデ	—			
(5)SI001	第44回	28 土製	支脚	最大長 幅21.0 厚さ7.3	—	—	95% 口縁部～胴部上端部	にぶい赤褐色	粗	砂質	良好	ナデ	—			
(5)SI002	第45回	1 土師器	甕	(12.0)	—	[34]	10% 口縁部～胴部上端部	橙	密	少	良好	ハケの後ヨコナデ	ハケの後ヨコナデ			
(5)SI002	第45回	2 土師器	甕	—	(7.0)	[27]	10% 胴部下端部～底部	黒褐色	密	少	良好	ヘラケズリ	ヘラナデ	ヘラケズリ		
(5)SI002	第45回	3 領惠器	甕	—	—	—	胴部片	灰白色	密	少	良好	ヨコナデ・タタキ	ナデ			
(5)SI003	第46回	1 土師器	甕	—	—	—	胴部片	にぶい黒褐色	密	少	良好	ハケ	ナデ			
(5)SI003	第46回	2 土師器	甕	—	(9.0)	[41]	10% 胴部下端部～底部	赤褐色	密	少	良好	ヘラケズリ・ナデ	ミガキ、ナデ	ヘラケズリ		
(5)調査区	第47回	1 土師器	高杯	—	—	[4.2]	20% 腹部	にぶい黄褐色	密	少	良好	ハケの後ヘラナデ	ハケ・ヘラナデ			透し孔3 分布(5) SD001
(5)調査区	第47回	2 土師器	高杯	—	—	[35]	20% 腹部	黒褐色	密	少	良好	ヘラケズリの後ヘラナデ・毛形	ヘラナデ		8T	
(5)調査区	第47回	3 領惠器	杯	(11.8)	(7.4)	3.6	25%	にぶい黄褐色	密	少	良好	ヨコナデ・全体下端部持ち手ラケズリ・火ダスキー	ヨコナデ・火ダスキー	不明	手持ちヘラケズリ	一括
(5)調査区	第47回	4 領惠器	杯	(13.0)	—	[38]	15% 口縁部～全体	灰黃 灰	密	少	良好	ヨコナデ・全体下端部持ち手ラケズリ	ヨコナデ			7T
(5)調査区	第47回	5 領惠器	杯	(14.0)	—	[25]	10% 口縁部～全体	灰黃 灰	密	少	良好	ヨコナデ	ヨコナデ			5T
(5)調査区	第47回	6 領惠器	高台付杯	—	—	[17]	15% 体部下端部～底部	灰 灰	密	少	良好	回転ヘラケズリの後ナデ	ヨコナデ	回転ヘラケズリ	表採	
(5)調査区	第47回	7 土師器	杯	—	(6.0)	[12]	20% 体部下端部～底部	にぶい黄褐色	密	少	良好	手持ちヘラケズリ	ヨコナデ	回転糸 切	縫隙部手持 ちヘラケズリ	表採
(5)調査区	第47回	8 土師器	甕	(19.2)	5.6	[65]	15% 口縁部～胴部上端部	明褐色	密	少	良好	口縁部コナデ、胴部ヘラケズリ	口縁部コナデ、胴部ヘラナデ			7T
(5)調査区	第47回	9 土師器	甕	—	[12.0]	[40]	15% 胴部下端部～底部	明小輪	密	少	良好	ヘラケズリ・スズ付着	ヘラナデ・スズ付着	ヘラケズリ		7T
(5)調査区	第47回	10 領惠器	甕	(30.0)	—	[39]	10% 口縁部～胴部上端部	褐 灰褐色	密	少	良好	口縁部コナデ、胴部タクタキ	口縁部コナデ、胴部ヘラナデ			7T

## 第7章 まとめ

古屋城跡は、台地上部の主要部が現状保存され、公園として整備される予定であり、発掘調査は、斜面部の一部などにおいて実施した。その結果、地山整形による腰曲輪、調査前に予想していなかった障子堀が見つかるなど、成果を上げることができた。また、古墳時代前期・奈良・平安時代の堅穴住居跡、縄文時代の遺物なども検出され、古屋城構築前の土地利用を窺知することができた。

ここでは、今回検出した城郭遺構・出土陶磁器類について若干の考察を行い、まとめとしたい。  
城郭遺構

(2)～(4) 調査区においては、調査前に認証できた切岸、腰曲輪などを検出した。(3)～(5) 調査区において検出した腰曲輪(h)・(i)・(j)は、谷側に突き出した尾根状の地形を整形して構築されたものである。北端の腰曲輪(g)・(k)も同様である可能性が高い。斜面の移動を阻止し、上部の平場からの攻撃を意図したものであろう。腰曲輪(h)・(i)では段状に複数の面が検出された。いずれも南側には上下2段の平場が造られている。南西方向からの防禦を強化したものであろう。腰曲輪(h)からは、平場の縁辺において柵列が検出された。同様に(g)・(i)～(n)の腰曲輪にも柵が巡っていたと考えられる。

ほかに検出された防禦施設としては、陥穴が挙げられる。開口部は隅丸長方形を基調とし、長軸長2.4m～2.7m、深さ1.0m～2.7mを測る。短軸方向の断面形は漏斗状である。(3) SK001～SK003は、腰曲輪(i)と(j)の中間に位置し、短軸方向に軸を揃えて斜面方向に直線的に配置される。(5) 調査区においては、腰曲輪(h)の南西側の崖面下から検出されている。これらは、(5) SD001Aの障子堀の堅穴に形状・規模が類似している。

南西側の(5) 調査区においては、3期にわたる城郭遺構が重複して検出された。造成状況は以下のように推移していくと考えられる。1期は、障子堀(5) SD001A・(5) 土壘Aを防禦施設として構築していた。障子堀の内側にも土壘が巡っていたと思われる。(5) 地山整形A・Bもこの時期に施工されたものであり、腰曲輪(h)をはじめとする下段部の施設は、1期に形成されたものと思われる。2期は、障子堀を埋め、断面薬研状の空堀(5) SD001B、(5) 土壘Aを盛土して(5) 土壘Bを構築し、外側の地山整形Aによる崖面も埋め戻していた。3期は、土壘・空堀を完全に埋め、さらに標高約27mまで盛土・整地して曲輪(d)、その上に現在目にすることができる土壘(④)を構築している。水田面との比高を15mと大きくし、斜面を容易に登れない構造に改修している。

各時期の歴年代は、1期・2期が、(5) SD001A・B 出土陶磁器のほとんどが15世紀後半の所産であることから、その時期以降に形成されたと考えられる。3期は現況にみられる中段部以上に設けられた土壘・堀等の施設であり、地形に即した曲線的な構造ながら、二重土壘や折り重み等を有することから、16世紀前葉まで下がる可能性が指摘されており、2期に連続する16世紀前葉以降としておく。

古屋城跡の東側に隣接し、番城的な機能をもつ城と考えられている北ノ作遺跡は、北側・東側に位置する主要部(I郭)は3時期の変遷を考えられている。15世紀第3四半期を中心とする時期は、地下式坑群と重複して築かれる台地整形区画からなる墓域である。15世紀第3四半期以降は、小規模な土坑や掘立柱建物群が位置する2時期にわたる台地整形区画及び大規模な井戸遺構などで構成される。16世紀第1四半期を中心とする時期は、掘立柱建物が密集し、西側に障子堀・箱堀を掘削し、単郭から複郭構造の

戦国期城郭に変化したと考えられている。

古屋城跡・北ノ作遺跡において注目される遺構として、後北条氏系城郭において多くみられる障子堀が挙げられる。形態はいずれも堀底内に障壁が一列に連続し、堅穴は長方形を基調とするもので規模もほぼ同じである。井上哲朗氏による分類のB-Ⅲ-2類に該当し、15世紀末以降16世紀代に出現したと推測されている。方形堅穴列の障子堀B-Ⅲ類は当時全国で30例見つかっており、そのうち千葉県内は本例を含め10例を占め、在地で発展した可能性も指摘されている<sup>1)</sup>。遺物はいずれも埋没する過程で混入したものであるが、①北ノ作遺跡では少量ながら16世紀後半の遺物や鉄砲玉も含み、障子堀出土遺物は16世紀代の瀬戸美濃播磨、古屋城跡は15世紀後半の遺物群と年代はズレがあること、②障子堀の形態は、北ノ作遺跡のものが規格的方形区画をつけたもので、後北条氏系城郭に、古屋城跡のそれは下総地域によく見られるものであること、③城全体の構造では北ノ作遺跡の斜面に直線的な横堀が造成されていること、④房総のみならず全国的にも、16世紀代に谷津の奥から沖積地を見下ろす場所に城の占地を移す傾向があること等の違いがある。したがって、古屋城は北ノ作遺跡より先に機能を失ったものと考えられる。

#### 出土陶磁器類

各調査区から出土した中世～近世初頭の陶磁器は、龍泉窯系中国青磁碗・皿3点、瀬戸・美濃産陶器皿類4点・擂鉢1点、常滑産陶器鉢類2点・甕4点、渥美産陶器甕2点、在地産土器13点で、最も多く遺物が出土した(5)調査区では、100mあたり2.1点である。生産年代は15世紀後半のものが主体で、16世紀前葉、17世紀前葉の遺物も少量出土している。北ノ作遺跡においても同様の傾向を示しているが、16世紀後半のものも若干含む。全国的にも、多くの城館跡において15世紀後半から16世紀前葉の陶磁器の出土量が他期を圧倒しているが、16世紀後半の瀬戸・美濃製品の畿内圈への大量供給による全国的流通量の減少<sup>2)</sup>や、本城～支城体制等の城の取扱選択や常駐しない城への変化などが要因で、生活の食器類の量がそのまま城館跡の存続期間を示すものではないと考えられている<sup>3)</sup>。

組成の様相については、在地産土器内耳鍋・擂鉢の割合が高く、常滑・渥美産甕、瀬戸・美濃産皿類、青磁碗・皿類が続いている。北ノ作遺跡では、古屋城跡の調査区から全く出土していないカワラケの出土量が約半数を占める点が大きく異なるが、それ以外の割合は同様な傾向を示している。カワラケは居住者のハレの席での使用が考えられており、古屋城跡の今回の調査区は城郭の周辺部が主体で、過去の主郭部における調査では出土していることから、堀立柱建物跡等の居住施設が検出されていないことによるものであろう。

遺物量が減少する16世紀後半は、当地域の歴史的背景から推考すれば、千葉氏一門の「物井殿」がいたと推測されるが、天正18(1590)年の小田原城落城までの期間は、古屋城及び北ノ作遺跡の砦は常駐せずに戦時にのみ使用する形となり、物井氏は千葉氏本城本倉城下に常駐していた可能性も考えられる。

なお、平成27年度調査終了後の城址公園整備に伴う伐採等で、調査中は雑草が繁茂していたため見にくかった城郭遺構が明瞭となったため、写真図版の最後(図版25)に古屋城址公園整備中の平成28年5月段階の写真を掲載した。次ページの現況撮影方向図(第48図)と併せて参照いただきたい。

#### 注

- 1 井上哲朗 2000 「障子堀の分類と編年」『研究紀要20 中近世城館の構造と特質－重要遺跡確認調査の成果と課題』(財)千葉県文化財センター

- 2 井上哲朗 2005「南関東における城館出土陶磁器」「城郭と中世の東国」高志書院  
3 井上哲朗 2011「房総における城館跡出土の貿易陶磁－国産陶器との共伴関係を中心に－」『貿易陶磁研究』31号  
日本貿易陶磁研究会

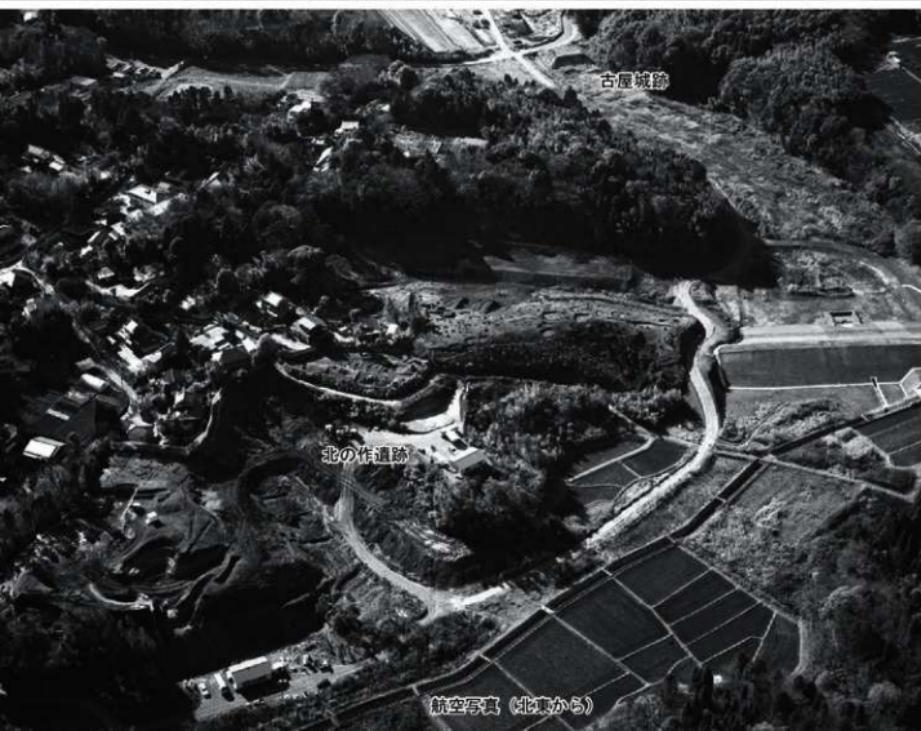


第48図 古屋城跡内現況撮影方向

# 写 真 図 版



古屋城跡周辺航空写真（約1/40,000 昭和44年撮影）







(3) 南側調査前風景（南西から）



(3) 西側調査前風景（西から）



(3) 北側調査前風景（南から）







(3) SX003 (西から)



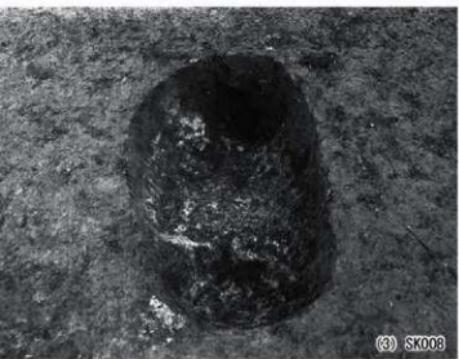
(3) SX004 (西から)



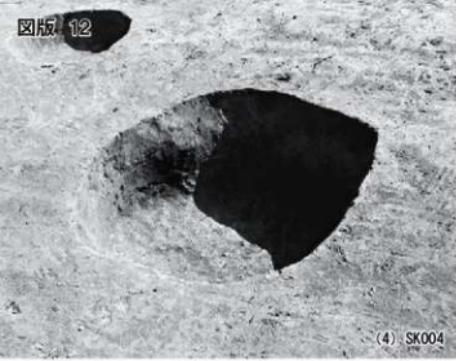
(3) SX004 セクション (北から)









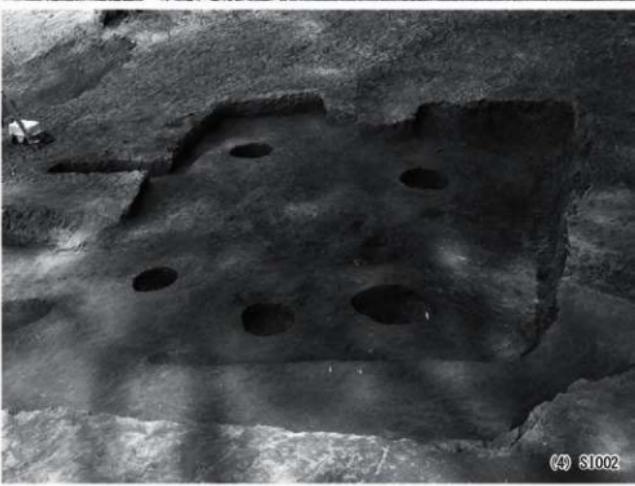




(4) SI001・SI001



(4) SI002 遺物出土状況



(4) SI002



(4) SI002 カマド



(4) SI003



(4) SI003 カマド



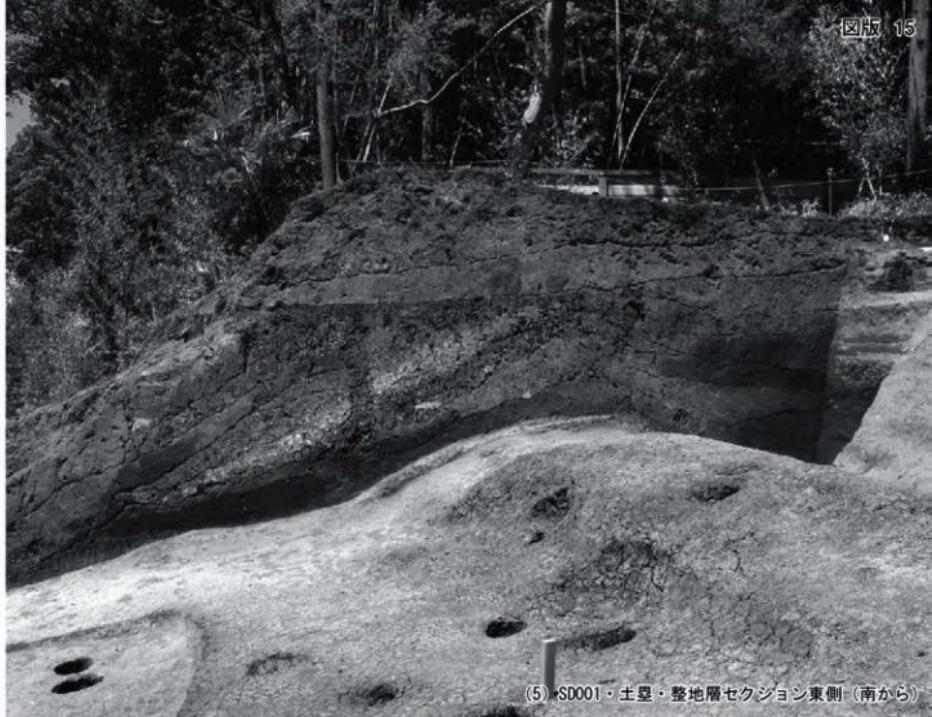
(5) 調査前風景（南西から）



(5) 調査前風景（南東から）



(5) 調査前風景（東から）





(5) SD001 北側（南から）



(5) SD001（北から）



(5) SD001 南側（北から）





(5) SI001 カマト



(5) SI001 カマト遺物出土状況



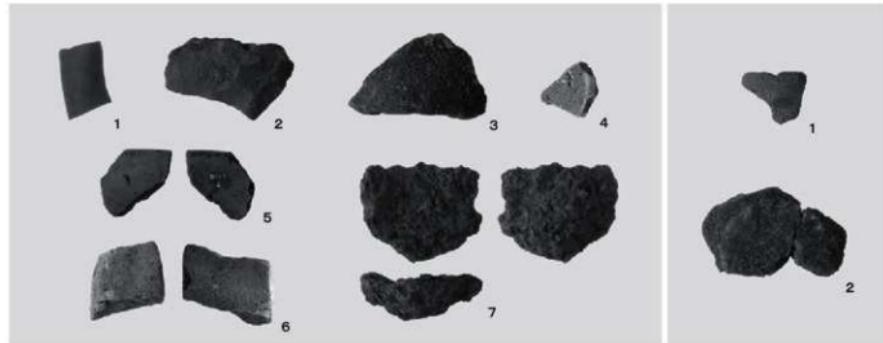
(5) SI001

(5) SI002



(5) SI003





(2) 中・近世遺物

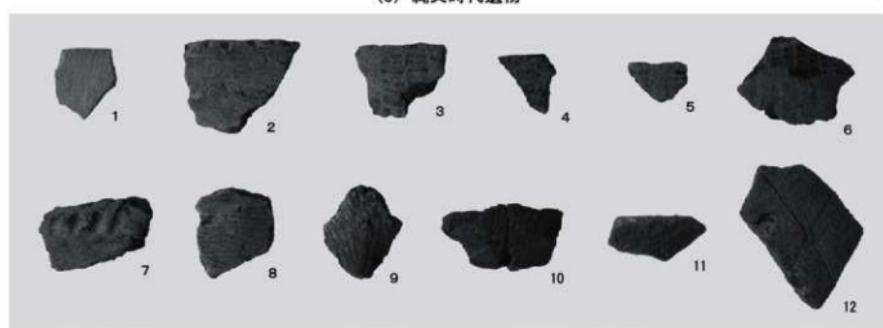
(2) SI001 出土土器



(3) 中・近世遺物



(3) 繩文時代遺物



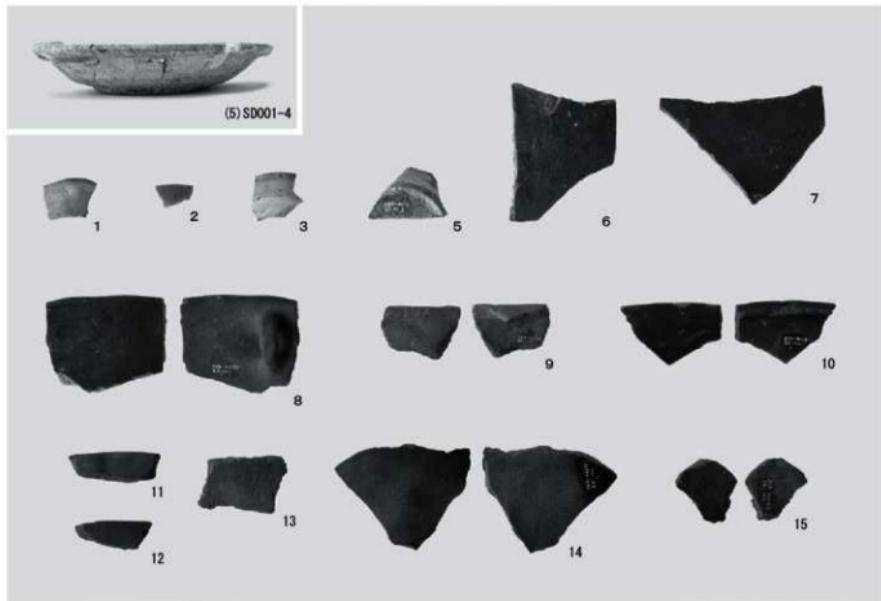
(4) 繩文土器



(4) 縄文時代石器



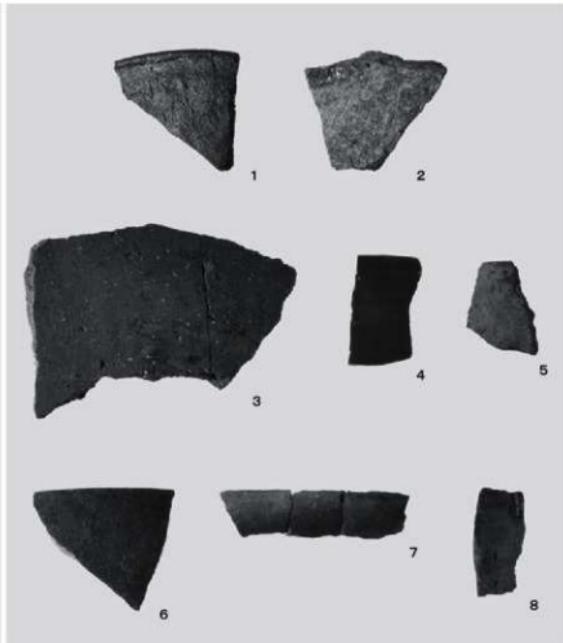
(4) 奈良・平安時代土器



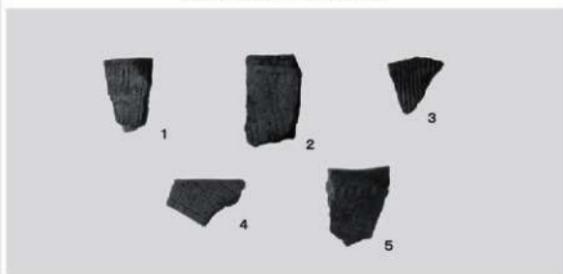
(5) SD001 出土中・近世遺物



(5) SD001 出土茶臼



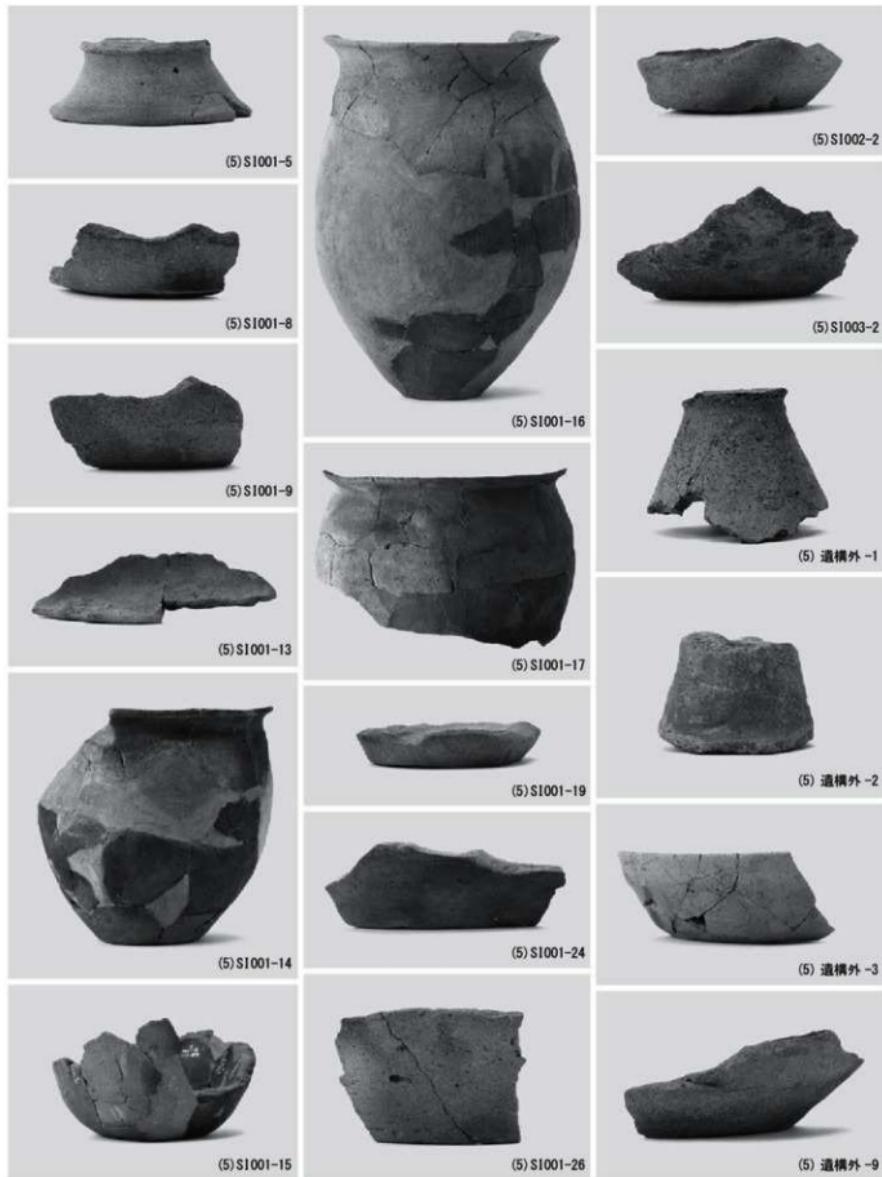
(5) 遺構外中・近世遺物



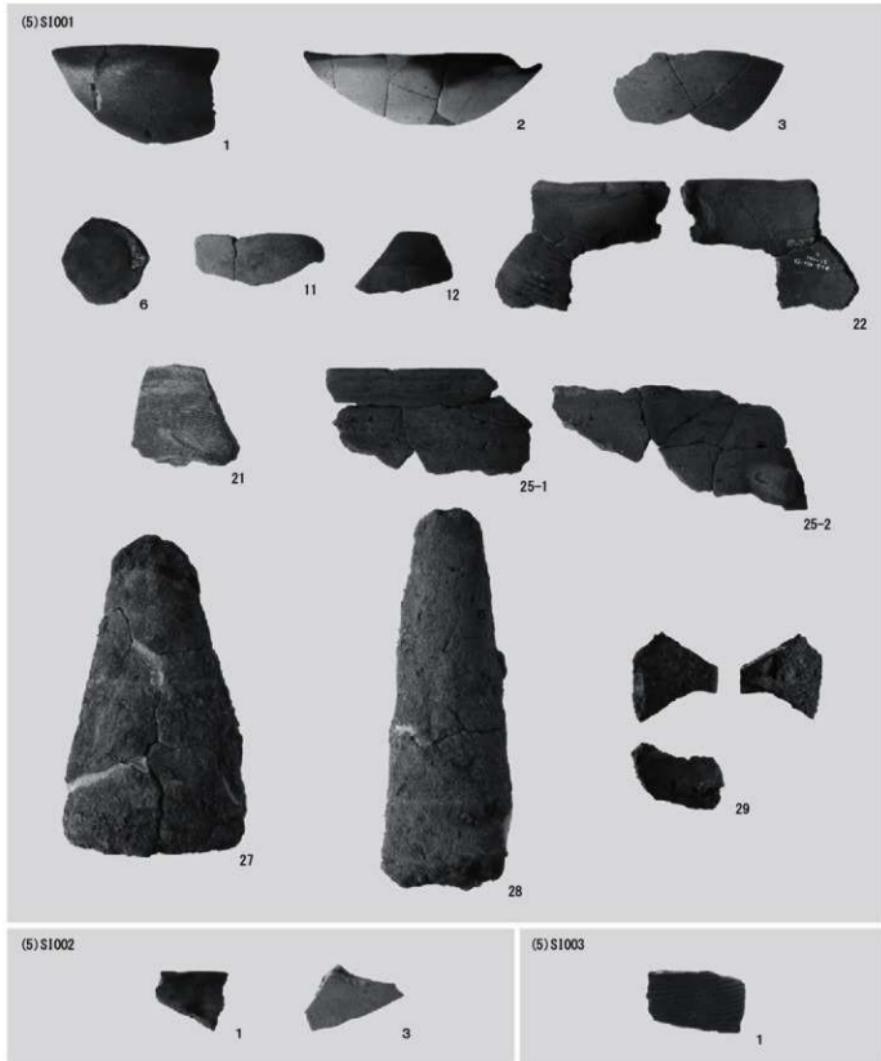
(5) 繩文土器



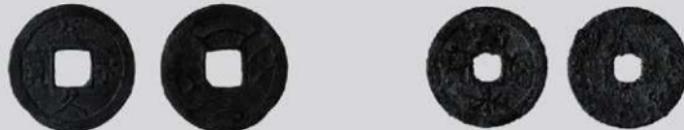
(5) 繩文時代石器



(5) 古墳・奈良・平安時代遺物 (1)



(5) 古墳・奈良・平安時代遺物 (2)



錢 貨 (調査区不明、表探)



①遠景（北西から）



②主郭内（南から）



③主郭北西部（南西から）



④主郭北側空堀（南東から）



⑤北部曲輪（南東から）



⑥主郭北西部（東から）



⑦西側腰曲輪等（南東から）



⑧東側腰曲輪等（南東から）

報 告 書 抄 錄

ふりがな	よつかいどうしこやじょうあと
書名	四街道市古屋城跡
副書名	物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書
卷次	XXIII
シリーズ名	千葉県教育振興財團調査報告
シリーズ番号	第761集
編著者名	糸川道行・木原高弘・田村 隆・香取正彦
編集機関	公益財團法人千葉県教育振興財團
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809-2 TEL.043-424-4848
発行年月日	西暦 2016年9月9日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
古屋城跡	四街道市物井 字北作1119-1 ほか	12228	022	35度 41分 33秒	140度 11分 49秒 (世界測地系)	19981201～ 20020107～ 20041104～ 20070903～ 20150513～ 19981225 20020128 20041216 20070928 20150731	900m <sup>2</sup> 2,480m <sup>2</sup> 2,732m <sup>2</sup> 1,250m <sup>2</sup> 1,468m <sup>2</sup>	独立行政法人都市再生機構物井地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
古屋城跡	包蔵地 集落跡	縄文時代 古墳時代	土坑	12基	縄文土器・石器 土師器	城館跡については、15世紀後半とみられる古い段階の障子堀が検出された。
		奈良・平 安時代	堅穴住居跡	3軒		
	城館跡	中世	堅穴住居跡 掘立柱建物跡 地山整形跡	4軒 1棟 8か所	土師器・須恵器 貿易陶磁・国産陶器・ 在地土器・石製品	
			空堀 土塁 溝状遺構 柵列 堅穴状遺構 陥穴 粘土探掘坑 土坑	1条 1条 1条 1基 1基 4基 1か所 10基		

要約	中世前期から戦国期にかけて物井地域を支配した領主層の本城とみられる中世城郭の一部を調査した。主郭南西側端からは3時期にわたる防禦施設が検出された。1期は地山を掘り込んだ障子堀と外側の土塁、2期は障子堀等を埋めて構築した築堀塁・土塁、3期は大規模に盛土して曲輪面をかさ上げした上に現況でみられる土塁を築いていた。15世紀後半～16世紀代前葉に施工・改修されたとみられる。なお、築城以前の古墳時代～奈良・平安時代の集落等も検出された。
----	---

千葉県教育振興財團調査報告第 761 集

## 四街道市古屋城跡

- 物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書 XX III -

---

平成 28 年 9 月 9 日発行

編 集 公益財團法人 千葉県教育振興財團

発 行 独立行政法人 都市再生機構  
首都圏ニュータウン本部  
東京都新宿区西新宿 6-5-1

公益財團法人 千葉県教育振興財團  
四街道市鹿渡 809 番地の 2

印 刷 株式会社 エリート情報社[印刷出版局]  
成田市東和田 415-10

---